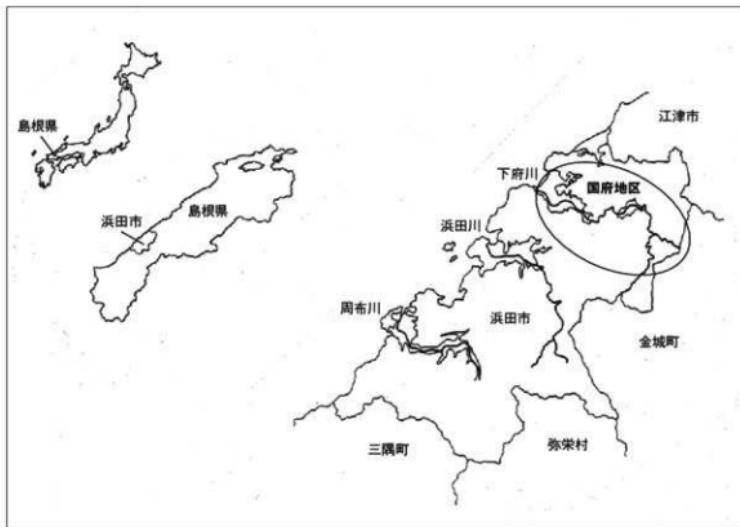


浜田市遺跡詳細分布調査 -国府地区 I-

平成11年度～13年度 市内遺跡発掘調査報告書



2002年 3月

島根県浜田市教育委員会



卷頭図版1 国府地区遠景



卷頭図版2 下府平野遠景(1)



卷頭図版3 下府平野遠景 (2)



卷頭図版4 三宅地区遠景



卷頭図版5 半場地区(仕切遺跡)T28



卷頭図版6 半場口古墳群全景



卷頭図版7 半場口2号墳側壁抜取痕検出状況



卷頭図版8 半場口古墳群遠景

序

浜田市教育委員会では石見国府跡などの重要遺跡を確認するため、国庫補助事業を受けて平成11年度から13年度にかけて浜田市上府町・下府町での分布調査・試掘確認調査を実施いたしました。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め多くの遺跡が存在しています。所在地は確定していませんが石見国府も存在したと考えられており、古代から中世にかけての石見地域の中心地であります。当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うためこれまで石見国分寺跡・下府庵寺跡・古市遺跡・横路遺跡・川向遺跡と発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ております。

今回の調査の結果、石見国府跡は確認できませんでしたが、新たに確認された秋ヶ平遺跡・千足遺跡、遺跡の様相が明らかになった横路遺跡・仕切遺跡・半場口2号墳などいずれも国府地区の歴史を考える上で重要な調査となりました。

本書はこれらの調査結果と国府地区の遺跡を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用するための基礎資料としてまとめたものです。この資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた浜田市文化財審議会会长の桑原韶一先生をはじめとする諸先生方、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から調査に御協力いただきました地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成14年 3月

浜田市教育委員会

教育長 竹中 弘忠

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成11年度から平成13年度にかけて国庫・県費補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業の報告書である。事業は試掘確認調査と分布調査を実施し、本報告書は試掘確認調査の結果を中心としたものである。分布調査の結果は『島根県遺跡地図（石見編）』へ反映させている。

2. 調査は以下の組織で行った。

調査主体 浜田市教育委員会教育長 竹中弘忠

調査指導 石井悠（宍道中学校教頭 昭和52～54年度石見国府推定地調査担当）平成11年度

中村唯史（島根県景観自然課）平成11年度

桑原韶一（浜田市文化財審議会長・島根県文化財保護指導員）平成11・12年度

島根県教育委員会 文化財課

調査員 桧原博英（浜田市教育委員会文化振興課文化財係主任主事）

事務局 浜田市教育委員会文化振興課文化財係

文化振興課長 桑田 嶽

文化財係長 森 賢司（平成11年度）横田良宏（平成12年度～）

主任主事 原 裕司

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

調査協力

（平成11年度）今田登喜江、宇野廣、大崎正廣、沖田スエノ、勝田計子、金山明仁、河野希賢、坂本末一、佐々木典雄、佐々木ハル子、慈地俊信、三浦正成、三浦松太郎、宮本保明、山崎朝信、横田睦子、吉本操、若本稔雄

（平成12年度）小林正徳、佐々木温美、慈地義夫、半場利定、半場幸徳、三浦忠幸、道端恒雄、宮本正子、森下敏子、森下英正

（平成13年度）川崎美佐子、佐々木孝雄、山崎悦雄

西尾克己・間野大丞（島根県埋蔵文化財調査センター）、梅木茂雄（江津市教育委員会）、

金子健一（瀬戸市埋蔵文化財センター）

調査参加

池田又次郎、岩本一男、上野由美恵、勝田孝幸、小林正徳、佐々木一長、柴田亜希子、清水義三、田淵義明、中田貴子、中田洋子、中村忠男、中村政雄、半場利定、宮本徳昭、山田ゆう子、吉田安男

4. 横路地区(T10)・杣ヶ平遺跡(T24)の花粉・珪藻分析は川崎地質株式会社に委託して実施した。本報告書には国府地区におけるこれまでの分析結果を総合した考察を掲載している。

5. 基準点設置は株式会社ワールドへ委託して実施した。挿図の方位は磁北で示しており、国土調査法による第III座標系の軸方向から約6° 5' 西へ振った方向である。

真北は各地区でばらつきがあるが、平均で約1' 34" 東へ振った方向である。

6. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。

7. 本書の執筆編集は桜原が行った。

本文目次

I. 調査に至る経緯と経過	1
II. 国府地区の遺跡と歴史的環境	2
1 概要	2
2 周辺の遺跡	8
III. 試掘確認調査の概要	1 6
1 横路地区（横路遺跡）	1 6
2 清水地区（枝ヶ平遺跡）	2 7
3 上ノ浜地区（千足遺跡）	3 3
4 半場地区（仕切遺跡・半場口2号墳）	3 6
5 三宅地区	4 8
IV. 小結	5 1
V. 横路地区T10（横路遺跡）・清水地区T24（枝ヶ平遺跡）における微化石分析	6 1

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株）

巻頭図版目次

巻頭図版 1 国府地区遠景	巻頭図版 2 下府平野遠景（1）
巻頭図版 3 下府平野遠景（2）	巻頭図版 4 三宅地区遠景
巻頭図版 5 半場地区（仕切遺跡）T28	巻頭図版 6 半場口古墳群全景
巻頭図版 7 半場口2号墳側壁抜取検査出状況	巻頭図版 8 半場口古墳群遠景

挿図目次

第1図 国府地区周辺図(1)	第2図 国府地区周辺図(2)
第3図 周辺遺跡出土遺物実測図	第4図 前場紙漉遺跡確認調査結果図
第5図 前場紙漉遺跡出土遺物実測図	第6図 川向遺跡確認調査結果図
第7図 調査区設定図	第8図 T1～T7・T9～12土層図
第9図 T8・T14・T18実測図	第10図 T14周辺図
第11図 平成11年度調査（横路遺跡・半場地区）出土遺物実測図	第12図 T24（枝ヶ平遺跡）実測図
第13図 T24（枝ヶ平遺跡）出土遺物実測図	第14図 T25・T26（千足遺跡）土層図
第15図 T25・T26（千足遺跡）出土遺物実測図	第16図 半場地区周辺図
第17図 T19・T27・T28実測図	第18図 T29・T30・T33・T35・T37実測図
第19図 T36・T38・T39実測図	第20図 T27～T39（仕切遺跡）・半場口2号墳出土遺物実測図
号墳出土遺物実測図	
第21図 T40（半場口2号墳）実測図	第22図 三宅地区周辺図
第23図 三宅地区切図	第24図 T42・T43・T44土層図
第25図 国府地区調査成果図	

表 目 次

表 1 国府地区遺跡概要	表 2 前場紙漉遺跡出土遺物破片点数表
表 3 横路地区出土遺物破片点数表	表 4 横路地区出土遺物觀察表(1)
表 5 横路地区出土遺物觀察表(2)	表 6 清水地区出土遺物破片点数表
表 7 清水地区出土遺物觀察表(1)	表 8 清水地区出土遺物觀察表(2)
表 9 上ノ浜地区出土遺物破片点数表	表 10 上ノ浜地区出土遺物觀察表
表11 半場地区出土遺物破片点数表	表12 半場地区出土遺物觀察表
表13 三宅地区出土遺物破片点数表	表14 石見国府推定地一覧
表15 国府地区調査結果概要	

図 版 目 次

図版1 横路遺跡	図版2 枇ヶ平遺跡	図版3 千足遺跡
図版4 横路地区遠景	図版5 半場地区遠景	図版6 1947年極東米空軍撮映空中写真
図版7 前場紙漉遺跡遠景	図版8 前場紙漉遺跡T1	図版9 前場紙漉遺跡T11
図版10 川向遺跡遠景	図版11 川向遺跡T11	図版12 川向遺跡T11北側
図版13 川向遺跡T11・P2遺物出土状況		図版14 中ノ古墳石室内部
図版15 T1	図版16 T2	図版17 T3
図版18 T4	図版19 T5	図版20 T6
図版21 T7	図版22 T8	図版23 T9
図版24 T10	図版25 T11	図版26 T12
図版27 T13	図版28 T14	図版29 T14土層
図版30 T18	図版31 T18木質出土状況	図版32 清水地区
図版33 T20	図版34 T21	図版35 T22
図版36 T23	図版37 T24	図版38 T24杭列・石敷検出状況
図版39 T25	図版40 T26	図版41 T26上層
図版42 T26下層	図版43 T15	図版44 T16
図版45 T17	図版46 T19	図版47 T27
図版48 T28	図版49 T28土層	図版50 T29
図版51 T30	図版52 T31	図版53 T32
図版54 T33	図版55 T34	図版56 T35
図版57 T36	図版58 T37	図版59 T38
図版60 T39	図版61 半場口2号墳奥壁	図版62 半場口古墳群遠景
図版63 T40-1	図版64 T40-1奥壁掘形検出状況	図版65 T40-1遺物出土状況
図版66 T40-1側壁抜取痕検出状況	図版67 T40-2	図版68 T40-2奥壁掘形・裏込石検出状況
図版69 T40-3	図版70 T40-4	図版71 T40-5
図版72 T41	図版73 作業状況	図版74 半場口1号墳
図版75 半場口1号墳石棺	図版76 T42	図版77 T43
図版78 T44	図版79 出土遺物 (1)	図版80 出土遺物 (2)
図版81 出土遺物 (3)	図版82 出土遺物 (4)	

I. 調査に至る経緯と経過

浜田市東部の国府地区には石見国府が存在したとされるが、その所在は確定されていない。開発事業に伴い、国府地区でも古市遺跡・横路遺跡など古代から中世の大集落が確認されたため、今後の開発に対応するためにも石見国府跡も含めて国府地区的遺跡の把握が必要になった。このため、浜田市教育委員会では国庫補助事業を受けて国府地区的試掘確認調査、分布調査を平成11年度より3カ年計画で実施することとなった。

平成11年度は横路地区・半場地区の試掘調査及び周辺の分布調査を実施した。横路地区は開発事業に伴って一部発掘調査（横路遺跡）が行われており、範囲確認の調査を行った。各調査区から遺物が出土し、特に土器土地区として以前発掘調査を行った地点に近い調査区T14からは多くの中世の遺物が出土した。半場地区は河川に近い低地であることもあり、顯著な遺構・遺物は見つからなかった。

平成12年度は下府卸売商業団地周辺（清水地区）、昨年の分布調査で確認された下府市営住宅東側の千足遺跡（上ノ浜地区）、市指定史跡 片山古墳のある山の裾部にある仕切遺跡・半場口古墳群（半場地区）の試掘確認調査を実施した。いずれの地区でも遺物が出土し、清水地区では新たに枕ヶ平遺跡を確認し、古代から中世の遺物が出土した。半場地区では仕切遺跡で古代から中世の遺物と建物跡を確認した。また、半場口2号墳とされていた巨石の周辺を調査した結果、石材の抜取痕を確認し、横穴式石室をもつ古墳であったことが再確認された。国府に関わる遺構・遺物は確認されなかった。

平成13年度は周辺の分布調査と上府町三宅地区の試掘調査を行い、平成11～13年度分の調査報告書の作成を行った。

3カ年の国府地区的調査では国府跡は確認できなかったが、下府川沿いの平野部の状況を確認することができた。また、新たな遺跡の発見と各遺跡の調査結果は今後の研究の基礎になると考えられる。

平成11年度調査日程

- 平成12年2月10日 現地調査開始 3月16日 石井先生・桑原先生調査指導
3月17日 県教委文化財課 守岡主事調査指導 3月18日 中村先生調査指導
3月31日 現地調査終了

平成12年度調査日程

- 平成12年11月13日 現地調査開始 12月15日 県教委文化財課 植 文化財保護主事 調査指導
平成13年1月19日 桑原先生調査指導 1月27日 現地説明会開催
1月31日 現地調査終了 2月1日～3月30日 遺物整理

平成13年度調査日程

- 平成13年5月28日～平成14年3月29日 3カ年分の調査報告書作成・遺物整理・分布調査
10月1日 現地調査開始 10月19日 現地調査終了
平成14年3月5日 県教委文化財課 植 文化財保護主事 調査指導

Ⅱ. 国府地区的遺跡と歴史的環境

1. 概要

浜田市は石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。

国府地区は浜田市の東部にあたり、遺跡は数としては少ないが、国指定史跡石見国分寺跡・県指定史跡石見国分尼寺跡などが所在する。古代から中世にかけての石見国の中心と考えられ「那賀郡伊甘郷」に属す。二級河川の下府川によって形成された小規模な平野とその北部に発達した砂丘地と台地からなる。前述の国分僧寺・尼寺は台地上にあるのに対して、国指定史跡下府庵寺塔跡や市指定史跡片山古墳は平野付近にある。

現在、旧石器時代の遺跡は知られておらず、縄文土器片が伊甘神社脇遺跡・千足遺跡で見つかっている。行政区では江津市に入るが周辺では波子遺跡が縄文時代中期以降の代表的な遺跡である。黒曜石の石器が浜伊場遺跡・黒曜石剥片が大平遺跡・川向遺跡で見つかっている。

弥生時代

伊甘神社脇遺跡・下府庵寺跡・古市遺跡・上府遺跡などで遺物が確認されている。川向遺跡では環状石斧や弥生時代終末の木偶が見つかっている。上条遺跡では大正時代に扁平紐式製盞櫛文銅鐸(Ⅲ-1式)が2個体発見されている。

古墳時代

前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳は横穴式石室と考えられる石組が残っている。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳、横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳があり、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している。住居跡は確認されていないが、川向遺跡や伊甘神社脇遺跡、江津市との境の砂丘地に位置する大平浜遺跡・越岸遺跡では古墳時代～古代の須恵器・土師器が見つかっている。

古代

石見国府跡は横路地区・伊甘神社脇遺跡・上府遺跡の3地点での推定地調査が行われたが、所在は確定されていない。奈古田窯跡は須恵器窯跡で、中心部分は烟により破壊されていると考えられる。白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府庵寺が建立され1町四方(約109m)の寺域が想定されている。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、1町程の寺域が想定されていた。塔跡の一部などが調査され、白鳳期の銅造誕生釈迦立像が出土している。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が位置している。また、国分寺から約200m北西の谷を隔てた前場紙漉遺跡でも須恵器・瓦の散布が見られる。石見国分尼寺は現在の国分寺境内と考えられ、「比丘尼所」などの地名が残っている。石見国分寺と同文の軒瓦、白鳳期の銅造誕生釈迦立像が出土している。

中世以降

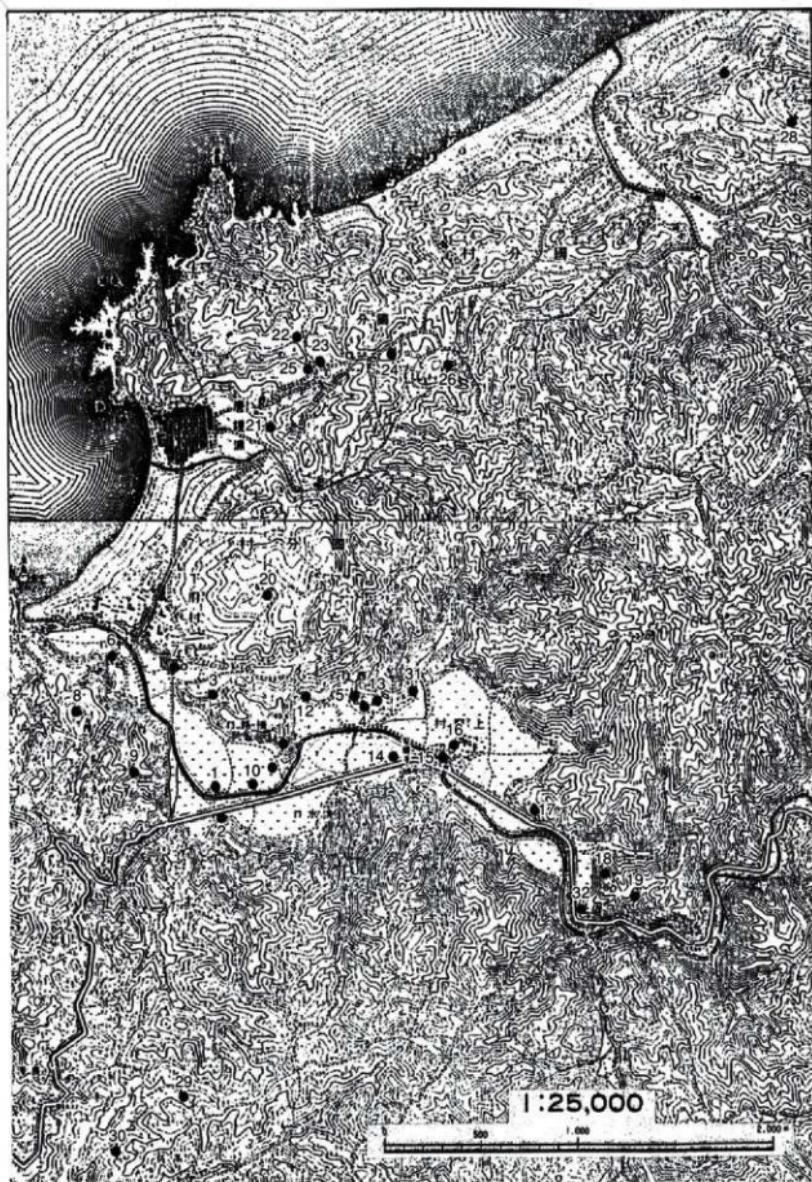
古代からの国府は新たに「府中」として発展したと考えられる。府中の範囲は現在の上府・下府を中心とした地域と推定され、平安時代末から南北朝期まで栄えたと考えられる。古市遺跡・横路遺跡・伊甘神社脇遺跡・上府遺跡・下府庵寺跡・仕切遺跡・千足遺跡などで遺構、遺物が確認されている。現在の河口付近の川向遺跡や砂丘地である大平遺跡・上府(国府)八幡宮下の宮宅山遺跡からも遺物が確認されている。笠山城跡・八反原城も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。

また、益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、白口大明神、上府（国府）八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縱長の条理の跡が見られる。

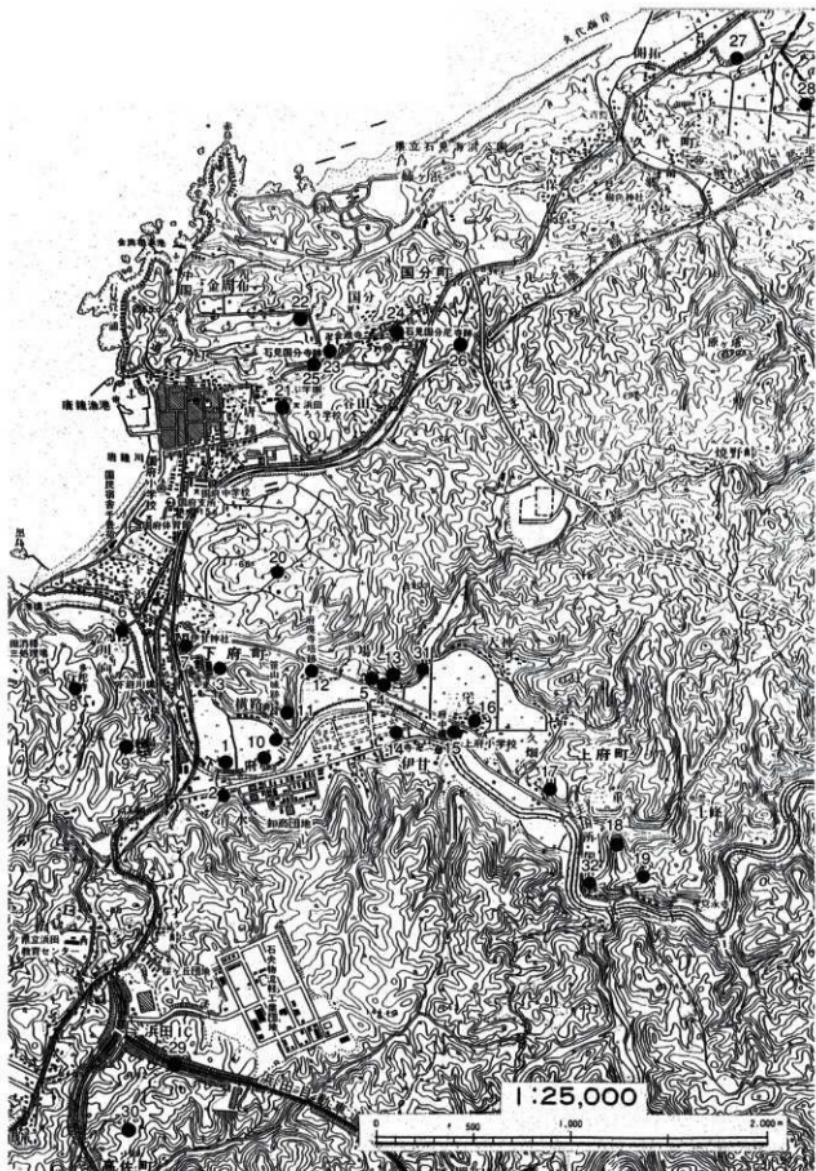
なお、江戸時代末から昭和40年代頃までこの地域では「石見焼」と呼ばれる陶器と瓦が大量に焼かれていた。窯跡が現在も各地で残存しており、宇野町長東坊師窯跡（大正時代頃・丸物窯）・上府八反原窯跡（大正時代終わり～昭和40年操業・丸物窯）が発掘調査され、近現代の資料も蓄積されている。

番号	遺跡名	種別	概要
1	横路遺跡（土器土地区）	集落跡	中世・掘立柱建物跡・墓
2	杭ヶ平遺跡	散布地	須恵器・土師器・杭列
3	千足遺跡	集落跡	縄文～中世
4	仕切遺跡	散布地	弥生～中近世・掘立柱建物跡
5	半場口古墳群	古墳群	1号墳・箱式石棺 2号墳・横穴式石室
6	川向遺跡	散布地	弥生～中世・木製・環状石斧
7	伊神社脇遺跡	集落跡	縄文～中世・柱穴
8	多陀寺遺跡	散布地	須恵器・土師器
9	中ノ古墳	古墳？	横穴式石室？
10	横路遺跡（原井ヶ市地区）	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
11	笛山城跡	城跡	曲輪・堀切
12	下府庵寺跡	寺院跡	塔心礎・金堂跡・瓦
13	片山古墳	古墳	方墳・横穴式石室
14	古市遺跡	集落跡	古代～中世・掘立柱建物跡・井戸跡
15	宮宅山遺跡	散布地	須恵器・土師器・瓦
16	上府遺跡	集落跡	弥生～中世・柱穴
17	新延遺跡	散布地	須恵器
18	八反原城跡	城跡	曲輪・堀切・土塁
19	上条遺跡	祭祀遺跡	銅鐸2個体出土
20	大平遺跡	散布地	弥生～中世・黒曜石・消滅
21	浜田ろう学校敷地古墳	古墳？	石棺・鉄器？・消滅
22	前場紙漉遺跡	散布地	須恵器・土師器・陶磁器・瓦
23	石見国分寺跡	寺院跡	塔跡・柱穴・瓦・誕生仏
24	石見国分尼寺跡	寺院跡	柱穴・瓦・誕生仏
25	石見国分寺瓦窯跡	瓦窯跡	平窯・瓦
26	奈古田窯跡	須恵器窯跡？	須恵器
27	大平浜遺跡	散布地	土師器・須恵器
28	越坪遺跡	散布地	土師器・須恵器
29	浜伊場遺跡	散布地	土師器・須恵器・石礫
30	菖蒲追遺跡	散布地	磨製石斧・須恵器
31	東遺跡	散布地	須恵器
32	上府八反原窯跡	石見焼窯跡	1920年代～1965年操業・丸物窯

表1 国府地区遺跡概要



第1図 国府地区周辺図(1)・明治34年発行 番号は表1に対応



第2図 国府地区周辺図(2)・平成8年発行 番号は表1に対応

主要参考文献

横路遺跡（土器地区）

浜田市教育委員会 1997 「横路遺跡（土器地区）」
柳原博英 1998 「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
周辺の確認調査結果を本報告書に収録

松ヶ平遺跡・千足遺跡・仕切遺跡・半塙口古墳群

本報告書に収録

川向遺跡

浜田市 1973 「浜田市誌」下巻

浜田市教育委員会 2000 「川向遺跡」

周辺の確認調査結果を本報告書に収録

伊甘神社脇遺跡

島根県教育委員会 1979 「石見国府推定地調査報告Ⅱ」

浜田市教育委員会 2000 「川向遺跡」

多陀寺遺跡

本報告書に収録

中ノ古墳

国府町文化財審議会 1963 「国府町の文化財」

大正7年に発掘し、石棺・石斧・弥生土器・高杯・椀などが混在状態で出土したとされる。

現地の横穴式石室状の石組は天井石が落ち込んでいるが、奥幅約3m・長さ約2mの平面形で、長辺に入口部がつく。石材の組み方が各室で大きく異なり、周辺には石造物も散乱していることから古墳の石室としては疑問が残る。

横路遺跡（原井ヶ市地区）

浜田市教育委員会 1998 「横路遺跡（原井ヶ市地区）」

柳原博英 1998 「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会

笛山城跡

島根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告Ⅲ」

下府魔寺跡

島根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告Ⅲ」

佐々木徳三郎 1981 「下府魔寺跡の宝塔碑文について」

『亀山』第8号 浜田市文化財愛護会

前島己基 1986 「山陰における初期造寺活動の一側面」

山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」

同記念論集刊行会

浜田市教育委員会 1990 「下府魔寺跡発掘調査概報」

浜田市教育委員会 1992 「下府魔寺跡」

浜田市教育委員会 1993 「下府魔寺跡」

片山古墳

W・ガウラント 1899 「日本古墳文化論」

渡辺貞幸 1979・1980 「ガウラント氏と山陰の古墳」

「八雲立つ風上記の丘No.37、39、40」

大谷晃二 1993 「片山古墳測量調査報告」

「下府魔寺跡」浜田市教育委員会

古市遺跡

浜田市教育委員会 1992 「古市道路発掘調査概報」

原宿司1992 「浜田市・古市遺跡の遺物」

『松江考古』第8号 松江考古学談話会

浜田市教育委員会 1995

『伊丹土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』

柳原博英 1998 「島根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」

『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会

柳原博英 2001

「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」

『松江考古』第9号 松江考古学談話会

宮宅山遺跡

島根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告Ⅲ」

本報告書に採取品を掲載

上府遺跡

島根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告Ⅲ」

石井悠1992

「浜田市・石見国府跡推定地出土の中国製陶器」

『松江考古』第8号 松江考古学談話会

新延遺跡

本報告書に採取品を掲載

八反原城跡

桑原彰1995 「中世の宇野村をさぐる

－小字名は歴史を語る－」

『亀山』第22号 浜田市文化財愛護会

本報告書に周辺採取品を掲載

上条遺跡

直良信夫 1932 「石見上条村発見銅鋌の出土状態」

『考古学雑誌22-2』

のち直良信夫1991 「近畿古代文化論考」木耳社に再録

東京国立博物館 1981

『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇（金属器）』

島根県教育委員会・朝日新聞社 1997

「古代出雲文化展 - 神々の国 悠久の遺産 -」

島根県教育委員会 2001 「上条遺跡」

「忠良遺跡 堂々根塚跡 上条遺跡」

水戸（三戸）神社跡（上条古墳） 立女遺跡

一般国道9号線江津道路建設予定地内

理蔵文化財発掘調査報告書IV』

大平遺跡

現在の砂丘面に弥生土器・須恵器・貿易陶磁片が散布しており、採砂事業に伴い平成7年に発掘調査を行った。調査の結果、既に遺物包含層は大半が破壊されており、黒曜石の破片が1点出土したのみであった。

浜田よう学校敷地古墳

学校敷地造成工事の際に石棺と刀剣片が出土したといいうが詳細は不明。

前場紙漉遺跡

本報告書に概要を収録

石見国分寺跡・石見国分尼寺跡

朝枝哲實1919 「金蔵寺由緒記」

野津左馬之助1925 「島根縣史」第5巻 島根縣内務部

野津左馬之助1938 「石見国分寺」「国分寺の研究」下 考古学研究会

国府町文化財審議会 1963 「国府町の文化財」

山本清 1968 「第四節 律令制度の時代」

「新修 島根縣史」通史編一 島根県

桑原韻一1986 「金蔵寺境内（石見国分寺址）」発掘にさきわって」『郷土石見』No.17

石見郷土研究懇話会

前島己基 1986 「山陰における初期造寺活動の一側面」

- 山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
- 内田律雄 1986 「石見国分寺跡について」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
- 浜田市教育委員会 1987 「石見国分寺跡発掘調査概報」
『季刊文化財』第58号 島根県文化財愛護協会
- 浜田市教育委員会 1989 「石見国分寺跡第1期調査概報」
原裕司 1990 「石見国分寺と誕生仏」
『亀山17号』浜田市文化財愛護会
- 島根県立博物館 1990 「島根の文化財・仏像影刻篇」
内田律雄・江川幸子 1997 「石見」
『新修 国分寺の研究』第7巻 補遺 吉川弘文館
- 石見国分寺瓦窯跡**
- 近藤正1967 「古代・中世における手工業の発達」
(6) 山陰」
『日本の考古学』歴史時代(上) 河出書房新社
- 大川清 1972 「日本の古代瓦窯」
内田律雄 1986 「石見国分寺瓦窯跡」
『島根県生産遺跡分布調査報告書』
島根県教育委員会
- 奈古田窯跡**
- 川原和人 1980 「石見の須恵器窯跡」
『さんいん古代史の周辺(下)』山陰中央新報社
- 大平浜遺跡**
- 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988
『大平山遺跡群調査報告書』
江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1990
『大平山遺跡群発掘調査報告書』
- 越坪遺跡**
- 江津市教育委員会・浜田市教育委員会 1988
『大平山遺跡群調査報告書』
- 浜伊場遺跡**
- 日本道路公团広島建設局・島根県教育委員会 1985
『浜伊場遺跡』「中國横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」
- 葛瀬迫遺跡**
- 谷奥の緩斜面で須恵器(所在不明)と磨製石斧片が採取されている。
- 石見国府推定地**
- 国府推定地については諸説あり、主なものを記す。
野津左馬之助 1925 「島根縣史」第5巻 島根縣内
務部
野津左馬之助 1934 「石見國府跡」
『島根縣史跡名勝天然紀物調査報告』第6編
島根縣
- 斎藤茂吉1935 「柿本人麿補註篇」岩波書店
丸茂重「山陰道の国府」「国学院雑誌」63-2・3
国学院大學
矢富熊一郎1964 「柿本人麻呂と龜山」
益田郷土史矢富会
山本清 1968 「第四節 律令制度の時代」
『新修 島根縣史』通史編一 島根県
国府町文化財審議会 1963 「国府町の文化財」
大島幾太郎1970 「那賀郡史」旧那賀郡教育会
- 藤岡謙二郎1969 「国府」吉川弘文館
山本清1972 「第四章 古都(二)」「仁摩町誌」仁摩町
島根県教育委員会 1978 「石見国府推定地調査報告Ⅰ」
島根県教育委員会 1979 「石見国府推定地調査報告Ⅱ」
島根県教育委員会 1980 「石見国府推定地調査報告Ⅲ」
石井悠 1981 「石見国府跡を整理する」
- 石見国府跡発掘調査から -
『季刊文化財』第38号 島根県文化財愛護協会
石井悠 1982 「謎の石見国府」
『えとのす第17号』 新日本教育図書
国立歴史民族博物館1986 「国立歴史民俗博物館研究報告 第10集 共同研究「古代の国府の研究」」
石井悠 1988 「古代石見国の役所跡について」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
梨田精1987 「幻の石見国府跡と国分寺」
『亀山14号』浜田市文化財愛護会
国立歴史民族博物館1989 「国立歴史民俗博物館研究報告 第20集 共同研究「古代の国府の研究」(続)」
児島義俊1992 「馬の骨を探る」「郷土石見」No31
石見郷土研究懇話会
桑原詔一 1995 「伊賀郷の歴史的背景」
『伊賀地区区画整理事業に伴う 古市道路発掘調査概報』
浜田市教育委員会
石井悠 1996 「石見国」「国府・畿内・七道の様相 -」
日本考古学協会三重県実行委員会
宮本誠1996 「人骨・文献考」「郷土石見」No41号
石見郷土研究懇話会
東遺跡
本報告書に採取品を掲載
石見焼闇連遺跡
島根県教育委員会2001 「石見焼闇連遺跡調査報告 1
(飯田A遺跡・長東坊師窯跡)
一般国道9号線江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書・」
島根県教育委員会2001 「石見焼闇連遺跡調査報告 2
上府八反原窯跡(佐々木窯跡)
一般国道9号線江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 VI」

2. 周辺の遺跡

国府地区には多くの古代から中世の遺跡が多く分布している。これまでの分布調査・試掘確認調査で判明した各遺跡の概要を報告する。

旧下府小学校出土土器（第3図・1）

大正3年7月に下府小学校の井戸を掘った際に出土したとされる須恵器有蓋高杯で、浜田高校に保管されていた。旧下府小学校は現在の下府市営住宅にあたり、周辺の伊甘神社脇遺跡・今回調査した千足遺跡と併せてこの一帯が広範囲の遺跡であることを示している。

口径11.4cm・器高12.4cm・底径12.2cmを測り、暗灰色を呈す。坏部下位にはカキメが残り、脚部には幅5mmの断面三角形状の沈線が2本施される。上の沈線は1周していない。

多陀寺遺跡（第3図・2.3.4）

多陀寺境内地内の北西の山頂部では、表土がほとんどなく地山が露出しており、須恵器や土師器の破片が散布している。付近ではかつて銅製経筒が出土したが焼失したため現存しない。

(2)は須恵器坏底部で底径9.8cmを測り、暗灰色を呈す。底部はヘラ切りにより切り離され、丸みをもった外開きの高台がつく。(3)は須恵器壺類の底部で底径12.6cmを測り、暗青灰色を呈す。平底で外面最下位はヘラケズリが施される。内面は浅いロクロナデが施される。(4)は土師器皿類の底部で底径4.2cmを測り、淡黄褐色を呈す。底部は回転糸切りにより切り離される。

宮宅山遺跡（第3図・5.6.7）

現在の上府八幡宮・上府小学校のある丘陵裾の崖面では大量の遺物が採取できる。山を造成した際の切土と考えられ、小学校建設の際には古銭が出土したといわれる。現在の採取品は大半が中世の土師器片で坏・皿があるが全形のわかるものはない。中には古代瓦片・須恵器片もあるが各1点しかない。

(5)は土師器坏類の底部で底径6.6cmを測り、淡赤褐色を呈す。底部は回転糸切りにより切り離される。(6)は土師器皿類の底部で底径3.6cmを測り、淡赤褐色を呈す。底部は回転糸切りにより切り離される。(7)は土師器坏類の底部で底径6.2cmを測り、暗赤褐色を呈す。底部は回転糸切りにより切り離され、体部は比較的上方へ立ち上がると考えられる。

東遺跡（第3図・8）

平成11年度の分布調査で仕切遺跡の東側、大歳神社下の斜面畑で須恵器坏片を採取した。現地形は斜面がきつくみえるが、推定山陰道に面していることからこのような山裾斜面にも集落が存在した可能性がある。(8)は底径8cmを測り、暗灰色を呈す。焼成は良好である。底部はヘラ切りにより切り離され、外開きの短い高台を付ける。

奈古田窯跡（第3図・9）

隣接する家には溶着した須恵器があったというが現在は道路等により破壊されたと考えられる。現在は周辺の畑で須恵器細片が採取できる。7世紀～8世紀頃の須恵器窯跡といわれる。

(9)は須恵器坏細片で、淡灰色を呈す。他には壺類の破片が採取できた。

石見国分尼寺跡（第3図・10）

史跡現状変更に伴い一部調査が行われ、現本堂の横で柱穴群が確認されている。採取品は大半が瓦片だが、須恵器の蓋片が採取されている。

(10)は輪状つまみがつく須恵器蓋の細片である。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

新延遺跡（第3図・11、12、13）

水害で山肌が崩落した際に完形の須恵器長頸壺・蓋・坏片が出土した。

(11)は須恵器蓋でつまみ径5.6cmを測り、灰色を呈す。天井部はヘラ切りにより切り離され、外開きの短い輪状つまみを付ける。(12)は須恵器坏で底径10.4cmを測り、外面暗青灰色、内面暗紫灰を呈す。底部はヘラ切りにより切り離され、外開きの低い高台を付ける。内面はロクロナデが施され、中心部には不定方向のナデが施される。(13)は須恵器の長頸壺で口径9.3cm・器高19.7cm・底径10.6cmを測り、灰色を呈す。体部外面には幅3mm程のカキメが施され、高台は長く外に開く。外面半分に自然釉がかかる。

八反原城（第3図・14）

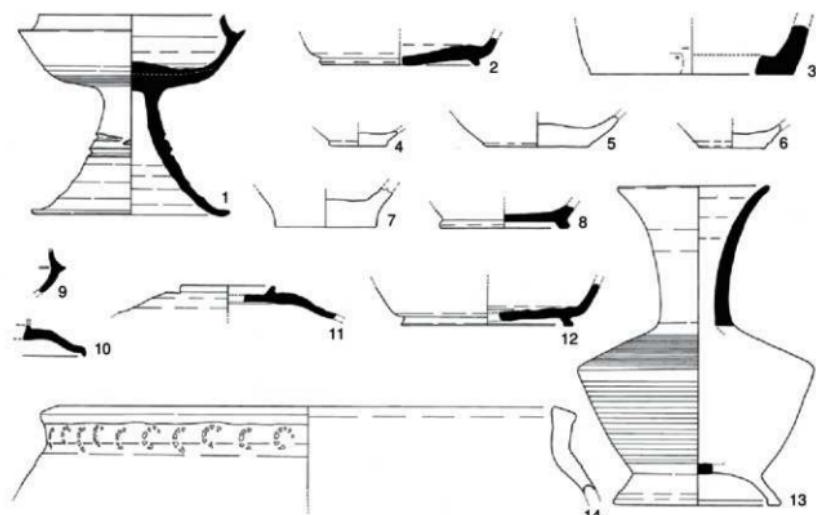
上府の平野の一番奥まった場所にある山城で小規模だが郭・掘切が明瞭に残っている。

丘陵下で瓦質土器片が採取されている。(14)は復元口径30.4cmを測り、明灰白色を呈す。口頸外面に円形花弁状のスタンプが連続して押されている。

まとうかみすき
前場紙漉遺跡（第4図・第5図）

老人保健施設新設工事に伴い国指定史跡石見国分寺跡（現 金蔵寺）の北側、谷をこえた北西側の緩斜面の分布調査を行った結果、須恵器・瓦・土師器・貿易陶磁の破片の散布が認められた。

この地域は昭和50年に土地改良事業により大幅に造成されてブドウ畑になっている。なお、浜田高校に「国分寺から谷を越えたブドウ畑付近出土」の平安時代後期の土師器が完全に近い形で所蔵されている。しかし石見国分寺周辺から遺物がもちこまれた可能性もあったため、確認調査を平成10年7月13日より7月31日まで実施した。



第3図 周辺遺跡出土遺物実測図

- 1 旧下府小学校 2～4 多陀寺遺跡 5～7 宮宅山遺跡 8 東遺跡
9 奈古田窯跡 10 石見国分尼寺跡 11～13 新延遺跡 14 八反原城跡

調査ではT1・T9・T11を中心に遺物が見つかった。T11以外は土地改良事業以前の耕作で遺物包含層は搅乱されたと考えられ、地表に遺物の散布が認められたと考えられる。

T1 2m×5mの調査区である。表土の下には地山ブロックの混じる暗褐色粘質土が堆積しており、瓦・土師器・陶磁器が見つかった。堆積状況より土地改良事業による搅乱土と考えられる。地山面では柱穴4・土壤1が確認された。柱穴の埋土は地山混じり黒色粘質土と灰色粘質土のものがあり、中から土師器の細片が見つかった。土壤は炭混じりの暗褐色粘質土が堆積しており、中から瓦・灰白色・褐色の土師器・同安窯系青磁碗の破片が見つかった。いずれも遺構上面は削平され、下部が残存していると考えられる。

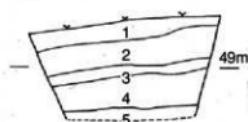
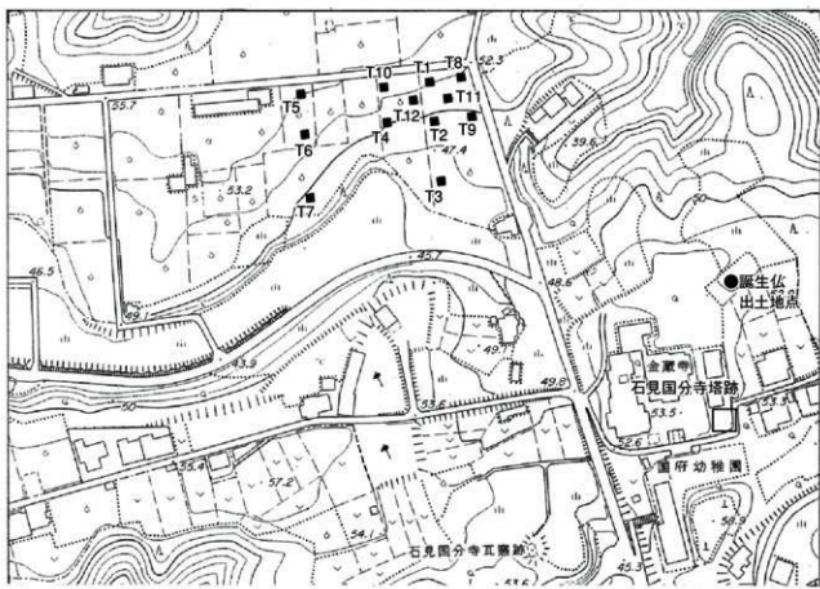
T9 1m×5mの調査区である。現地表下約35cmで土地改良事業以前の表土と考えられる暗褐色・灰褐色の砂質土を確認し、地表下約70cmで地山面を確認した。地山面で柱穴を1基確認した。埋土は地山ブロックの混じる黒色粘質土で、土師器の微細な破片が見つかった。

T11 T1とT9の中間に設定した2m×2mの調査区である。現地表下約50cmで厚さ約10cmの黒色粘質土・その下に厚さ約30cmの暗褐色粘質土を確認した。黒色粘質土からは土師器・陶磁器など中世前期の遺物、暗褐色粘質土からは瓦・須恵器など古代の遺物が大量に見つかった。なお、この2つの層は漸移的に変化しており、中間では古代と中世の遺物が混在して出土する。さらに下の地表下約90cmで地山面を確認した。緩やかに南東方向に傾斜しており、調査区北東隅で落ち込み状の遺構を確認した。埋土は黒色粘質土で、遺物は出土しなかった。

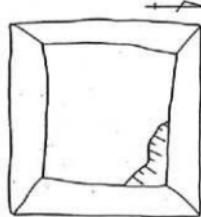
出土した遺物の全破片数は491点で、特に須恵器・古代瓦片が多い。瓦は瓦当部ではなく、丸瓦や平瓦の破片が多かった。貿易陶磁器は白磁が多く、細片のため型式は不明なものが多い。特にT11では古代から中世の遺物が多く出土した。

(第5図・1~4)は浜田高校に保管されていた土師器である。4点とも淡褐色を呈し、ほぼ同時期のものであろう。(1)は皿状の坏で口径11.6cm・器高2.9cm・底径4.8cmを測り、淡褐色を呈す。底部は回転糸切りで切り離され、内外面共に浅いロクロナデが施される。(2)は坏で口径12.2cm・器高4cm・底径4.8cmを測り、淡褐色を呈す。底部は回転糸切りで切り離され、内外面共に浅いロクロナデが施される。体部は中位にやや明瞭な段がつき、口縁端部はやや外反する。(3)は坏で口径12.4cm・器高4.2cm・底径5.2cmを測り、やや暗い淡褐色を呈す。底部は回転糸切りで切り離され、内外面共に浅いロクロナデが施される。体部は中位でやや屈折し、口縁端部は直線的になる。(4)は坏で口径11.4cm・器高4.5cm・底径4.6cmを測り、淡褐色を呈す。底部は回転糸切りで切り離され、内外面の体部下位にはロクロナデ痕が残る。口縁端部はやや外反する。

(第5図・5~10)は確認調査で出土した遺物である。(5)・(6)はT11の暗褐色粘質土(第4層)出土、(7)・(8)はT11周辺表探、(9)・(10)はT11の黒色粘質土(第3層)出土である。(5)~(8)は須恵器である。(5)は蓋で口径116.8cm・器高2.4cm・天井部径10.8cmを測り、灰色を呈す。焼成はやや不良で、重ね焼のため口縁端部は暗青灰色になる。天井部はヘラ切りで切り離されており、天井部内面に不定方向のナデが施されていることからつまみがつくものと考えられる。(6)は坏で底径9.6cmを測る。焼が悪く灰白色を呈す。底部は回転糸切りで切り離され、低い高台がつく。(7)は小型の壺類と考えられ底径9.8cmを測る。淡灰色を呈し、外面肩に自然釉がかかる。体部外面下位には浅いヘラケズリが施される。(8)も壺類と考えられ底径13.2cmを測る。淡灰色を呈し、底部内面に自然釉がかかる。内外面共にロクロナデが施される。(9)は中世の土師器の柱状高台皿で底径5.8cmを測り、淡赤褐色

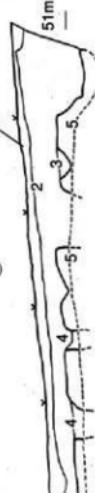


- 1 暗褐色砂質土
2 地山ブロック混じり
暗褐色粘質土
(擾乱土)
3 暗赤褐色粘土
(擾乱)
4 地山ブロック混じり
黒色粘質土
5 赤褐色粘質土(地山)



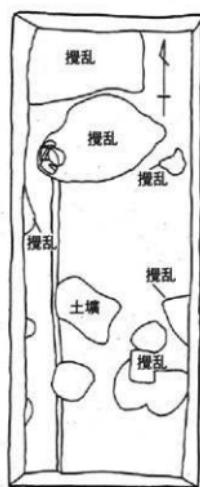
T11

- 1 暗褐色砂質土
2 灰褐色砂質土
3 黑色粘質土(中世前半の遺物)
4 暗褐色粘質土(瓦、須恵器含む・上層に土師器混じる)
5 赤褐色粘質土(地山)



0

3m



T1

第4図 前場紙漉遺跡 調査成果図

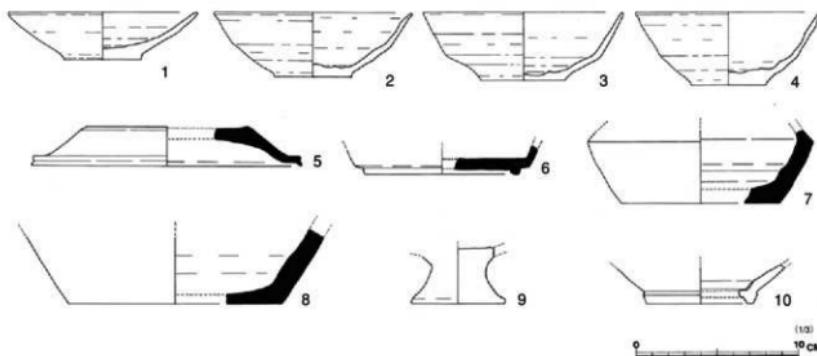
を呈する。(10)は中世前期の初期高麗青磁である。底径6.6cmを測り、素地は淡黄褐色を呈す。高台の接地部以外の内外面には淡緑褐色の釉がかかる。内面見込には明瞭な段が付き、内面段と高台接地面には砂目跡がつく。

調査の結果、西側のT4~T7一帯が削平され、T3の付近の谷部を埋めたて、現在の地形になったと考えられる。東側を基準にして造成を行った結果、T1・T9・T11を中心に遺跡が残ったのであろう。

T1・T9で遺構、T11で遺構と遺物が確認され、出土した遺物から、およそ平安時代から鎌倉時代にかけてこの地に集落が形成されていたことが明らかになった。浜田高校所蔵の土師器と同種の破片も見つかり、浜田高校所蔵品もこの遺跡の出土であることが裏付けられた。出土遺物に瓦が多かったことは石見国分寺に関連する施設が存在していた可能性があり、国分寺が機能していた時代の景観を知る上で非常に重要な調査結果といえる。

調査区	構文	弥生	古墳~古 代土師器	中世土師器			貿易陶磁器			中国 陶器	国産 陶磁器	近世~現代			計	その他	
				白	自	素	名	白	褐			白	青	白			
T1		2	4	15	76	13				1		1				112	
T2			5	6	1	6		2				5	2	2	6	35	
T4			5	2										1		8	
T6			4									1		3		8	
T7															1	1	
T8												1		3	4		
T11		16	49	67	2	110			15	1	2	1		2	1	4	270 青1
表様		8	9	7					1	2							27
計		26	76	97	79	129	0	2	16	4	2	1	0	10	2	7	465

表2 前場紙漉遺跡出土遺物破片点数表



第5図 前場紙漉遺跡出土遺物実測図

かわのこう 川向遺跡(第6図)

1999年に一部発掘調査が行われた川向遺跡から約200m下流の地点を公共下水道事業計画に伴い平成11年12月2日より平成12年1月14日まで確認調査を実施した。

調査地は下府川河口からは約200m程遡った北側に下府川、南側に丘陵がせまる小さな平野である。さらに約200m程遡った集落一帯が川向遺跡である。現標高約2.7~3.7mを測るが、対象地は水田部に既に造成土が盛ってあった。南側と山との境に若干高い畠がある。小字を調べたところ、対象地はすべて「黒瀬」であったが河口部左岸に「湊」の地名が確認された。

重機により造成土を除去して旧地表を検出し、階段状に掘削を行なった。T1~T10・T12は大きく分けて、造成土・旧地表土(水田の土)・黒色泥層・砂層と堆積していた。T4・5・9・10では黒色泥層から土器や瓦の破片・木製品が数点みつかった。黒色泥層中には自然木が多い。また山際に設定したT11では堀立柱建物跡・井戸が確認され、建物は平安時代末頃と推定された。

T4 標高約3.13mの平地に設定した8m×8mの調査区である。旧地表土上面は標高約1.285m、黒色泥層上面は標高約0.535m・砂層上面は標高約-0.765mで確認された。黒色泥層中から古墳時代の土師器壺片が出土した(第6図・3)。また、黒色泥層を切って噴砂が確認された。黒色泥層の上位・標高0.111m付近に直径1~2cm大の軽石が多く混じっており、漂着軽石層と考えられる。

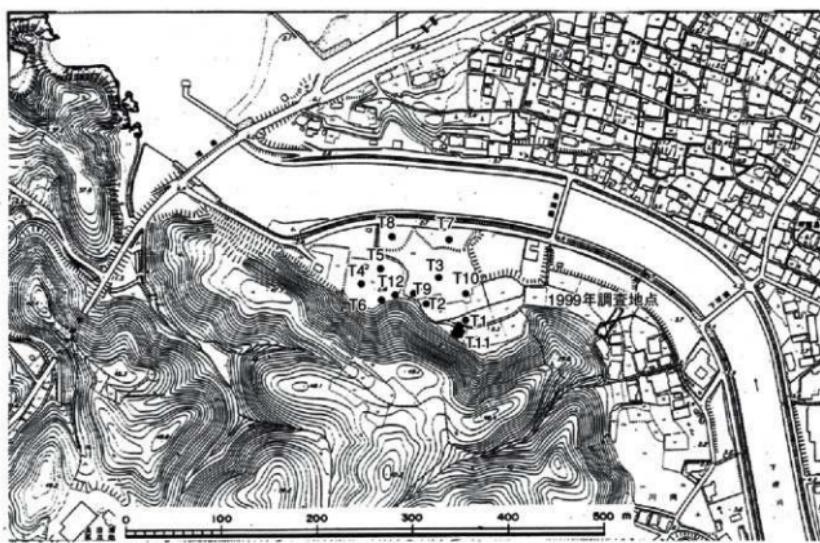
T10 標高約3.42mの平地に設定した8m×8mの調査区である。旧地表土上面は標高約0.746m、黒色泥層上面は標高約0.249m・砂層上面は標高約-0.124mで確認された。黒色泥層を切って噴砂が確認された。黒色泥層下位標高-0.054mで瓦片(第6図・1、2)が7点見つかった。

T11 標高約2.83mの平地に設定した15m×6mの調査区である。山と低地の間で一段高く、現状は畠であった。地表下約1.7m・標高約1.5mの山側に浅黄色の平坦面が認められ、柱穴と考えられる遺構が検出された。穴は径20~30cmを測り、調査区東側にまとまって検出された。その内の2基(P1・P2)を調査したが、深さ約21cm程を測り2m×3m以上の堀立柱建物が復元できた。

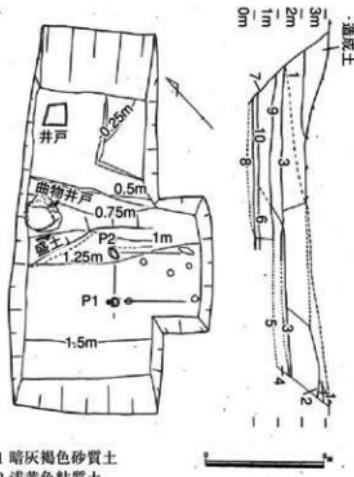
また、遺構検出面下の調査を行なった結果、浅黄色粘質土(第4層)は厚さ15cmほどで山側の平坦面にあり、下に暗褐色粘質土(第5層)・黄色砂(第6層)と堆積していることが判明した。また、黒色泥層(第7層)は黄色砂下までつづいていることが分かった。このことから、浅黄色粘質土は建物のための整地土層の可能性がある。遺構検出面上層の暗灰褐色粘質土(第3層)からは青磁の細片が2点見つかった。

調査区の北東半分では黒色泥層が確認され、北隅に一辺1m程の方形横板組の井戸跡が確認された。また、調査区中央に1.5mの巨石が確認され、下から曲物井戸が確認された。直径65cm・深さ80cm以上の中型のもので掘形は直径75cm程の円形であった。この一帯は海に近いこともあってか井戸を掘って水田の水を汲んでいたと聞き取りしており、石や井戸は建物跡より新しいものと考えられる。

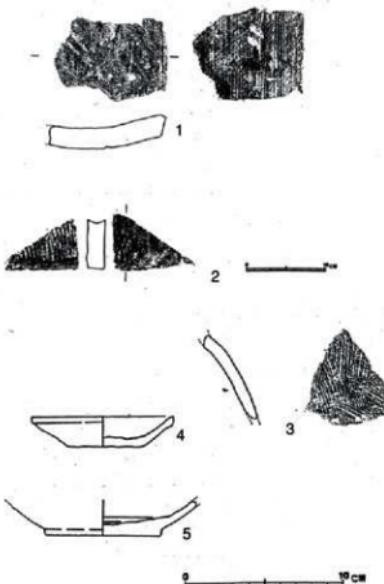
(第6図・1、2)はT10出土の平瓦片で、いずれも1mm大の白色砂粒を多く含み、暗灰色を呈す。(1)は凸面に縄印痕・凹面に布目痕を残す。(2)は凸面に平行印痕を残し、この一点のみである。(3)は古墳時代の土師器壺片である。暗褐色を呈し、外面に粗いタテハケ、内面に横方向のヘラケズリを施す。(4、5)はT11のP2から出土した中世土器である。いずれも底部は回転糸切り痕が残る。(4)は皿で口径9cm・器高1.9cm・底径4.6cmを測り淡赤褐色を呈す。口縁端部を厚くつくり、内面にはロクロナデ痕が残る。(5)は壺底部で底径7.2cmを測る。淡黄褐色を呈し、底部をやや厚くつくる。内面にはロクロナデ痕が残る。



調査区位置図 (S=1/5,000)



- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 浅黄色粘質土
- (1~2cm大の角礫を多く含む)
- 3 暗灰褐色粘質土(10~15cm大の角礫を多く含む)
- 4 浅黄色粘質土:遺構出面・整地層
(黒色粘質土ブロックを含む2~5cm大の角礫を多く含む)
- 5 暗灰褐色粘質土:旧表土
- 6 黄色細粒砂
- 7 黑色泥層
- 8 灰色細粒砂
- 9 灰色粘質土
- 10 灰色細粒砂(黑色泥層が帯状に混じる)



第6図 川向遺跡確認調査結果図

調査の結果、T11で平安時代末頃の遺物・建物跡が確認された。柱穴から土師器が見つかっており、中世前期と考えられる。湿地帯との境界の一段高い山側を整地して小さな建物を建てている。周辺から遺物はほとんど出土しておらず、居住空間というよりも一時的な作業小屋のようなものであろう。建物跡は湿地との境にあり、湿地帯との関係が興味深い。建物跡(標高約1.4m)が存在した時期に湿地帯の底は標高0~0.5mの間にあると考えられ、小規模な船着場として機能した可能性もある。巨石や井戸跡は、おそらく建物より後のものと考えられる。

他の地点はいずれも水田になる前は黒色泥層や砂が堆積しており、湿地帯が時々水害を受けながら徐々に埋積していったと考えられる。ただし、一部の調査区で単発的に遺物や木製品が見つかることから、約200m上流に位置する川向遺跡周辺に住んでいた人々の生活範囲であったと考えられる。

III. 試堀確認調査の概要

1. 横路地区（横路遺跡） T1~14・T18（第7~11図）

下府川が大きく南に屈曲する地点の北側で標高約2.2~2.7mを測る沖積微高地である。北側には笠山があり、現在の下府川との間にできた比較的大きい平地である。川側には横路遺跡（土器土地区）がある。⁽¹⁾ 3m×5mの調査区（T1~14・T18）を15設定して確認調査を実施した。

T1 表土下約1.3m（標高約0.7m）以下は泥層が堆積していた。泥層中から須恵器細片・中世土師器（第11図・10）が見つかった。中世頃までは河川脇の湿地帯だったと考えられる。

T2 表土下約1m（標高約1m）に洪水砂があり、表土下約1.6m（標高約0.5m）で砂礫層になる。遺構・遺物は確認されなかった。

T3 表土下約50cm辺りまで弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器などの細片が見つかった。地表下約1.4m（標高約1m）で東側へ傾斜する砂層面があり、自然の小流路の可能性がある。

T4 表土下約80cm（標高約1.5m）・約1.3m下（標高約1m）で洪水砂が見つかった。表土付近から陶磁器が見つかったが遺構は確認されなかった。

T5 表土下約1.2m（標高約1.5m）で砂層になる。表土付近より陶磁器・土師器細片が見つかったが、遺構は確認されなかった。

T6 表土下約1.5m（標高約1.1m）で砂層になる。表土より弥生土器・陶磁器細片が見つかった。横路遺跡の広がりが想定される場所であったが遺構は確認されなかった。

T7 表土下約1m（標高約1.8m）で砂層になる。表土より土師器・須恵器細片が見つかった。横路遺跡の広がりが想定される場所だが遺構は確認されなかった。

T8（第9図） 表土下約0.7m（標高約2m）で砂礫層が見つかり、砂礫層に覆われた北東から南西方向の畦状遺構が5列見つかった。第1次石見国府推定地調査・横路遺跡（原井ヶ市地区）発掘調査でも見つかっており、近世頃のものである。⁽²⁾ 以下には暗青灰色粘質土が堆積している。砂礫層より土師器・磁器細片が見つかった。

T9 表土下約0.8m（標高約2m）以下は泥層・粘質土が堆積している。表土付近より須恵器細片が見つかった。調査中も湧水が激しい場所で、古代以来湿地帯であったと考えられる。

T10 表土下約0.6m（標高約1.9m）以下は泥層が堆積している。泥層は標高約1.1mで薄い砂層をはさみ、標高0m以下まで厚く堆積している。薄い砂層より上の泥層で須恵器（第11図・3~8）・土師器（第11図・13、18）・木製品（第11図・29、30、32）が見つかった。砂層下の泥層でも加工したような木質が確認されたが遺物は確認されなかった。

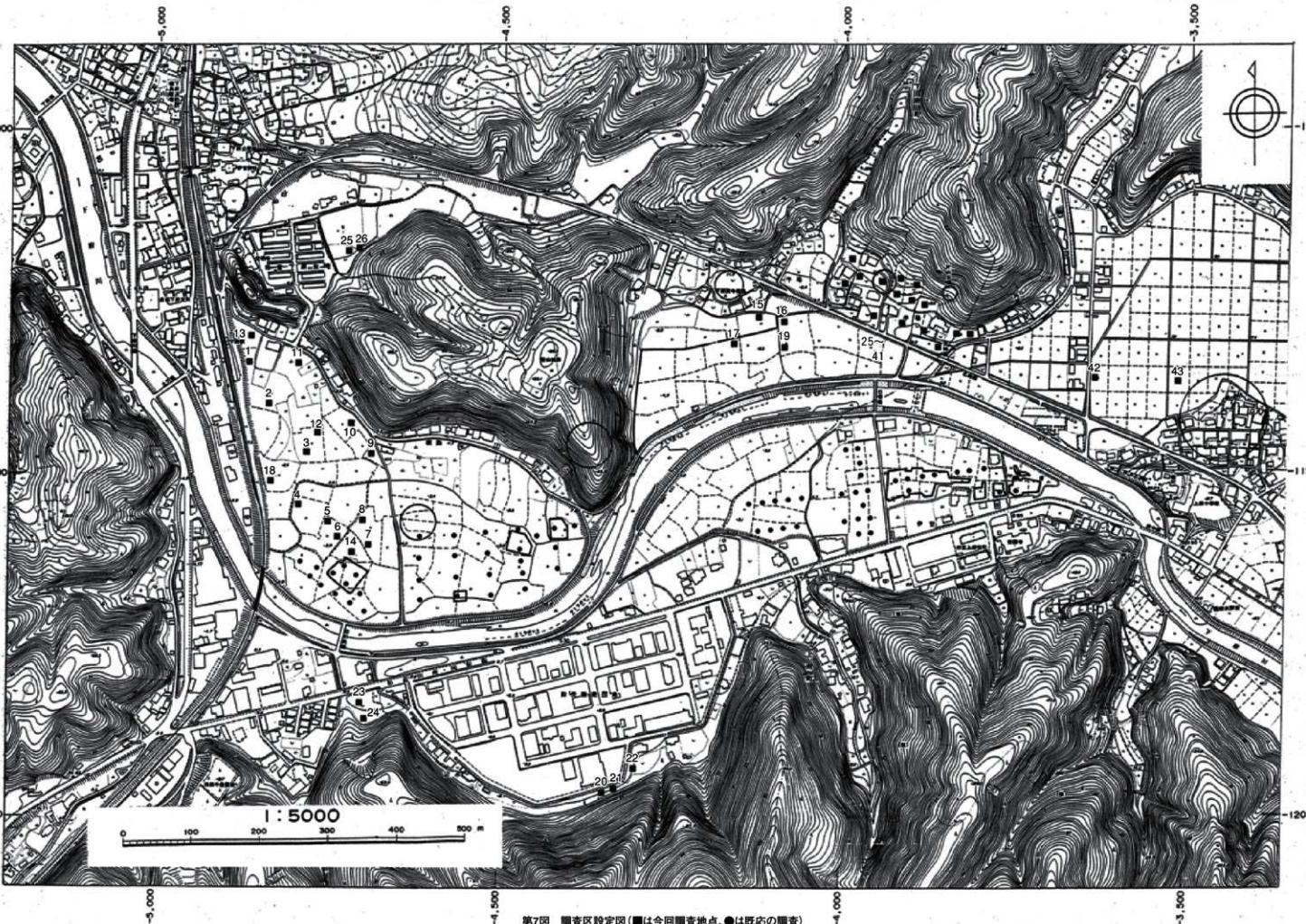
花粉分析の結果、イネ科の花粉が多く出現していることから周辺は水田だった可能性がある。

T11 表土下約1.2m（標高約1m）で砂層になる。表土付近より須恵器・土師器細片が見つかった。遺構は確認されなかった。

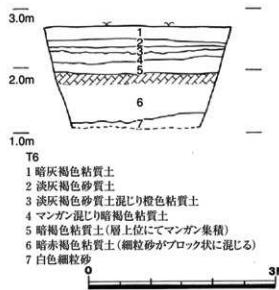
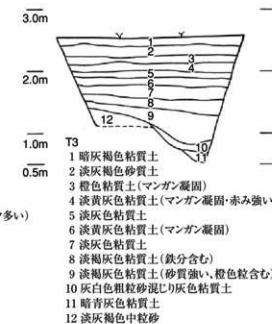
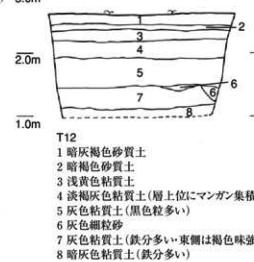
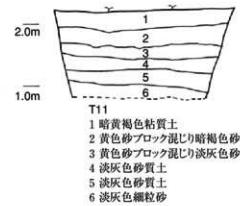
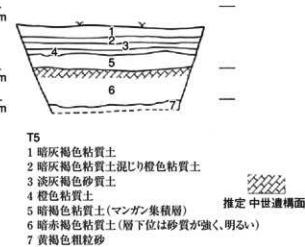
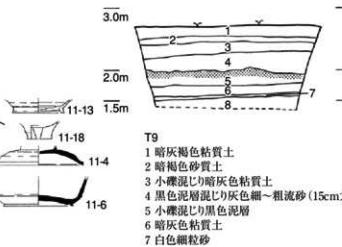
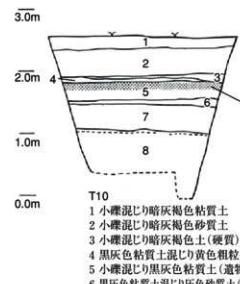
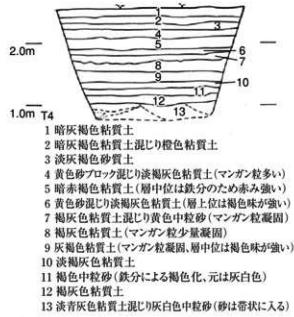
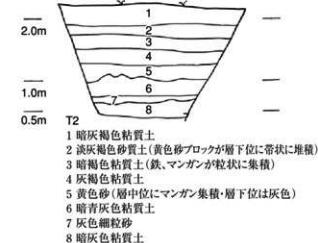
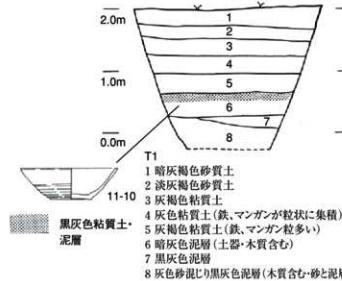
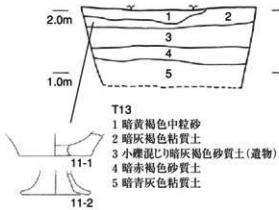
T12 表土下約1.5m（標高約1.2m）以下は暗灰色粘質土が堆積している。表土付近より磁器・土師器細片が見つかった。遺構は確認されなかった。

T13 表土下約0.6m（標高約1.5m）まで弥生土器（第11図・1）・土師器（第11図・2）・白磁の破片が多く見つかった。細片が多く、二次堆積と考えられる。標高1.1m以下は暗灰色粘質土が堆積しており、遺構は確認されなかった。

T14（第9・10図） 表土下約1.1m（標高約1.8m）で中世土師器・白磁・青磁を多く含む暗灰褐色



第7図 検査区設定図(■は今回検査地点、●は既応の検査)



第8図 T1~T9, T9~T12土層図

粘質土（第6層）が堆積しており、標高約1.5mで横路遺跡（土器土地区）と同様の中世遺構面（暗赤褐色粘質土・第12層）を確認した。調査区南側の遺構面は急傾斜し、幅2.7m以上・深さ0.9m以上の溝になると考えられる。溝の埋土（第7～11層）からは多量の土師器（第11図・11、12、15、17）・須恵器・白磁（第11図・19・21～23）・青磁・瓦（第11図・9）などが見つかった。溝の端はほぼ東西南北に沿っており、横路遺跡（土器土地区）の北側の区画溝になる可能性が強い（第10図）。

T18（第9図） 表土下約1.7m（標高約0.6m）以下に灰色粘質土混じり黒色粘質土が厚さ約10cm程堆積しており、青白磁の皿片（第11図・24）が見つかった。以下は灰色細粒砂・灰色粘質土が薄く互層状に堆積している。灰色細粒砂（第8層・標高約0.5m）では木質が確認され、幅約0.27m・長さ1.3m以上の自然木（広葉樹）や角材状・杭状の加工品が見られた。木の近くから皇宋通宝（第11図・28）が見つかった。堆積状況から今回の調査区で最も川に近い場所と考えられる。

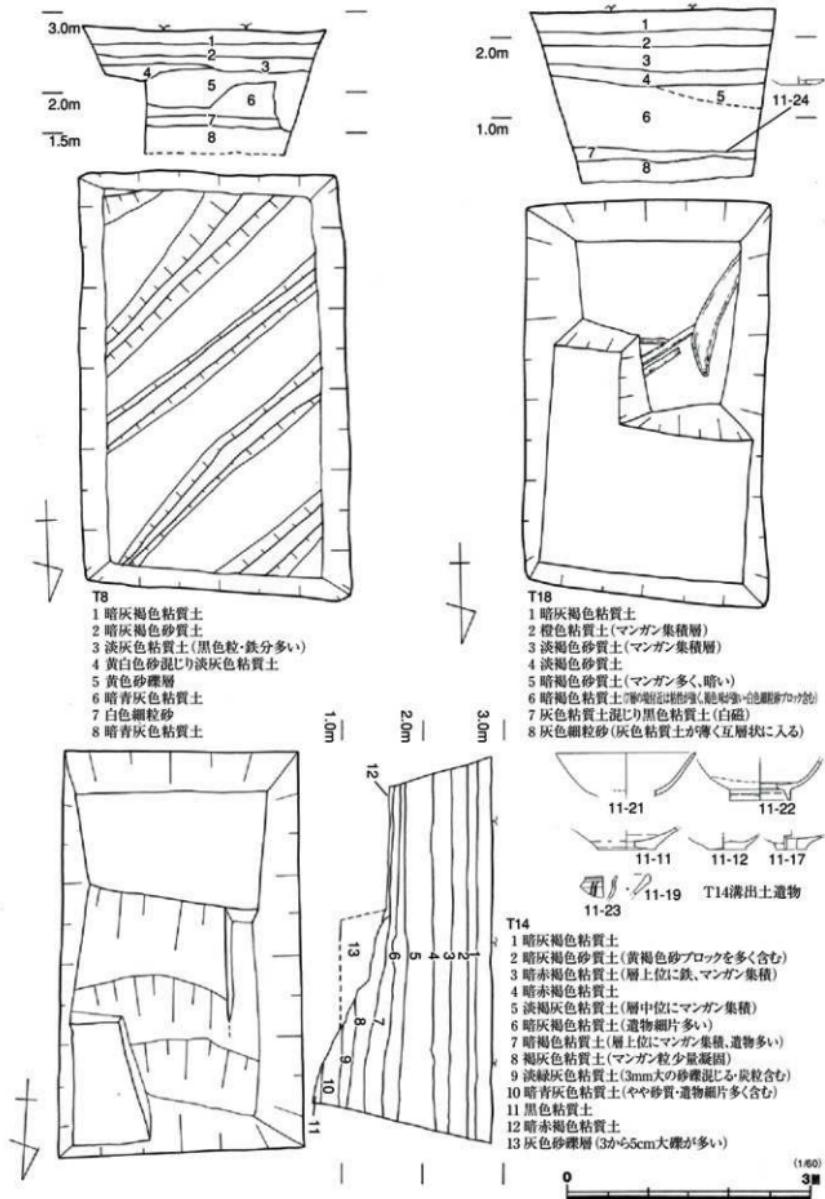
平成11年度調査（横路地区・半場地区）出土遺物（第11図）

横路地区では弥生から中世までの遺物が見つかった。遺物が多く見つかったのは横路遺跡（土器土地区）に近接し、中世の溝状遺構が確認されたT14、二次堆積状に遺物が見つかった山側のT13、山側のT10である。T2以外では散発的に弥生時代から中世にかけての遺物が出土する。

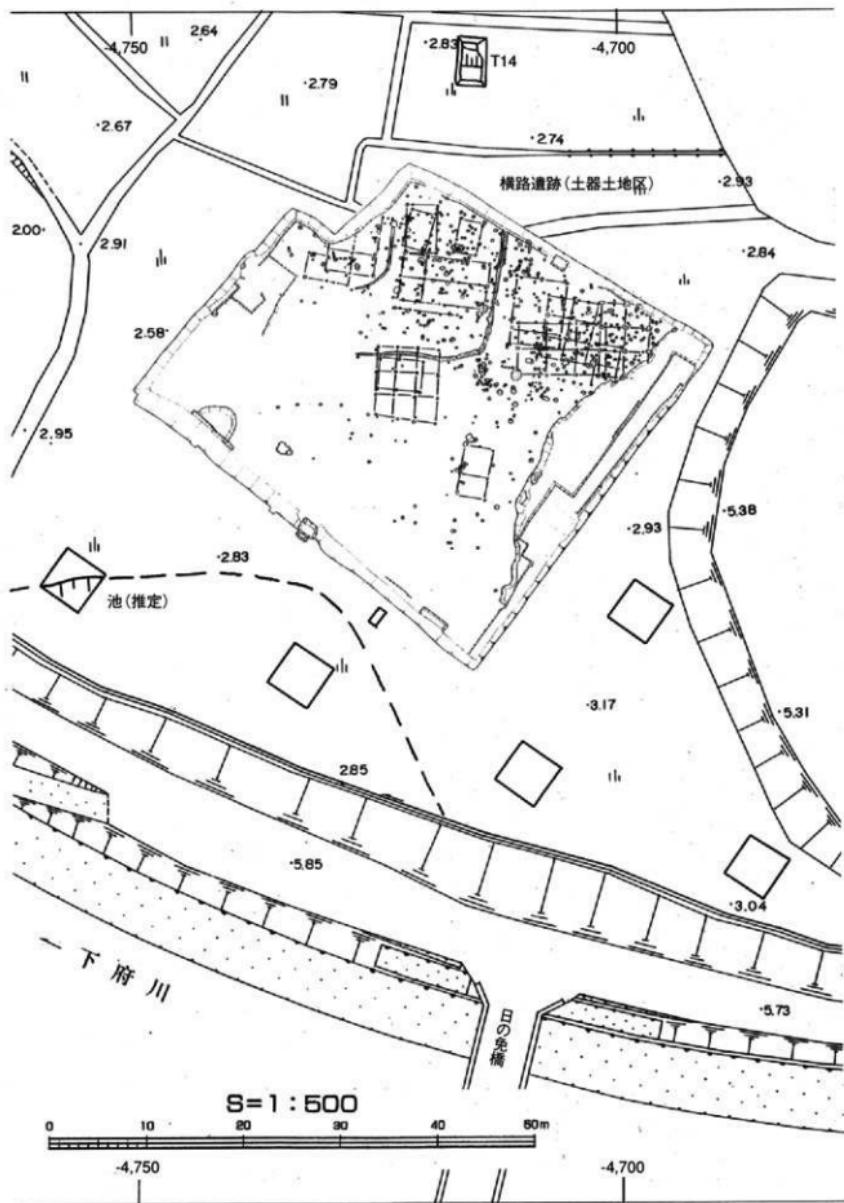
(1)は弥生土器の底部、(2)は古墳時代の土師器の高坏脚部である。(3)～(8)は須恵器である。(3)、(4)は蓋で(3)は口唇部が鋸く屈折し、(4)は輪状つまみをつけ口唇部は屈曲する。(5)、(6)は坏でいずれも底部はヘラ切りで切り離される。(5)は無高台、(6)は体部外表面下位に段が付き低い高台がつく。(7)は高坏脚部、(8)は壺の口縁部である。(9)は平瓦片で凹面に布目痕、凸面に繩叩痕が残る。(10)～(18)は中世土師器である。坏(10、11、12)、高台付坏(13)、皿(14、15)、柱状高台ぎみの皿(16)、底部に穴を開けた皿(17、18)がある。高台付坏(13)は比較的焼きがよい。(19)～(27)は貿易陶磁器で(19)・(20)は白磁碗Ⅳ類、(21)・(22)はおそらく同一個体で白磁碗Ⅴ類、(23)は白磁碗ⅩⅡ類である。⁽³⁾(24)は淡青色のガラス質の釉がかかり青白磁の皿であろう。(25)～(27)は青磁である。(25)は同安窯系の皿口縁部、(26)は同安窯系の椀底部、(27)は口縁が玉縁状になり、龍泉窯系青磁Ⅳ類である。(28)は銭貨で□宋通寶と読めるため、皇宋通宝であろう。(29)～(32)は木製品である。(29)・(30)は先端がすぼまる板状のもので上部は欠損している。(31)・(32)は半円形の板で曲物の底板の可能性がある。

註

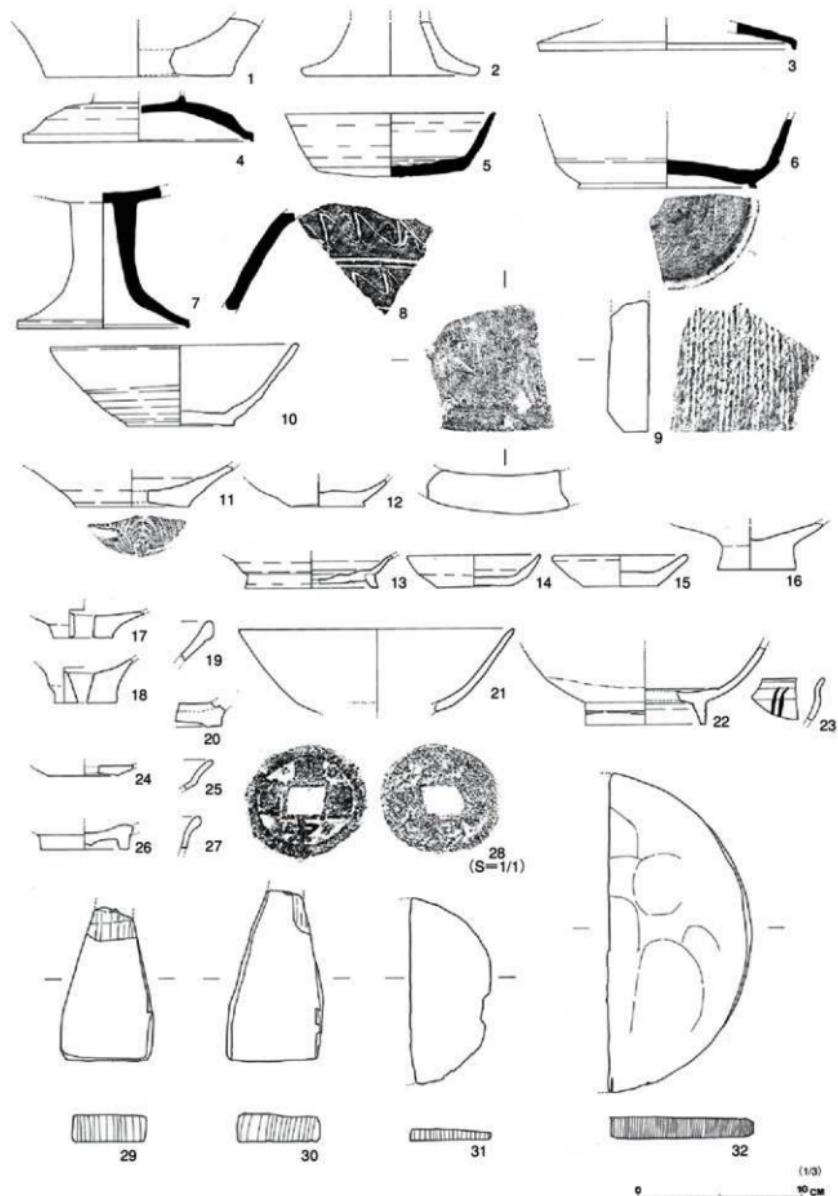
- ①浜田市教育委員会 1997『横路遺跡（土器土地区）』
- 島根県教育委員会 1978『石見国府推定地調査報告I』
- ②浜田市教育委員会 1998『横路遺跡（原井ヶ市地区）』
- ③貿易陶磁器の分類と時期については以下の文献を主に参照した。
 - 森田勉・横田賢次郎 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」
「九州歴史資料館研究論集4」
 - 山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁」
 - 中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
 - 山本信夫 1998「中世前期の貿易陶磁器」
…その分析視点と近年の研究動向…」
 - 「第26回山陰考古学研究集会資料集」
 - 山陰における中世前期の貿易陶磁器
 - 国東町教育委員会 1999「原七郎丸地区・口寺田遺跡」
 - 太宰府市教育委員会 2000「太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」



第9図 T8・T14・T18実測図



第10図 T14周辺図



第11図 平成11年度調査(横路遺跡・半場地区)出土遺物実測図

調査区	掲文	弥生	古墳～古代土師器	中世土師器			貿易陶器			中国	國産	近世～現代			その他	計	その他	
				須恵器	古代瓦	白	白	黒	不明	青磁	青磁	高麗	高麗	高麗	高麗			
T1				2		3	1					1	3	2	3		6	
T3	1	2	3			26							2	1		2	8	
T4		2				1							3		1	2	9	
T5						3							2	2	2	2	17	
T6	3		1			7											6	
T7			3			3									1	1	4	6
T8															1		3	
T9			2												1	1	72	
T10		24	34		9	1	1			1			4			1	1	
T11			3			3							3	1	1	1	11	
T12	1	1				2		1					1	1	1	1	11	
T13	14	50	3		10		2						1	1	2		83	
T14	2	11	12	1	716	1	15	1	35	10	1					806	鉄質2	
T18		10	4		6		1						1	1	1	1	24	鐵質1
計	0	21	100	67	1	9	781	2	16	2	38	11	1	0	3	0	19	6
																13	13	1103

表3 横路地区出土遺物破片点数表

捕団番号	写真 図版	出土地點	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	焼成
11-1	79	T13表土～ 2層	弥生土器 底部	底径 11.4	底部凹 めだつ。		淡灰褐色(内 面赤み強い。 底部黒色)	1～2mm大の 砂粒多く含む。	良
11-2	タ	T13表土～ 2層	土師器高环 脚部	底径 11.0		内面横のハ ラケザリ。外 面はナマ。	淡赤褐色	1mm大の砂 粒少量含む。	良
11-3	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器 蓋	口径 15.8	端部は屈折。 内面ロクロナ デ。		淡灰色(外 面自然輪。断面 セピア色)	精良。	良
11-4	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器 蓋	口径 14.2	天井部はへラ 切り後に輪状 つまみをつける。	内面ロクロナ デ。	淡褐色(端部 周辺は重ね焼 のため黒い)	0.5mm～ 1mm大砂粒 多く含む。	不良
11-5	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器 坏	口径 13.0 器高 3.9 底径 9.0	端部やや薄 くしあげる。 ラ切り。	内外面ロクロ ナデ。底部へ ラ切り。	淡灰色(部分 的に褐色味 帯びる)	0.5mm大白 色粒微量含 む。	やや 不良
11-6	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器 坏	底径 11.0	外面に段 あり。高台 低く外開き。	内外面ロクロナ デ。底部はへラ切りで 板状の圧痕が残る。	青灰色	0.5mm大白 色粒微量含 む。	良好
11-7	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器高环 脚部	底径 10.6	坏部外側に 大きく開く。底 部内側段あ。	内外面ロクロ ナデ。	暗灰褐色	0.5mm大白 色粒微量含 む。	良好
11-8	タ	T10小罐混 じり黒灰色 粘質土	須恵器 壺	口縁部		外面に横8字 文と沈線2+1 本	暗灰色(内 面やや明るい)	0.5～2mmの 白色粒多く含 む。	良
11-9	タ	T14溝 暗青灰色 粘質土	平瓦		凹面布目。 凸面繩叩き。		淡灰白色(赤 みを帯びる)	2mm大白色 砂粒少量含 む。	やや 不良
11-10	タ	T1暗灰色 泥層	土師器 坏	口径 15.3 底径 6.6 器高 5.0	体部直線 的に開く	内外面回転 ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰褐色	0.5mm大白 色粒微量含 む。	良
11-11	80	T14溝 下層	土師器 坏	底径 7.0	体部直線 的に開く	内外面回転 ナデ。底部回 転糸切り。	褐色(底部付 近黒い)	0.5mm大白 色粒微量含 む。	良
11-12	タ	T14溝 下層	土師器 皿	底径 4.5		内面回転ナ デ。底部糸切 り。	淡灰褐色	0.5mm大白 色粒微量含 む。	不良

表4 横路地区出土遺物観察表(1)

擇図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	焼成
11-13	80	T10小穢泥 じり黒灰色 粘質土	土師器 高台付皿	底径 8.1	貼り付け高台。 体部は薄手で 大きく開く。	ロクロナデ。 底部回転糸 切り。	灰褐色	精良	良
11-14	79	T14北側	土師器 皿	口径 8.2 底径 4.6 器高 2.0		内外面ナデ。 底部回転糸 切り。	淡赤褐色	1mm大赤褐色 粒多く含む。	良
11-15	80	T14(溝上層) 褐灰色粘質土	土師器 皿	口径 8.4 底径 4.6 器高 1.9		内面回転ナ デ。底部回転 糸切り。	褐色(内面赤 み強い。)	0.5mm大白色 砂粒多く含む。	良
11-16	タ	T14壁面	土師器 台付皿	底径 4.7		底部回転糸 切り	淡黄褐色	1~1.5mm大 白色砂粒多く 含む。	良
11-17	タ	T14溝下層	土師器 穴あき皿	底径 3.7		穿孔後に回 転糸切り。	灰褐色	0.5mm大赤 褐色粒微量 含む。	良
11-18	タ	T10小穢泥 じり黒灰色 粘質土	土師器 穴あき皿	底径 3.8		外面回転ナ デ。穿孔後に 回転糸切り。	灰褐色	0.5~1mm大 砂粒少量含 む。	良
11-19	タ	T14 褐灰色粘 質土	白磁 輪V類 口縁		大きい玉縁 口縁。		淡緑灰色(口 縁部厚く釉が かかる。)	白色、精良。	
11-20	タ	T14排土 白磁	輪V類 底部		低い削り出 し。高台。		灰白色(まだ ら。光沢無い)	白色、精良。	
11-21	タ	T14 褐灰色粘 質土	白磁 輪口縁 23と同一か	口径17.0			淡緑灰色	灰色、精良。	
11-22	タ	T14 褐灰色粘 質土	白磁 輪V類底部 22と同一か	底径7.4	高く細い高 台をつくる。		淡緑灰色	灰色、精良。	
11-23	タ	T14 褐灰色粘 質土	白磁 輪V類口縁		口縁端部 屈曲	内外面施釉。 外面縫の片 彫り線。	白色、透明。 ガラス質。	白色、精良。	
11-24	タ	T18黒色粘 土	青白磁 皿		やや上げ底。		淡青白色、ガ ラス質。	白色、精良。	
11-25	タ	T14	同安窯系青磁 皿 口縁		口縁部外 側へ反る。		緑色、ガラス質。	灰色、精良。	
11-26	タ	T14	同安窯系青磁 碗 底部		高台内側 尖る。		緑色、ガラス質。 高台内側は褐 色味帯びる。	灰色、精良。	
11-27	タ	T14	青磁		玉縁口縁。		緑色(やや灰 色味帯びる。)	灰色、精良。	
11-28	タ	T18 木質 周辺	錢貨 皇宋通寶	最大径2.4 厚さ0.15 穴径0.50.65					

擇図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態・手法の特徴	樹種
11-29	80	T10排土	不明	最大幅 5.8cm 長さ 10.6cm 厚さ 1.7cm		針葉樹
11-30	タ	T10排土	不明	最大幅 5.7cm 長さ 9.4cm以上 厚さ 1.6cm		針葉樹
11-31	タ	T19 上層	曲物底板?	推定直径 12cm 厚さ 最大0.7cm		針葉樹
11-32	タ	T10排土		推定直径 20cm 厚さ最大 1.3cm	表面に加工痕残る (裏面は不明)	針葉樹

表5 横路地区出土遺物観察表(2)

2. 清水地区（[†]秋ヶ平遺跡）T20～T24（第7図・第12図・第13図）

卸売商業団地の南側（T20～T22）と西側（T23・T24）に調査区を設定した。調査区の南側の山裾には近年まで才ヶ峰の石疊道へ続く道が通っていたが、現在は崩落のため通行できない。

下府卸売商業団地は以前は水田で、湧水が激しくぬかるむ場所であったと聞き取りしている。なお、かつて「近江屋敷」の地名が卸売商業団地の北西側、現在の県道部分に残っており、守護所が設けられていた可能性も推測されている。⁽¹⁾

調査の結果、T20・T22で少量の遺物とT23・24で古代から中世初期の遺構と遺物が確認されたため、小字名を取って「秋ヶ平遺跡」とした。

T20 1m×5mの調査区である。表土下は細石の混じる土が堆積していた。表土下約1m(標高5m)まで掘り下げたが、ごく少量の土器片が見つかったのみで地山面は確認できなかった。

T21 1m×5mの調査区である。表土下は細石の混じる土が堆積していた。表土下約1m(標高5.5m)まで掘り下げたが、地山面は確認できなかった。遺物も出土しなかった。

T22 1m×5mの調査区である。調査区北側は約50cm程造成が行われて平坦にされていた。細石の混じる土が堆積しており、表土下約50cm(標高約5.7m付近)で少量の土器片が見つかった。標高約5.2mで岩盤層になり、遺構は確認されなかった。

T23 横路遺跡(土器土地区)の対岸の川側に設定した2m×5mの調査区である。表土下約0.8m(標高3.8m)以下には小礫の混じる黒灰色粘質土が堆積しており、少量の須恵器・土師器・白磁片が見つかった。標高1.7m以下は均質な緑灰白色粘質土が堆積していた。比較的水流がある池状の環境(緑灰白色粘質土)から古代末頃から閉鎖された湿地帯(黒灰色粘質土)へ環境が変化していったと考えられる。

T24(第12図) 横路遺跡(土器土地区)の対岸の山側に設定した2m×5mの調査区である。表土下の小礫の混じる黒褐色土（第5層）から小石に混じって多くの須恵器片(第13図・4、5、12、14、15、16、21)、土師器片(第13図・25、28、29、30)が見つかり、白磁片も1点見つかった。南の山側では下の黒褐色土(第5層)中(標高約2.9m)で石・杭列が見つかった。石は自然石を雜多に集め敷いたような状況で、上面は平坦にはならず凹凸がめだつ。杭列は東西方向に径4cm程の小型のものを多く打ち込んでおり、一部角材状に加工したものもあった。第5層から第8層にかけて打ち込まれており、第5層中で浮いてしまったものも多いため、しっかり打ち込まれたものではないと考えられる。杭列の間に木を南北方向に敷いたような場所もある。全体的に護岸になるようなしっかりしたものではない印象を受ける。杭列・石の間からは須恵器(第13図・6、9、22、23、24)が出土した。山側は細かな角礫層（第6層）や大型の石が見つかり、山側からの堆積物と考えられる。石の上から須恵器(第13図・8、10、20)が見つかった。杭列・石の下は部分的に断ち割り調査を行ったが、約40cm下（標高約1.2m）で砂質土になる。砂質土上面から須恵器(第13図・2)が出土した。調査区中央では加工したような木も見つかっており、さらに下層で遺構・遺物の見つかる可能性もある。

調査区北側の山側に角礫を入れて杭列を造っており、古代から中世の簡単な護岸・水田の区画・道などの可能性がある。

出土遺物(第13回)

清水地区のT20～T22では細石に混じって土師器片が少量出土した。遺物の大半はT24の出土である。中世以前の須恵器・土師器類が最も多く、貿易陶器はT23・T24でそれぞれ白磁が1点出土したのみである。遺物の主体はおよそ9世紀～11世紀頃と考えられる。

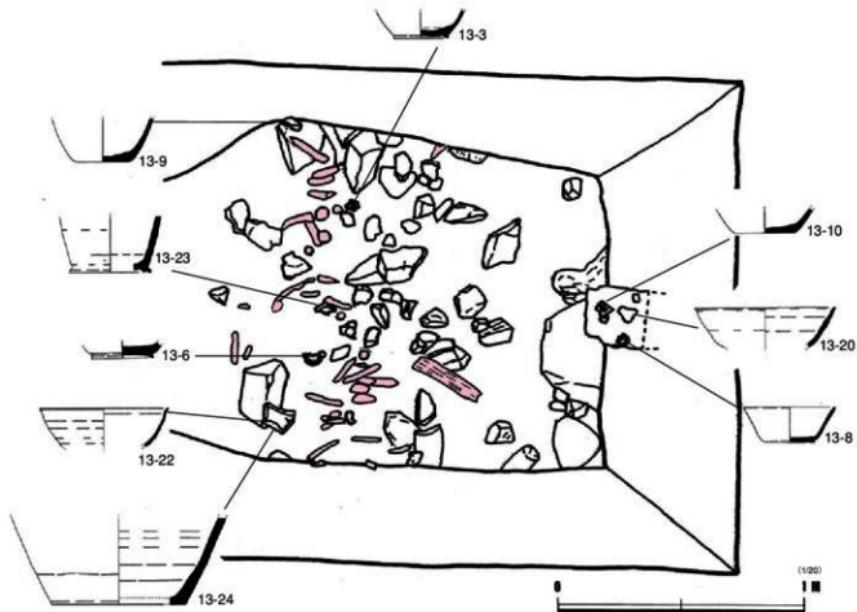
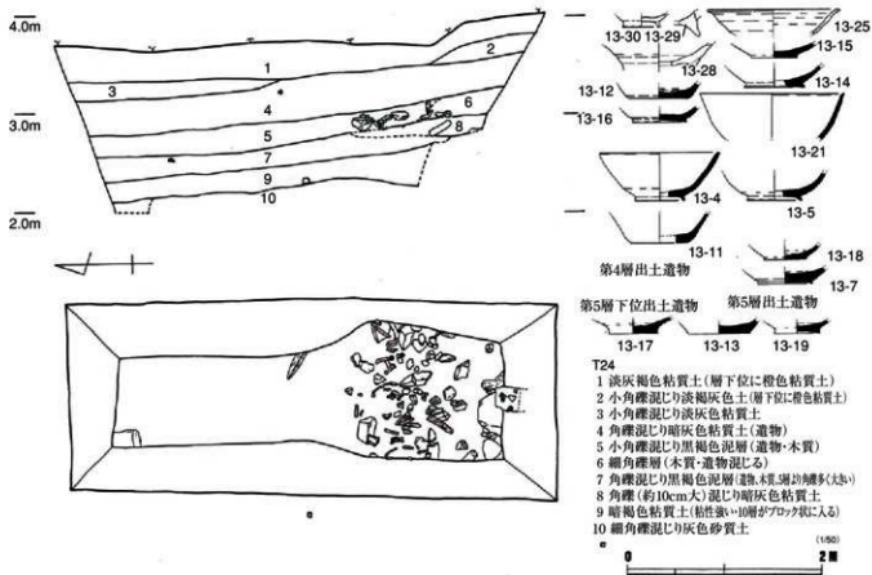
T24(枚ヶ平遺跡)では須恵器が多く見つかった。破片が多く、全形の復元できるものは少ない。

(1)は弥生土器で外面に櫛描き文が施される。(2)～(24)は須恵器である。(2)は坏で底部はヘラ切り後に低い高台を付ける。(3)は高台内面に段がつき、体部はやや丸みをもつ。(4)・(5)は細く外開きの高台をつけ、体部は丸みを持つ。(6)・(7)は底部を厚くつくり底部の端をつまみ出して低い高台状につくる。(7)は回転糸切り後に高台をつまみ出してつくるが、足りない高台部を粘土で補っている。(8)は底部をやや厚くつくり体部は薄く直線的に立ち上がる。(9)・(10)・(11)は体部が底部から丸みをもつて立ち上がる。(9)は焼きが悪く、土師質に近い。(12)・(13)は体部が底部から直線的に立ち上がる。(14)～(19)は底径がやや小さく厚めにつくる。体部が外に開くものもあり、皿も含まれているのであろう。(19)は底部をやや厚くつくり、端部をごく低くつまみ出して高台状につくる。(20)～(22)は口縁部である。(20)・(21)は体部に丸みをもち、口縁端部をやや外反させる。(22)は薄手で硬質な焼成で口縁端部を屈曲させる。(23)・(24)は壺類の底部である。(23)は低く太い高台がつく。

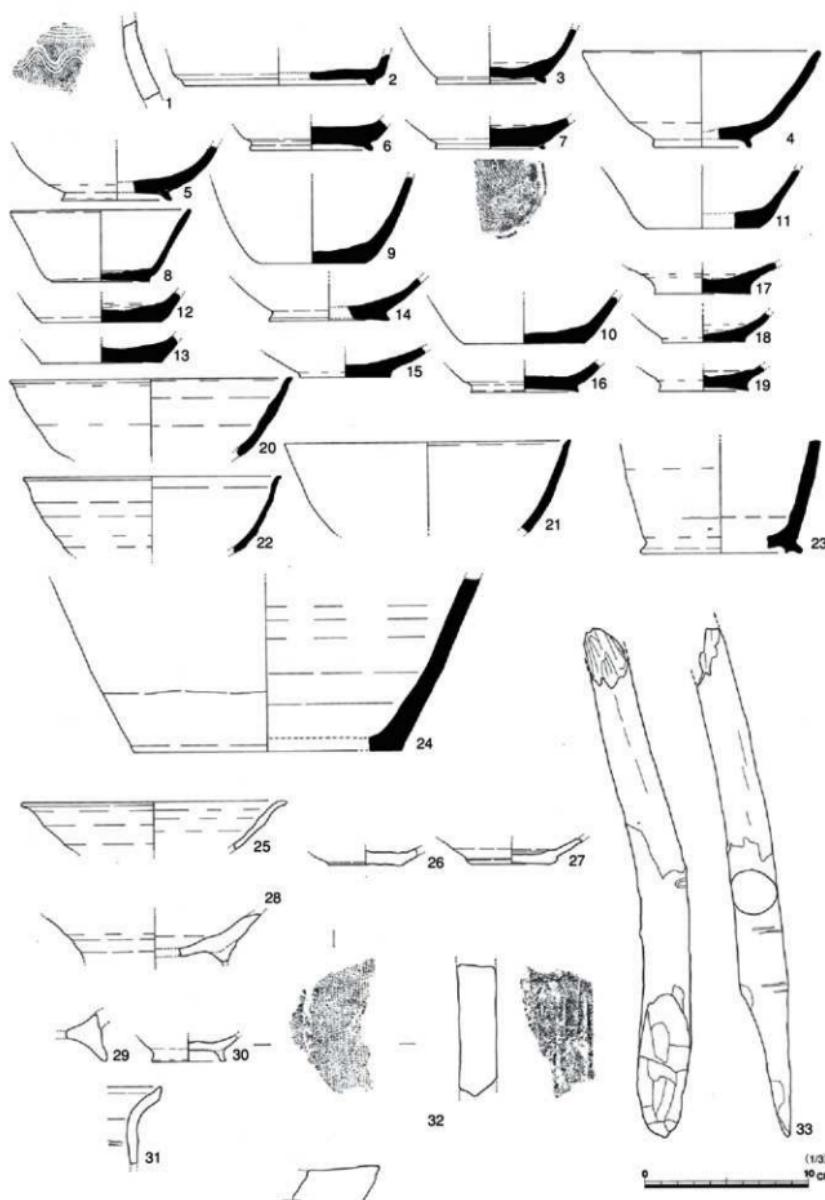
(25)～(31)は土師器である。全体的にロクロナデ痕を残り、焼きが悪く灰褐色を呈するものが多い。

(25)は皿状に開く口縁部で口縁端部が外反する。(26)・(27)は坏の底部である。(28)・(29)は高台付坏で脚部はいずれも厚く太いものである。(30)は小型の高台付坏で細い高台を付ける。(31)は壺類の口縁で口縁端部がやや上方に延び、受口状になる。内面には横方向のケズリが施される。(32)は平瓦片で凹面に布目痕、凸面に繩目痕を残す。(33)は自然木の先端を斜めに切断した杭で、他は表皮が残っている。

(1)桑原韶一 1995「伊甘郷の歴史的背景」「伊甘土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報」浜田市教育委員会



第12図 T24(秋ヶ平遺跡)実測図(赤色は木質)



第13図 T24(秋ヶ平遺跡)出土遺物実測図

調査区	掲文	弥生	古墳・古代土器	中世土器			貿易陶器			中国	國産	近世～現代			その他	計	その他
				須恵器	古代瓦	白	白	白	不明			青磁	青磁	高麗	高麗		
T20				1					1							2	
T22					17				3							20	
T23				1	1			2	1							5	
T24				22	32	95	1	8	22	1					1	159	削口7
計		0	22	51	96	1	8	28	0	2	0	0	0	0	0	186	

表6 清水地区出土遺物片点数表

掲図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	焼成
13-1	80	T24黒褐色 泥層(北側)	須恵器		斜めのハケのち裏 蓋状6cm+2.下に 3本足の波状文	斜めのナデ。	暗褐色	1~3mm大の 白色砂粒多く 含む。	やや 不良
13-2	タ	T24北側 下層灰色紗	須恵器 壊	底径11.8	低い高台を 付ける。体 部屈折する。	ヘラ切り。	外面黒灰色 内面淡灰色	0.5mm大砂 粒少量含む。	不良 軟質
13-3	タ	T24黒褐色 泥層 No.14	須恵器 壊または小壺	底径 6.8	低く内側が 内側する高 台を付ける。	内外面ロクロナ デ。ヘラ切り。	淡灰色	0.5mm大白色 砂粒微量含む。	良
13-4	タ	T24角縁混じ り暗灰色粘 質土(南側)	須恵器 梶	口径 14.8 底径 6.0 器高 5.9	細く外広が りで丸い高 台を付ける。	回転ナデ。丁 寧なナデ。	淡灰色	1mm大白色 砂粒微量含 む。	良
13-5	タ	T24角縁混じ り暗灰色粘 質土(山側)	須恵器 梶	底径 6.8	細く外開き の貼り付け 高台。	内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色	0.5mm大白 色砂粒微量含 む。	良好
13-6	タ	T24黒褐色 泥層 No.11	須恵器 梶	底径 7.6	低いつまみ 出しの高台。	内外面ロクロ ナデ。外側回 転糸切り。	外面黒色 内面淡灰色	1~2mm大白 色砂粒多く含 む。	良
13-7	タ	T24黒褐色 泥層(北)	須恵器 壊	底径 6.7	低く短い高 台。貼り付 けたものか。	内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色	0.5mm大黑 色砂粒微量含 む。	良
13-8	81	T24 細角 縫層 No.8	須恵器 壊	口径 11.0 底径 6.0 器高 4.4	体部は薄手に つくり、直線 性の上がる。	内外面回転 ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色・口縁 部暗灰色	1~2mm黒色 砂粒少量含む。	不良 軟質
13-9	タ	T24黒褐色 泥層 No.4	須恵器 壊	底径 6.4 器高 5.1 以上	体部は丸み をもって立ち 上がる。	内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰褐色・底 部黒い	1mm大白色 砂粒少量含 む。	不良 軟質
13-10	80	T24 細角 縫層 No.5	須恵器 壊	底径 7.5		底部回転糸 切り。	淡灰色	1mm大白色 砂粒少量含 む。	不良 軟質
13-11	タ	T24東壁第 4層	須恵器 壊	底径 7.0		内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	灰色	0.5mm大白 色砂粒少量含 む。	良
13-12	タ	T24角縁混 り暗灰色粘 質土中央	須恵器	底径 7.4		内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色	1mm大白色 砂粒微量含 む。	良
13-13	81	T24木質上 唇	須恵器 壊	底径 7.5		内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色(内面 断面一部黒 い)	1mm大白色 砂粒微量含 む。	不良 軟質
13-14	タ	T24角縁混 り暗灰色粘 質土(山側)	須恵器 梶	底径 7.4	底部を厚く造り て丸みをもつて 立ち上がる。	内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色	0.5mm大白 色砂粒微量含 む。	良好
13-15	タ	T24角縁混 り暗灰色粘 質土(北側)	須恵器 Ⅲ	底径 5.6	体部は外 側へ開く。	内外面ロクロ ナデ。底部回 転糸切り。	淡灰色	1~2mm大白 色砂粒・黒色砂 粒少量含む。	良

表7 清水地区遺物観察表(1)

標図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(袖)調	胎土	焼成
13-16	81	T24角縁混り暗灰色粘質土(北側)	須恵器 梶	底径 6.6	底部縁をつまみ出して低い高台状につくる。	内外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	淡灰色(内面黒色)	0.5mm大白色粒微量含む。	良
13-17	タ	T24木質上層	須恵器 皿	底径 6.0	底部を厚く造り、体部は外側へ開く。	内外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	淡灰色	0.5mm大白色粒微量含む。	やや不良軟質
13-18	タ	T24黒褐色泥層(北側)	須恵器 皿	底径 5.1	底部をやや厚く造り、体部は丸みを持たせながら上げる。	内外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	暗灰色	0.5~1mm大白色粒少量含む。	良好
13-19	タ	T24木質上層	須恵器	底径 5.6	底部を厚くつくる。	内外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	暗青灰色	0.5mm大白色粒微量含む。	良好硬質
13-20	タ	T24細角縁盤 No.4	須恵器 梶 口縁部	口径 17.4	口縁部はやや丸く外反する。並中の器壁がやや厚い。		淡青灰色	1mm大黑色粒少量含む。	良
13-21	タ	T24角縁混じり暗灰色粘質土	須恵器 梶 口縁部	口径 17.8	口縁端部やや尖る。	内外面回転ナデ。	淡灰色	精良	良好
13-22	タ	T24木質周辺 (No.9周辺と接合)	須恵器 梶 口縁部	口径 16.0	口縁部及び外反する。全体を薄手につくる。	内外面回転ナデ。	外面暗灰色 内面暗褐色	0.5mm大白色粒少量含む。	良好
13-23	タ	T24黒褐色泥層 No.12	須恵器 壺類 器高6.8以上	底径 10.0	やや高さの真白を付ける。外部に黒色の着物がある。	体部下位はハラケズリのちナデ。	淡灰色	0.5mm大白色粒微量含む。	やや不良
13-24	タ	T24黒褐色泥層 No.9	須恵器 壺類	底径 16.4		体部下位はハラケズリ。	暗灰色(内面 やや黒い)	白色粒、金雲母を微量含む。	良
13-25	タ	T24角縁混じ り暗灰色粘質土 No.1	土師器 盆 口縁部	口径 16.4	口縁は外反する。	内外面ロクロナデ。	淡灰褐色	0.5mm大赤褐色粒微量含む。	不良軟質
13-26	タ	T24黒褐色泥層(北側)	土師器 坯	底径 4.6		内面ロクロナデ。底部回転糸切り。	灰褐色	0.5mm大砂粒、橙色粒微量含む。	不良
13-27	タ	T24黒褐色泥層(北側)	土師器 坯	底径 4.8		内外面ロクロナデ。底部回転糸切り。	灰褐色	1mm大砂粒少量含む。 良好	硬質
13-28	タ	T24角縁混 り暗灰色粘質土	土師器 高台付坏	底径 8.8	大きめの貼り付け高台を付ける。	内外面回転ナデ。	淡灰褐色	0.5mm大白色粒多く含む。	不良
13-29	タ	T24角縁 混り暗灰色粘質土No.2	土師器 高台付坏		大きめの貼り付け高台を付ける。		淡灰褐色	0.5mm大白色粒多く含む。	不良
13-30	タ	T24角縁混り 暗灰色粘質土(北側)	土師器 高台付皿	底径 4.6	織長い貼り付けの足高台を付ける。	底部回転糸切り。	淡灰褐色	0.5mm大白色粒を微量含む。	やや不良
13-31	タ	T24角縁混 り暗灰色粘質土	土師器 壺		口縁を受け口状丹づくる。	内面の口縁部はヨコナデ、下部ヨコのハラケズリを施す。	淡灰褐色	0.5mm大砂粒、 1mm大褐色粒多く含む。	良
13-32	タ	T24黒褐色泥層(北側)	平瓦		凹面布目。 凸面綱目。		凹面暗青灰色 凸面淡灰色。	1mm大砂粒少量、赤褐色粒多量含む。	不良

標図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態・手法の特徴	崩種
13-33	81	T24 黒褐色泥層 西壁抗(直立)	杭	全長31.4cm以上 直径 2.7cm	先端のみ斜めに切断する。他は自然表皮残る。	針葉樹

表8 清水地区遺物観察表(2)

3. 上ノ浜地区（千足遺跡） T25・T26（第7図・第14図・第15図）

笠山北側の下府市営住宅横の山側に調査区を設定した。昨年の分布調査で周辺の畠から土器片を採取しており、「千足遺跡」とした地点である。現在は道路（広浜鉄道跡）により分断されているが、元は伊甘神社脇遺跡につながる広い平坦地であったと考えられる。下府市営住宅（旧下府小学校）でも須恵器が見つかっていることから、広範囲に遺跡が存在する可能性がある。

T25 2m×5mの調査区である。表土下約0.6m、標高約4.6m以下は石に混じって弥生から古代・中世にかけての遺物(第15図・2~3、5~13、15)が多く出土した。遺物はいずれも破片になっており山側から石に混じって落ちてきたような印象を受ける。表土下約1.4m、標高3.8mで石の混じらない比較的均質な淡褐色粘質土になる。調査区が狭く、湧水が非常に激しかったため遺構は確認できなかった。

T26 1m×5mの調査区である。表土下に中世土師器細片を含む黒色粘質土(第5層)があり、その下の暗褐色粘質土面（第6層・標高約4.5m）で柱穴を確認した。第6層中に土器片や炭が見られたため、調査区南側を拡張してさらに掘り下げたところ、下層に弥生時代～古代頃の遺物を含む暗灰褐色砂質土があり、土師器(第15図・4)が出土した。下の淡褐色粘質土面(第8層・標高約3.9m)で落ち込み状の遺構を確認した。標高3.6m以下は淡褐色砂質土があり、風性砂と考えられる。

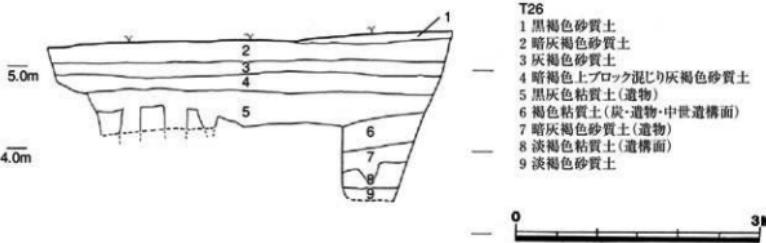
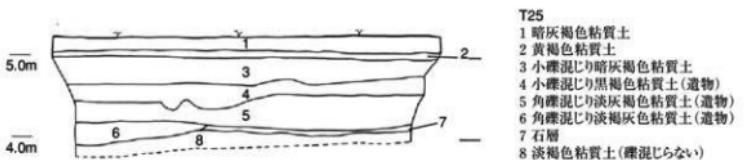
出土遺物（第15図）

千足遺跡からは縄文時代～中世にかけての遺物が多く出土している。ほとんどが破片で図示できるものは少ないが、特に古墳時代～古代の土師器・須恵器が多い。しかし瓦は各調査区で1点、計2点見つかったのみで官衙的な遺物は少ない。

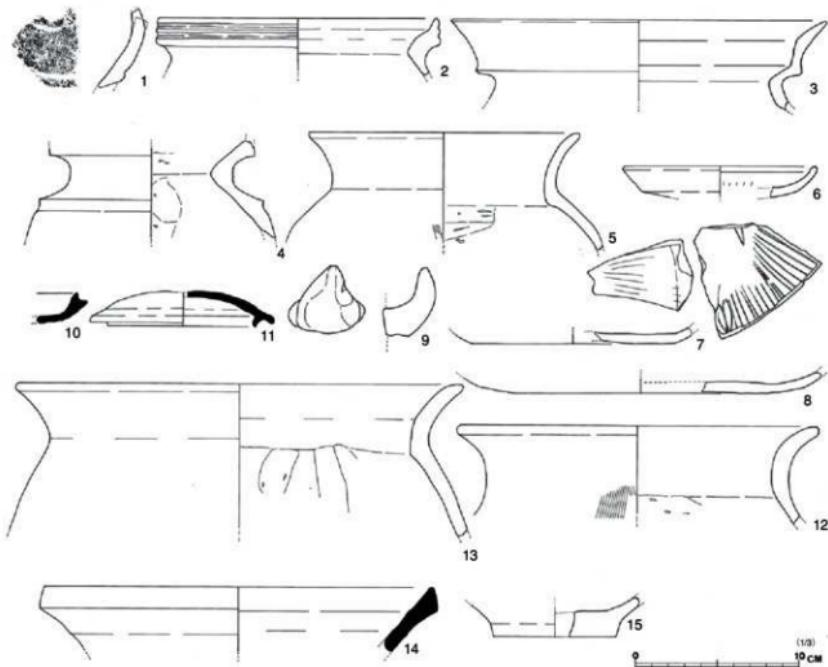
(1)は縄文土器の口縁部で磨消縄文が施され縄文晩期と考えられる。(2)、(3)は弥生土器の壺口縁部である。(2)は口縁部外面に2本の凹線が施され、体部内面にはヘラケズリが施される。(3)は弥生時代終末期の壺口縁部で外面は無紋である。(2)は石見V-1様式・(3)は石見V-4様式である⁽¹⁾。(4)は鼓型器台と考えられ、筒部が短いことから古墳時代前期のものであろう。(5)は古墳時代中期以降の壺で、長く外側へ屈曲する口縁をつくる。(6)～(8)は古代の畿内系土師器皿でいずれも内面に放射状の暗文が入る。(6)は口縁端部を丸くつくる。(9)は土師器の鍋類の把手で丹塗りである。(10)・(11)は須恵器である。(10)は小型の壺、(11)はおそらく乳頭状のつまみが付く蓋と考えられる。内面にかえりがつき、およそ飛鳥時代のものであろう。(12)・(13)は古代の壺である。古墳時代のものと比べ厚手で体部は直線的である。(12)は暗赤褐色、(13)は淡灰褐色を呈する。(14)は東播系中世須恵器の指鉢口縁部である。(15)は中世土師器の壺底部で底部を厚くつくっている。

註

(1)松本岩雄 1992 「石見地域」 「弥生土器の様式と編年 - 山陽・山陰編 -」 木耳社



第14図 T25・T26(千足遺跡) 土層図



第15図 T25・T26(千足遺跡) 出土遺物実測図

調査区	編文	弥生	古墳・古代土器	須恵器	古代瓦	中世土器	白磁	貿易陶磁器	青磁	龍泉	高麗	中国陶器	國產陶器	近世~現代	石見焼	那須焼	その他	計	その他の
T25	26	414	95	1		20		2							2	1		561	羽口8 銘1
T26	2	5	78	21	1	90	2									1	2	202	
計	2	31	492	116	2	0	110	0	2	0	2	0	0	0	0	2	0	2	763

表9 上ノ浜地区出土遺物片点数表

挿図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	焼成
15-1	81	T26拡張区 排土	繩文土器 浅鉢 (唐泊縄文)			内面ナデ。	暗褐色	1~2mm大白色粒多く含む。	不良
15-2	タ	T25疊混り 淡灰褐色 粘質土	弥生土器 壺	口径 17.4	やや内張する低い 複合口縁をつくる (複合口縁をつくる部に穿孔あり)。	口縁部外面に凹線 2本本地。内面は 横のハラケズ。	淡赤褐色	1mm大砂粒多く含む。	不良
15-3	タ	T25排土	弥生土器 壺	口径 23.2	外反する複合口縁をつくる。		淡赤褐色	1~2mm大砂粒多く含む。	良
15-4	タ	T26暗灰褐色 粘質土	弥生土器 菱形器台	胴径 10.0		内面はハラケズ。	淡褐色(赤み 強い)	1~3mm大褐色 色粒多く含む。	やや不良
15-5	82	T25疊混り 淡灰褐色 粘質土	土師器 壺	口径 16.8	蓋やかに外反する 口縁をつくり、内部 はえみと垂げる。	口縁部凹窓(窓)。 内面は横、斜め上方 へのハラケズ。	淡褐色	1~2mm大白色砂粒多く含む。	良
15-6	81	T25疊混り 淡灰褐色 粘質土	土師器 皿	口径 12 器高 1.9 以上	口縁を玉縁状 につくり、明瞭な 段を持つ。	内面に放射状の暗文を5 本以上施す。	淡赤褐色	1mm大黑色 粒、赤褐色粒少 量含む。	良
15-7	タ	T25疊混り 淡灰褐色 粘質土	土師器 皿	底径 12.4		底部内面に6本以上 の放射状の暗文。 底部凹凸あり。	淡赤褐色	1mm大黑色 粒、褐色粒多 く含む。	良
15-8	タ	T25疊混り黒 褐色土(排 土含む。)	土師器 皿	底径 15.6		底部内面に放射 状の暗文。一部 螺旋状に入る。 底部凹凸あり。	暗褐色	1mm大黑色 粒少量含む。 赤褐色粒微 量含む。	やや不良
15-9	タ	T25疊混り暗 灰褐色土(排 土含む。)	土師器 手(丹塗り)	幅 4.6			淡灰褐色(素 地)丹塗り。	0.5mm大赤 褐色粒、黑色 粒微量含む。	良
15-10	タ	T25疊混り 暗灰褐色 粘質土	須恵器 壺				淡灰色	0.5mm大砂 粒少量含む。	良
15-11	82	T25疊混り褐 色粘質土	須恵器 蓋	口径 11.5 器高 2.1 以上	内面にえりをつくる。	内外面ロクロ ナデ。	淡灰色(外面に 自然輪、白色粒 の付着多い。)	0.5mm大褐色 粒微量含む。	良好
15-12	81	T25疊混り 褐色粘質土 (古代)	土師器 壺 (古代)	口径 22.4	口縁は外方へ屈曲 する。	体部外面は横いテ ハケ。内面は斜め上 方へのハラケズ。	暗赤褐色(断 面赤み強い。)	0.5mm大黑色 粒、白色砂 粒少量含む。	不良
15-13	82	T25疊混り 黑色土	土師器 壺 (古代)	口径 27.6	口縁は外方へ屈曲 する。	内面は瓶方 へのハラケズ。	淡灰褐色	1~2mm大白色 砂粒少量含む。	不良
15-14	タ	T26黒灰色 粘質土	須恵器 捜鉢 (東播系)	口径 24.0 以上	口縁端部を肥 厚させ る。	内面ロクロ ナデ。	灰色	0.5mm大白色 粒微量含む。	良
15-15	タ	T25疊混り 淡灰褐色 粘質土	土師器 壺	底径 7.6	底部を厚く つくる。		淡黄褐色	金雲母微量 含む。	良

表10 上ノ浜地区遺物観察表

4. 半場地区（仕切遺跡・半場口2号墳） T15～T17・T19・T27～T41（第7図・第16図～第21図）

横路地区から約600m上流に位置する。下府川は北側に屈曲し、標高5.1～5.2mを測る沖積地である。北側の山裾には下府廃寺跡、北東の山間には片山古墳・西側の山頂部には笠山城がある。

仕切遺跡は以前より片山古墳下の山裾部で畑から須恵器・陶磁器などが採取されていた。

平成11年度は下府川と下府廃寺との間に平坦地に3m×5mの調査区(T15～17・T19)を4ヶ所設定し、平成12年度は山側の片山古墳下の仕切遺跡を中心に調査区(T27～39)を設定した。また、半場口2号墳とされる立石付近にも調査区(T40-1～T40-6・T41)を設定した。

T15 表土下約1m(標高約4m)まで掘り下げたが、湧水が激しく遺構・遺物は確認されなかった。

T16 表土下約0.7m(標高約4.5m)まで調査した。表土付近より土師器の細片が見つかった。湧水が激しく遺構は確認されなかった。

T17 表土下約1.2m(標高約3.8m)まで調査した。標高約4m以下は緑灰色粘質土が堆積している。湧水が激しく遺構・遺物は確認されなかった。

T19 表土下約1.8m(標高約3.5m)まで調査した。標高約4.25m以下は木質を微量に含む黒灰色粘質土が堆積しており、曲物底板(第11図・31)が出土した。湧水が激しく遺構・遺物は確認されなかった。

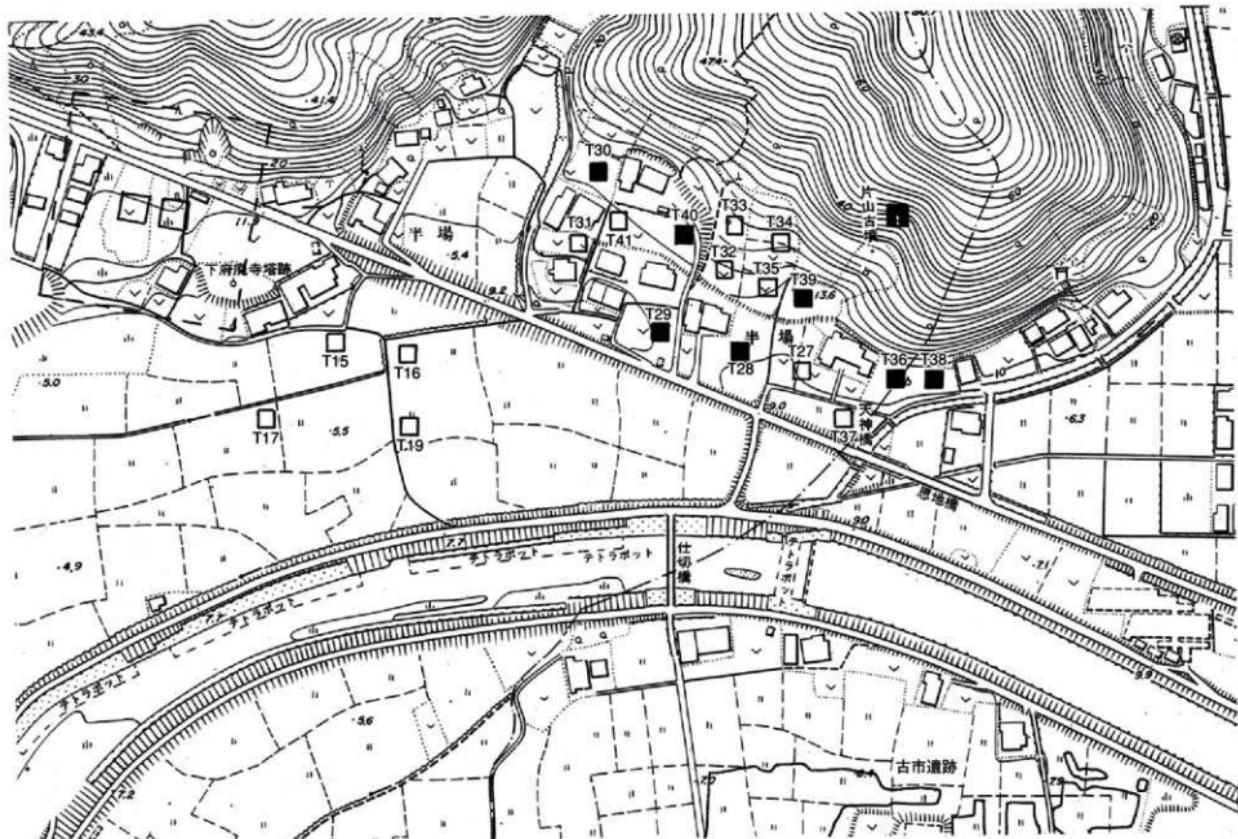
仕切遺跡 T27～T39（第16図～第20図）

T27 2m×5mの調査区である。約2m掘り下げたが、地山面は確認出来なかった。調査した最下層の暗青灰色粘質土(第13層)からも土師器細片が見つかった。おそらく調査地は小さい谷部の湿地帯を中世以降に埋め立てて現在の畑にしたと考えられる。地山に近い土がブロック状に入ることから周辺の山を削った土で造成を行ったと考えられ、造成土からは弥生～中世の遺物が比較的多く出土した。調査区西側では集石が見つかり、近世の肥前系磁器(第20図・16)や陶器類が出土したが遺構の調査は行わずそのまま保存した。

T28 2m×5mの調査区である。山を削った地山土を盛って整地しており、3つの面（第5層上面・第8層上面・第11層上面）で柱穴状の遺構が検出された。上層から第1～3面と仮称する。第1面の盛土(第5層)下位より古瀬戸の天目茶碗(第20図・15)が出土した。⁽¹⁾ 第2面と3面では中世の土師器片、陶磁器片が出土したが時期的差異は明確にできなかった。第7層では層中位で土師器(第20図・2～6)がまとまって出土したが黒色土中で遺構検出はできなかった。第1面の柱穴埋土は炭・地山ブロック混じり黒色粘質土、第2面の柱穴埋土は地山ブロック混じり黒色粘質土、第3面の柱穴埋土は黒色粘質土で、調査区北側のP8から底部穿孔の土師器皿(第20図・8)が出土した。柱穴の深さは底の判別が困難なためきれいに完掘したものは少ないが、土層断面などでみると第1面の柱穴は他の面に比べると大きく深い印象を受ける。調査区が狭いため建物跡は復元できなかったが、第1面の柱穴は南北方向に並んで見えるようにとれる。

T29 2m×5mの調査区である。地山面は調査区の北側約3分の1は平坦だが、南側は南西方向・川側へ緩やかに傾斜しており、地山の傾斜方向に直交する溝状遺構を3本検出した。溝状遺構は完掘していないが断面は丸く、中世の土師器片、陶磁器片が出土した。調査区全体には中世の柱穴もみられる。

T30 2m×5mの調査区である。北側で直径約40cm・深さ8cm程の穴と南側で幅約30cm・深さ約8cm



第16図 半場地区周辺図(■は遺構を検出した調査区) S=1/2,500

の溝状遺構が見つかり、調査区南側の柱穴を切っていた。遺構の密度は他の調査区に比べて少ない。

T31 2m×5mの調査区である。表土下は造成されている印象を受ける。顯著な遺構・遺物は確認されなかった。

T32～T35は遺物散布地の北側の低丘陵上に調査区を設定した。斜面の傾斜はややきつく見え、削平した土で山裾を埋め立てたのかもしれない。

T32・T33 1m×5mの調査区である。表土下で地山になり、遺構・遺物は確認されなかった。

T34 1m×5mの調査区である。表土下で地山になり、擾乱と見られる穴が見つかった。遺物は確認されなかった。

T35 1m×5mの調査区である。調査区南側は深さ約40cm程の段状になっており、土師器片が数点出土した。

T36 2m×5mの調査区である。地山面はクサリ礫を多く含むため凹凸が多く、遺構の判断は困難であった。柱穴らしき遺構が見つかり、中から土師器片が見つかった。調査区南側は地山面が段状に1段下がっていた。

T37 下府川に最も近い低地部分に設定した2m×5mの調査区である。表土下には暗青灰色粘質土が堆積しており、土師器細片が見つかった。約1.5m下まで調査を行ったが、遺構は確認されなかった。現状でも他に遺構・遺物が見つかった調査区より1段下がった位置にあり、河川に近い場所は湿地帯になり生活は行われなかつたと考えられる。

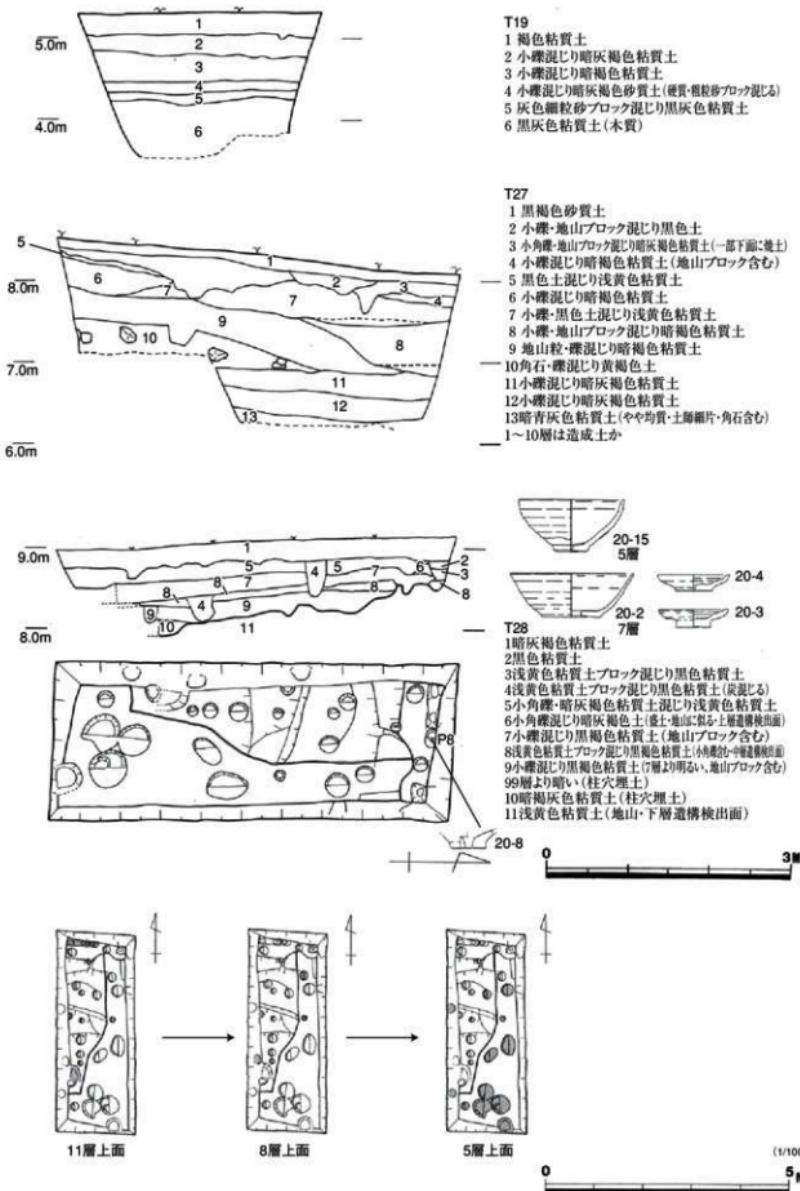
T38 2m×5mの調査区である。表土下には細角礫混じり暗灰褐色土が約45cm程厚く堆積しており、造成されている印象を受けた。地山にはクサリ礫が多く見られ、予想以上に深かったことから調査区の半分を遺構検出面まで掘り下げた。柱穴状の遺構が見つかり、土師器細片が出土した。地山面は調査区中央がやや高く、北側と南側へ緩やかに傾斜していた。

T39 山裾から一段上がった柿畑に設定した1m×5mの調査区である。表土下約50cmで土師器細片を多く含む黒灰色粘質土が確認され、柱穴状の遺構が見つかった。調査区北東隅では土師器細片と炭が大量に混じる土壤が見つかった。土師器はほとんど細片になっており、全形のわかるものはなかったが、皿(第20図・9)と壺(第20図・10)がある。土壤検出面の周辺でも土師器が多くみられるところから断割り調査を行ったところ、調査区北側は暗褐色粘質土ブロックが混じる地山土を盛って整地し、柱穴や土壤が造られていることがわかった。調査区のある段全体は削平した後、地山土を盛って整地されたと考えられる。

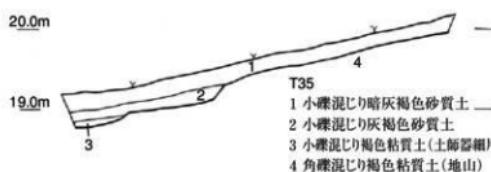
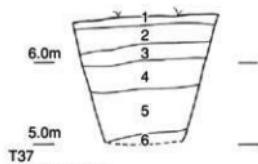
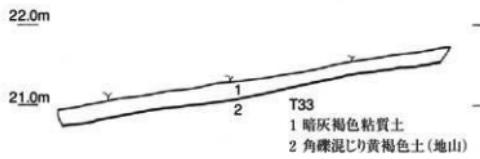
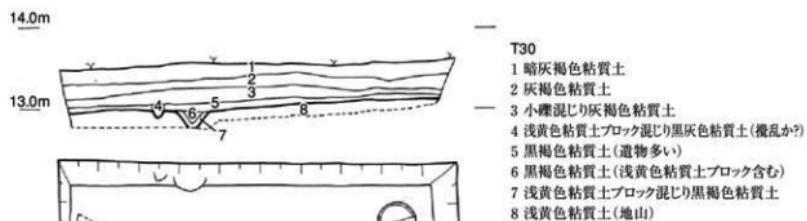
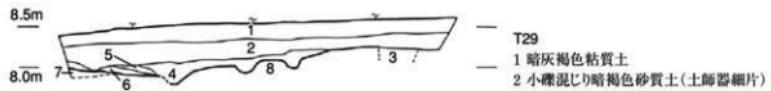
出土遺物(第20図・1～16)

仕切遺跡では弥生から中世後期にかけての遺物が見つかった。中世の遺物はT28とT39で多く見られるが、これまでの下府平野部の遺跡がほとんど中世前期頃まであったが、仕切遺跡では中世後期まで下るものも出土している。

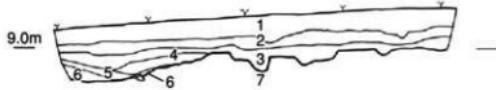
(1)は須恵器壺の底部である。底部はヘラ切りで切り離され、高台はやや内傾する。(2)～(11)は土師器で、(2)～(8)は中世前期のものである。(9)～(11)は全体的に薄手で硬質につくられており時期が下がる可能性がある。(12)は土師質の摺鉢で口縁端部面にヨコハケを施す。(13)は須恵質の摺鉢で口縁を折り曲げ、内面に3本以上の卸目が施される。(14)は東播系中世須恵器摺鉢の片口部である。(15)は古瀬戸の天目茶碗で後Ⅲ期(15世紀初頭)頃と考えられる。⁽¹⁾ 内外面に黒褐色の釉があつくか



第17図 T19-T27-T28実測図

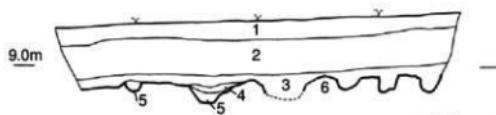
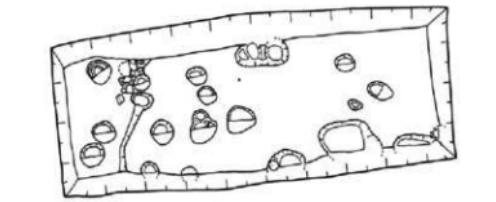


第18図 T29・T30・T33・T35・T37実測図



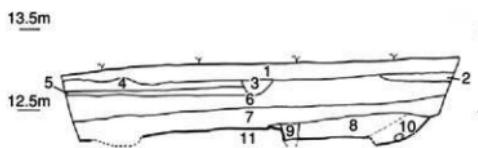
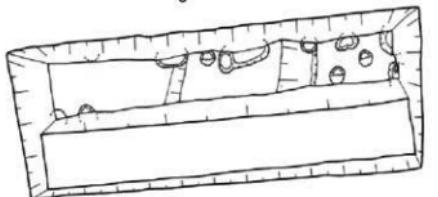
T36

- 1 黒褐色土
- 2 細角礫混じり暗褐色土
- 3 小角礫混じり黒褐色土(遺物細片)
- 4 砂・地山ブロック混じり黒褐色土
- 5 黒褐色土混じり黄褐色土
- 6 黒褐色土(地山ブロック少量含む)
- 7 礫混じり黄褐色土



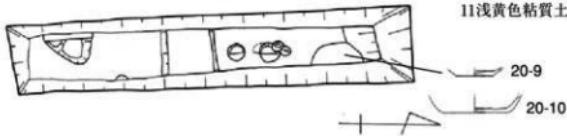
T38

- 1 暗灰褐色土
- 2 細角礫混じり暗灰褐色土
- 3 小角礫混じり黒褐色土
- 4 小礫・黄褐色土混じり黒褐色土
- 5 黑色土
- 6 礫混じり黄褐色土(地山)



T39

- 1 暗灰褐色土粘質土
- 2 暗赤褐色粘質土
- 3 浅黄色粘質土ブロック混じり暗灰褐色粘質土(根あり、擾乱)
- 4 浅黄色粘質土・暗赤褐色粘質土ブロック混じり暗褐色粘質土
- 5 暗赤褐色粘質土ブロック混じり暗黃褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土
- 7 黑灰色粘質土(小礫・土師器細片を多く含む)
- 8 暗褐色粘質土ブロック混じり浅黄色粘質土
- 9 暗褐色粘質土ブロック混じり黑灰色粘質土
- 10 浅黄色粘質土黒褐色土ブロック混じり暗褐色粘質土
- 11 浅黄色粘質土(地山)



第19図 T36・T38・T39実測図

かる。(16)は肥前系磁器の小椀で外面に淡青色の二重網目文が描かれる。全体的に器壁は厚く、純いつくりである。

半場口2号墳 T40・T41(第16図・第21図)

半場口2号墳とされる立石に接して調査区を設定した。周辺の調査区には枝番号を付けた。

立石は現状で高さ2.6m・幅1.6m・厚さ0.8mを測る。現状は畠の中に直立しているが、道路をつけるため北東の山裾を削りこんだようである。石の現状は正面から見ると将棋の駒のよう、側片は直線に近い。現状は石は全体が苔むして風化しており、詳細な観察は困難だが、斜め方向の加工痕跡らしい跡が見られる。切石に近い状態に加工されていると考えられる。石材は小角石を多く含んでいることから角礫凝灰岩と考えられ、周辺に分布している石と聞いている。

また、この石は近くの片山古墳の石室に住んでいた千年比丘尼（千年比丘・八百比丘尼）が投げた石と伝えられている⁽²⁾。千年比丘尼は人魚の肉を食べて長寿・強力を身につけた女性といわれ、全国的に類似した伝承が残る。

T40-1 石の南側に1m×5mの調査区を設定したが、古墳築造時の石室床面は奥壁付近を除いて擾乱されていると考えられたため、側壁の痕跡を確認するため東側を1m×2.2m程拡張した。

奥壁の掘形は南側では角礫・暗赤褐色粘質土ブロック混じり淡褐灰色粘質土（第7層）上面から掘りこまれている。第7層の下と石北側(T40-2)の掘形の掘込み面は暗灰褐色粘質土(第10層)が部分的にあり旧表土の可能性がある。このため、第7層は石の南側(T40-1)を中心にして盛られた整地土と考えられる。第7層中からは土錐(第20図・17)が出土している。掘形は石の北側(T40-2)は緩やかな二段掘で南側(T40-1)は比較的鋭角に掘られている。このことから石は堀形に北側から落とし込んで南へ引き起こした可能性がある。石の東側を拡張した結果、第7層上面で1.5m×1.1m程の不整円形のプランが確認できた。部分的に断ち割りを行ったが、埋土は炭粒の混じる暗灰褐色土で深さは10cm程であった。奥壁の角から直交して検出されたことから石室の側壁の抜取跡と考えられる。抜取跡の南端は第7層が第5層によって擾乱されていることから途切れているが、抜取痕の南端付近の第5層中から近世の土師器皿(第20図・18)が出土した。抜取跡内の出土ではないが、古墳が削平されて現在の状況になった年代をおよそ知ることができる。

石室の入口部分から大半は開墾等により削平されたと考えられ、土錐・奥壁の掘形・側壁の抜取痕以外には古墳に関連すると断定できる遺構・遺物は見つかなかった。

T40-2 石の北側に設定した2m×2mの調査区である。石の掘形を確認し、掘形内には裏込め状の石も見つかった。裏込石は10cm大の不定形のものが多く立石と同じ石材も見られることから石の仕上げなどで削った石も含んでいるのであろう。掘形の北側ではごく浅い溝状、柱穴状の落ち込みが見つかったが古墳に伴うものかは断定できなかった。

T40-3 1m×3.5mの調査区である。東側（山側）の墳端を確認するために設定した。地山は現地形のように緩やかに西側へ傾斜していた。墳端は傾斜が変わる地点と、小石が入ったごく浅い溝のような凹みがある地点になる可能性がある。しかし、どちらが墳端になるかは断定出来なかった。。

T40-4 T40-1の南側に設定した1m×3mの調査区である。調査区西側半分で溝状の落込みを確認したが、古墳に伴うかどうかは断定出来なかった。

T40-5 T40-1の西側に設定した1.5m×2.2mの調査区である。地山面は西側へ急傾斜しており、第4

層から青花(第20図・19)が見つかった。地山面には凹凸が認められる。石室の位置と地山面の傾斜から見ると、古墳を造る際に傾斜面に盛土を行って古墳を造った可能性がある。

T40-6 T40-1とT40-3の間に設定した1m×1mの調査区である。地山面はやや北東隅が落ち込んでいるが、古墳に関係するかは明らかにできなかった。

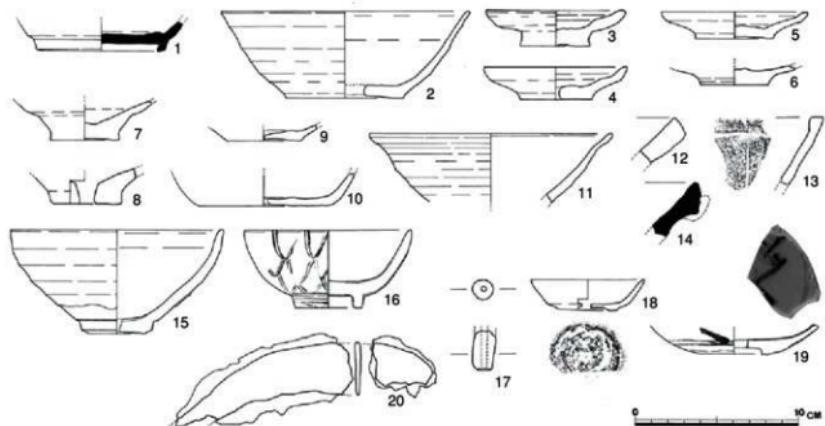
T41 石のある畠地の西端付近に2m×5mの調査区を設定した。表土直下で地山面が確認され、遺構・遺物は確認されなかった。T40-5の状況と併せてみると、T40-5とT41の間にはもともと谷があつたと考えられる。現地形の畠も緩やかな谷状を呈しており、おそらく半場口2号墳の墳丘などを崩した土で谷を埋め立て、現状の畠が造られたと考えられる。

出土遺物(第20図・17~21)

(17)は奥壁を据える際の盛土(第7層)から出土した土鍤である。片端は欠損している。(18)は側壁抜取痕近くの搅乱土から出土した土師器皿である。全体的に薄手で、底部は糸切り後に剥離し、穴があいている。灯明皿として使われたようで、内外面に黒色物が付着する。(19)は青花の皿である。碁笥底で外面と内面見込に黒灰色の模様が描かれる。見込は擬人化した「喜」が描かれている。およそ16世紀ころの染付皿C群である⁽³⁾。(22)は銹やマンガン質が多く付着しているが、形態から近年の鎌と考えられる。

註

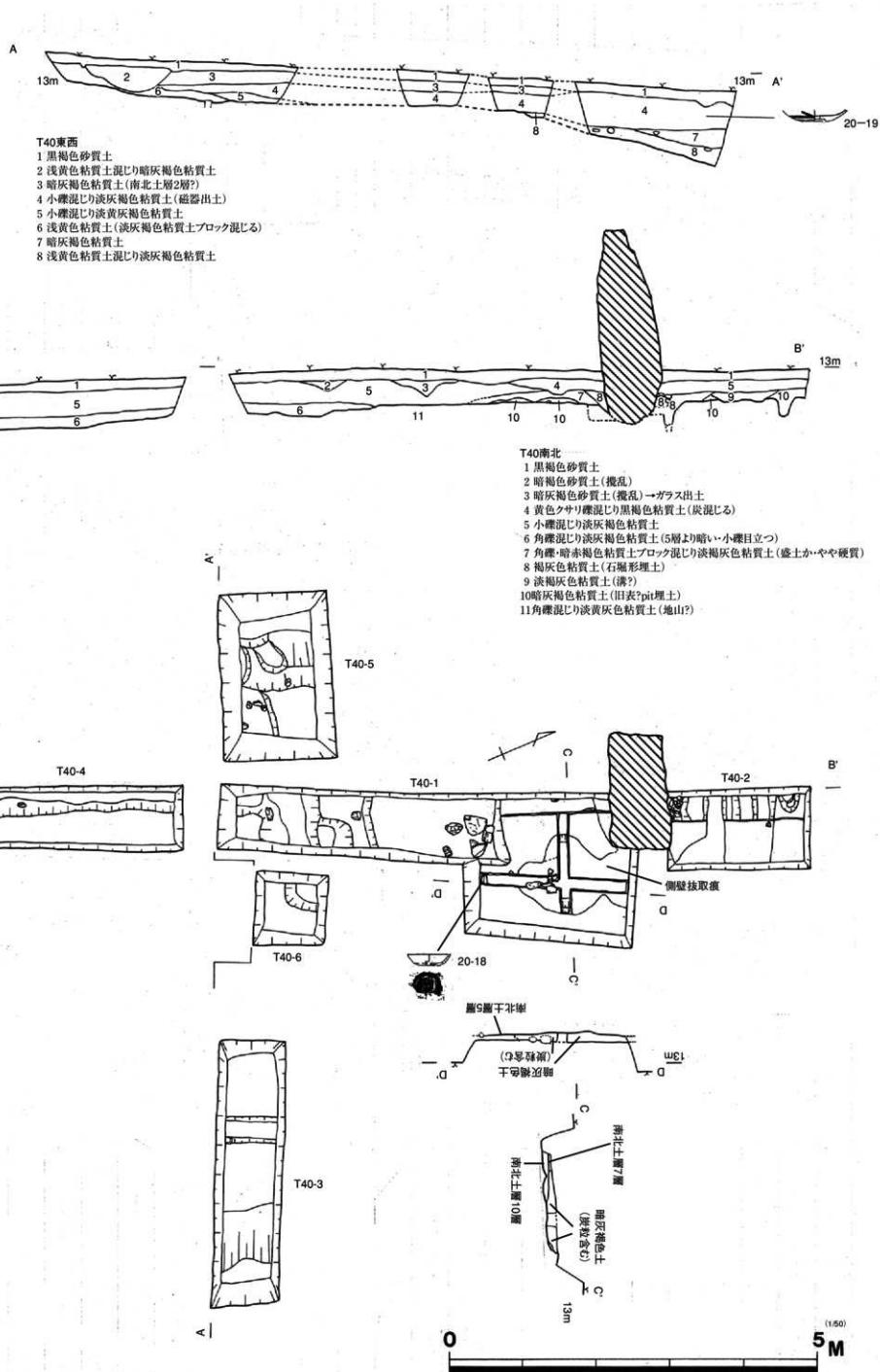
- (1) 藤澤良祐 1995「古瀬戸」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1997『研究紀要 第5輯』
瀬戸市埋蔵文化財センターの金子健一氏にご教示いただいた。
- (2)浜田市 1973「第四章 伝説と伝記」「浜田市誌 下巻」
- (3)小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」「貿易陶磁研究」第2号 日本貿易陶磁研究会
横井一郎 1995「中世後期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社



第20図 T27~39(仕切遺跡)・半場口2号墳出土遺物実測図

調査区	横文	弥生	古墳～古 代土器	須恵器	古代瓦	中世士師器		貿易陶磁器				中国 陶器	国産 陶器	近世～現代			計	その他
						白 百 赤 灰 灰 不明	青 白 青 同安 高麗	8	2	5	4			鹿島系 石見系 陶器 漆器	「石見系」 「陶器」 「漆器」			
T16																	8	
T19																	0	
T27				38	41	4	113			2		5		4	3	210		
T28	1	4	22		1	275	1	2	1	2		3	1		1	314		
T29				3	5		97			1						106		
T30	4	4	13				4						2		1	28		
T31		3	4				5									12		
T35							3									3		
T36							13									13		
T37							15									2	17	
T38		1				20			1				1			23		
T39					1		535						1		1	538		
計	0	6	52	86	5	0	1088	1	2	0	2	5	0	0	8	2	72	
																3	1272	

表11 半場地区出土遺物破片点数表



第21図 T40(半場口2号墳)実測図

排図番号	写真 図版	出土地点	種別	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	色(釉)調	胎土	焼成
20-1	82	T30	須恵器 壺	底径 7.4	高台内傾。(棒状工具で押す。)	底部へラ切り。	暗青灰色	1mm大白色砂粒多く含む。	やや不良
20-2	タ	T28地山ブロック帶下(第7層)	土師器 壺	口径 15.3 底径 7.2 器高 5.4	内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡赤褐色	1~3mm大赤褐色粒多く含む。		良
20-3	タ	T28地山ブロック帶下(第7層)	土師器 皿	口径 8.7 底径 4.3 器高 2.2	底部を厚く作り、体部は短く高い。	内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡赤褐色	0.5mm大白色粒多く含む。	良
20-4	タ	T28地山ブロック帶下(第7層)	土師器 皿	口径 8.8 底径 4.4 器高 2.0	口径部段あり。	底部回転糸切り。	淡黄褐色(やや赤み帯びる。)	0.5mm大砂粒少量含む。	良好
20-5	タ	T28地山ブロック帶下(第7層)	土師器 皿	口径 9.0 底径 4.8 器高 1.65	口縁端部を上方へ屈曲させる。	内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡赤褐色	0.5mm大白色砂粒多く含む。	良好硬質
20-6	タ	T28地山ブロック下(第7層)	土師器 皿	底径 4.2	底部を厚く作る。	内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡黄褐色(赤み強い)	0.5mm大白色砂粒少量含む。	良
20-7	タ	T28旧表土層(第7層)	土師器 皿	底径 4.3	底部は柱状高台ぎみに厚く作る。	内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡褐色	0.5mm大褐色粒微量含む。	良
20-8	タ	T28 P8	土師器 皿(底部穿孔)	底径 4.2	底部中央に穿孔。		淡灰褐色(やや赤み帯びる。)	1~3mm大砂粒多く含む。	良
20-9	タ	T39北側土壙上面	土師器 皿	底径 4.6		内外面クロナデ。底部回転糸切り。	淡黄褐色	1mm大黑色粒少量含む。	良
20-10	タ	T39北側土壙上面	土師器 壺	底径 8.0	全体的に薄く作り、体部は丸みを持つ。	内面浅いロクロナデ。	淡黄褐色	0.5mm大砂粒微量含む。	良好硬質
20-11	タ	T28表土	土師器 壺	口径 15.0	口縁端部はやや玉縁状の丸みをもつ。	内面丁寧な横ナード、外面凹凸めだらクロナデ。	淡赤褐色(一部にすす付着。)	0.5mm以下白色粒、赤褐色粒、金属素を少量含む。	良好硬質
20-12	タ	T39排土	摺鉢(土師質)			口縁端部面にヨコハケ残る。	淡灰褐色	1~3mm大砂粒多く含む。	不良
20-13	タ	T28	摺鉢(須恵質)		口縁部を折り曲げる。3本以上の鉗印あり。	外面凹凸あり。内面横ハケのち縫の閉口。	暗灰色(内面淡灰色)	1~2mm大白色粒、長石多く含む。	良
20-14	タ	T39	摺鉢(東播系須恵器)		口縁部分口	口縁端部に自然釉	淡青灰色(外面上に自然釉。)	1mm大黑色粒少量含む。	良好
20-15	タ	T28整地土下位(第5層)	古瀬戸天目茶碗(後期3ISC初)	口径 12.8 底径 3.4 器高 6.4		内外面に厚く有がかかる			
20-16	タ	T28近世遺構	磁器(肥前系)小椀	口径 10.2 底径 4.0 器高 4.8			淡緑色の釉。淡青色の二重網目文。	淡灰白色粒、白色粒微量含む。	良好
20-17	タ	T40-1右南側盛土(第7層)	土錐	幅 13.0 穴径 0.3			淡灰褐色	1mm大黑色粒少量含む。	良
20-18	タ	T40-1(第5層)	土師器 皿	口径 7.0 底径 3.6 器高 1.9	全体的に薄く作り、底部に穴を開ける。	内面浅いロクロナデ。底部回転糸切り。	暗灰褐色(内面一部淡褐色。一部黒色物付着。)	0.5mm大白色粒多く含む。	不良
20-19	タ	T40-5(第7層)	磁器(青花)皿	底径 4.2	碁笥底	内面に擬人化「喜」を描く	灰白色釉。模様は黒灰色から黒色。	精良。白色。	良
20-20	タ	T40-1排土	鉄器 鎌	刃部幅 3.1					

表12 半場地区出土遺物観察表

5.三宅地区 T42～T44（第7図・第22図～第24図）

三宅地区的平地部に調査区を3ヶ所設定した（T42～T44）。現状は大半が水田である。平地部は昭和初期に耕地整理が行われ、現在の水田区割りになっている。明治末頃の切図では縱長の条理の痕跡らしき地割が残っていた。いずれの調査区も現水田が隣接しているため、水田区画の中央に設定した。このため、古い水田畦畔などは検出できなかった。

調査区の南側の低丘陵部、現在の三宅地区的集落と重なる上府遺跡はかつての石見国府推定地3次調査で古代から中世の遺物、柱穴などが確認されていた¹⁰⁾。

調査の結果、T23でごく少量の中世土器が出土したが、他の調査区では遺構・遺物は見つからなかった。いずれも黒～灰色の粘質土が堆積しており、古代から湿地帯で水田等に利用されたと考えられる。

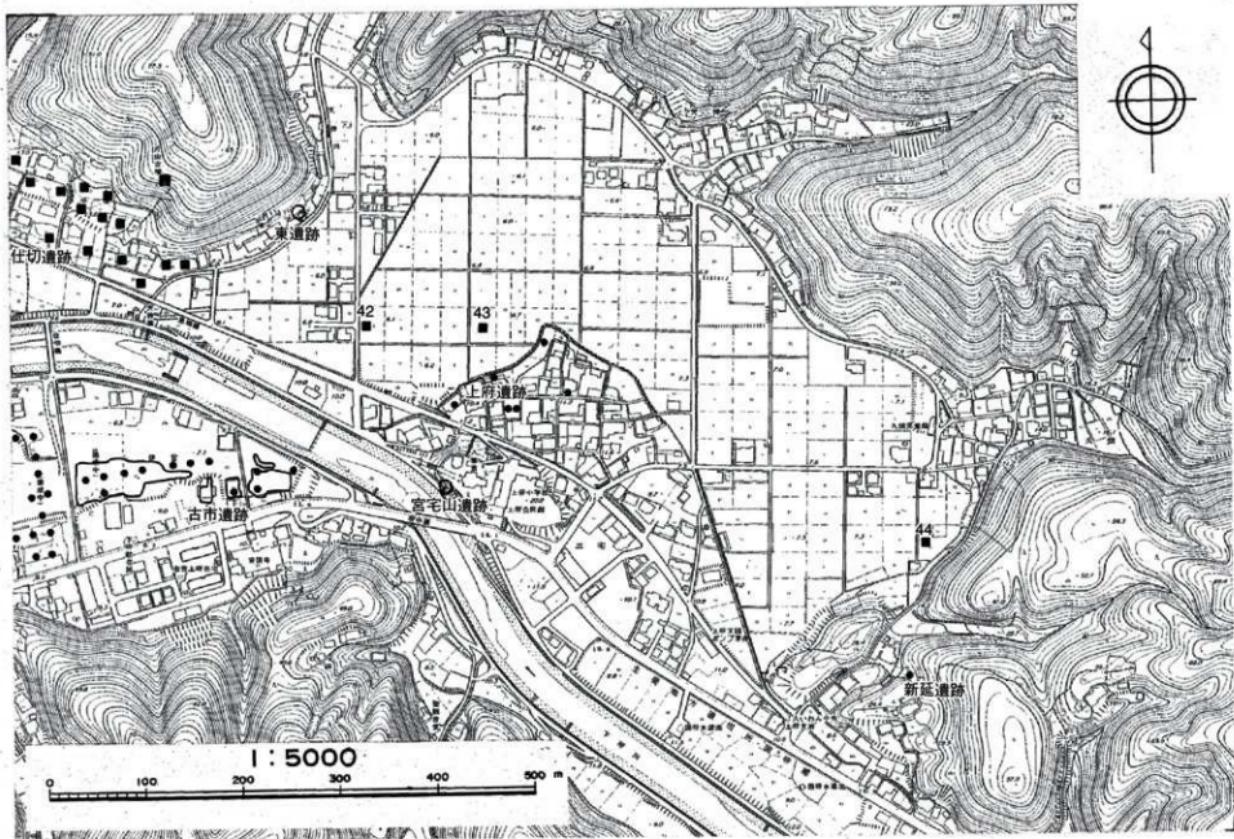
T42 2m×5mの調査区である。表土下約30cm・標高約5.9m以下は黒灰色の粘質土が堆積していた。黒灰色粘質土の中間部、標高約5.2mでは厚さ約20cmで白色細粒砂が堆積しており一時水害を受けたことがうかがえる。白色細粒砂の下の面では凹凸等は認められず、水田等に利用されたかは不明である。黒灰色粘質土の中間には木の枝など木質が一部認められた。表土下約1.8mまで調査を行ったが、表土付近から近現代の陶磁器が見つかったのみでその他の遺構・遺物は見つからなかった。

T43 2m×5mの調査区である。上府遺跡のある低丘陵に最も近い位置の調査区である。石見国府推定地調査の際に水田部は地下水の湧き出る低湿地であったと報告されている。表土下約30cm・標高約6.9m以下は暗青色粘質土、標高約5.8m以下は厚さ20cm程度緑灰色系の粘質土、以下は黒灰色～暗灰色の粘質土が堆積していた。緑灰色粘質土とその上層から中世土器の細片が見つかった。表土下約2.1mまで調査を行ったが、その他の遺構・遺物は見つからなかった。

T44 2m×5mの調査区である。表土下には礫の混じる灰褐色粘土があり、近現代の遺物が出土することから水田床のための造成を行っていると考えられる。表土下に水田暗渠があったため湧水が激しく、表土下約1.2mまで部分的に調査を行った。暗灰色～灰褐色系の粘質土が堆積しており、遺構・遺物は確認できなかった。

註

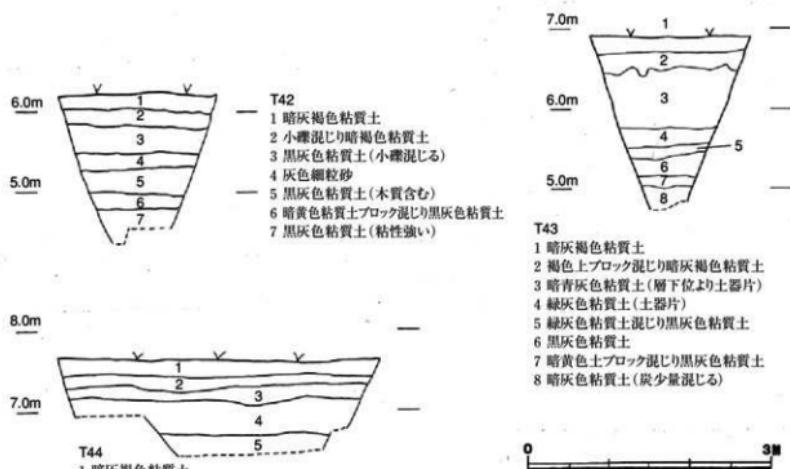
(1)島根県教育委員会 1980『石見国府推定地調査報告Ⅲ』



第22図 三宅地区周辺図 (■は今回調査地点、●は既応の調査)



第23図 三宅地区切図



第24図 T42-T43-T44土層図

調査区	縦文	弥生	古墳～古代土器	須恵器	古代瓦	中世土器	白釉	素窓	六角	白胎	直	不明	龍泉	同安	高麗	中国陶器	国産陶磁器	近世～現代			計	その他
																		肥前系	石見系	その他		
T42																	2	1	22		7	
T43																	1	1		1	11	
T44																	7		72		15	
計																	10	2	94		33	

表13 三宅地区出土遺物破片点数表

IV. 小 結

国府地区での3ヵ年にわたる調査の結果、石見国府跡は確認できなかった。しかし各地区で遺構・遺物が確認されており、国府地区的古代から中世にかけての景観が具体的に判明しつつある。今回の分布調査と試掘調査で新たに見つかった遺跡は秋ヶ平遺跡・千足遺跡・東遺跡のみで、他は古墓群がほとんどであった。

1 横路遺跡について

横路遺跡は過去の開発事業に伴う発掘調査から土器土地区と原井ヶ市地区で古代から中世の大集落が確認された⁽¹⁾。今回の確認調査の結果、遺構や遺物が多く確認されたのは山際のT10・T13、川に近いT14・T18である。

横路地区は北の山側の調査区(T9~12)は古代以来、後背湿地帯であったと考えられる。T10では泥層から古代～中世の遺物、T13では表土付近から二次堆積と考えられる弥生時代から中世頃の遺物が見つかった。おそらく山際の宅地・市道付近に小規模な集落が存在していたと考えられる。

T10の花粉分析の結果、イネ科の花粉が多く出現していることから周辺は水田であった可能性がある。

鉄道線路沿いの調査区(T1~4、T18)は下府川の影響を強く受け、泥層・砂・粘質土と堆積状況の変化が目立つ。T18では中世頃の木製品(角材・杭類)が見られ流木もあることから、特に河川に近い川岸であったと考えられる。現在の状況と比べてかなり川幅は広かったことがわかる。

下府川と山の中間に位置する調査区(T5~8)では発掘調査が行われた川側の横路遺跡(土器土地区)の広がりが想定された。しかし、調査の結果、横路遺跡(土器土地区)の遺構面に似た土(暗赤褐色粘質土)が確認されたが、遺構は確認できず、遺物の出土量も少なかった。中世頃は比較的安定した自然堤防上の微高地となったと考えられ、畑や水田として利用された可能性もある。中世頃の土の下では横路遺跡(土器土地区)と同様に砂層が確認された。土器土地区ではこの砂に古代の瓦片や須恵器が混じっており、おそらく古代以降は川が蛇行する状態であったと考えられる。T8では石見国府推定地1次調査や横路遺跡(原井ヶ市)発掘調査で見つかった近世頃の畦状遺構の統きが見つかった⁽²⁾。

川側、既に発掘調査が実施された横路遺跡(土器土地区)のすぐ北側の調査区(T14)では北側への落込みが確認された。前述の平野中間部の調査区(T5~8)は空閑地であったことと併せると集落の北限となる区画溝の可能性がある。出土遺物は横路遺跡(土器土地区)と大差なく、中世前期のものである。土師器・白磁・青磁などがあるが、細片になっているものが多い。これまでの調査結果から併せて見ると横路遺跡(土器土地区)は中世前期という限られた時期に下府川に隣接して形成された集落と考えられる。このような集落が中世前期に出現することは河川が定期に入り、平野の開発や河川を利用した水上交通が活発化したことがうかがえる。

2 秋ヶ平遺跡について

清水地区的T24の南側には古代末期から中世初期頃の遺物と杭列・石敷が見つかった。水田面より1段上がった山際に位置している。秋ヶ平遺跡の南の山裾には近世には才ヶ坪の石疊道につながる道が存在する。現在は崩落のため通行できないが、近世以前には西の浜田地区への通行に利用さ

れていたようである。

杭列・石敷の間や直上からは須恵器が多く出土した。杭列は直径約3cm程の自然の木の先端を斜めに切った簡単で細めのものを多く打ち込んでおり、護岸としては雑な印象を受ける。山側には細疊層が傾斜してきており、ある程度平坦な幅は70cm程しかない。前述のとおりT24の山側には道が現存していることから古代末期の道の可能性もある。湿地帯に石や土器を入れることによって足場の安定を意図したのかもしれない。

また、花粉分析の結果、杭列・石敷の検出された層(第12図・第5層下位)より下ではイネ科の花粉が多く出現していることから水田の区画の可能性もある。

護岸・水田区画・道のいずれかの可能性があるが、詳細は今後の類例の検討が必要であろう。

T24では須恵器・土師器が多く見つかった。中世前期の白磁片は1点細片が見つかっているが、他の遺物は主に古代～中世初期のものであろう。

須恵器は前述したが、底部のつくりと体部のつくりから8種類に分類できる。

- ・ヘラ切り底部に低い高台を付け、体部が直線的に立ち上がるもの(第13図・2)
- ・ヘラ切り底部に内面に段をつけた高台を付け、体部が丸みをもつものの(第13図・3)
- ・体部に丸みを持ち、細く外開きの高台をつけるものの(第13図・4・5)
- ・底部を厚くつくり底部の端をつまみ出して低い高台状につくるものの(第13図・6、7、16)
- ・底部をやや厚くつくり体部は薄く直線的に立ち上がるものの(第13図・8)
- ・平底で体部が底部から丸みをもって立ち上がるものの(第13図・9、10、11)
- ・平底で体部が底部から直線的に立ち上がるものの(第13図・12、13)
- ・底径がやや小さく底部を厚めにつくるものの(第13図・14～15、17～19)

このうち底部をヘラで切り離すものは最初の2種類(第13図・2、3)であとは底部は回転糸切りのものである。石見地城ではおよそ8世紀後半以降に底部の糸切り技法が定着すると考えられ、大半は9世紀から11世紀の須恵器と考えられる。

この中で最も古い時期の須恵器は(第13図・2)で石見空港建設地内遺跡編年のⅢ期(8世紀後半から9世紀初頭)にあたる。(第13図・3)はやや時期が下り9世紀前半とを考えられる。⁽³⁾

(第13図・22)の口縁部は薄手で硬質な焼きで最も新しい須恵器と考えられる。およそ古市遺跡Ⅰ期(11世紀後半から12世紀前半)と考えられる。

他のものは年代を決定しにくいが、焼成が悪い不良品もあり、土器の主体が須恵器から土師器へ転換していく10世紀～11世紀頃のものであろう。石見地城では灰釉陶器、黒色土器の出土が非常に少なく、この時期でも須恵器が土器の主流であったと考えられる。防長産の綠釉陶器は出土量が比較的目立ち、在地の土器生産に影響を与えていた可能性も考えられる。

土師器も全体的に焼成が悪く、焼成が良く薄手で灰白色を呈する古市遺跡Ⅰ期(11世紀後半～12世紀前半)より古いと考えられる。⁽⁴⁾およそ11世紀頃であろうか。こうした土師器は石見国分寺跡の溝状造構、前場紙漉遺跡(第5図・1～4)で見られる。⁽⁵⁾

これまでの下府平野の調査結果では古代から中世の遺物が混在して出土することが多かったが比較的時期の限られる遺跡であろう。

3 千足遺跡について

上ノ浜地区には縄文・弥生～中世の集落の存在が想定される。かつての石見国府推定地調査の二次調査地点で、弥生～中世までの遺物が出土した伊甘神社脇遺跡と直線距離で150m程の位置にあり、両遺跡の密接な関係が伺える。両遺跡の中間に位置する下府市営住宅付近でも須恵器(第3図・1)が出土していることから、広範囲に遺跡が存在する可能性がある。千足遺跡のT26では中世頃の柱穴、落ち込み状遺構が確認された。東側のT25では湧水が激しく、笠山から落ちてきた自然石類・土砂に混じって遺物の破片が多量に出土した。笠山の中腹あるいは山頂部に遺跡の存在が考えられる。弥生時代から中世にかけての遺物が大量に出土したが、最も多いのは古代の土師器・須恵器類であった。飛鳥時代から奈良時代にかけての特徴的な畿内系土師器も出土しているが、硯など官衙の存在を示す遺物は出土しておらず、国府との関連は断言できない。

4 仕切遺跡について

半場地区は北側の微高地及び丘陵斜面に下府廃寺跡・片山古墳など国府地区を代表する遺跡が確認されている。川に近い低地の調査区(T15～17・T19・T27・T37)では遺構や顯著な遺物は確認されなかった。古代以来、湿地帯のため生活は行われなかつたと考えられる。

仕切遺跡は中世の柱穴跡などが確認されたが、古代の遺物も出土している。周辺でこれまで調査された古市遺跡(平成5・6年度調査)や横路遺跡(平成8年度調査)と比較すると、古市遺跡等では多くの柱穴・井戸跡・土器・陶磁器が出土し、当時の拠点的な町と考えられ、中世石見府中(国府)との関連が考えられる。平安時代末～南北朝時代(11世紀後半～14世紀代)の遺物が多量に出土する。なお、古市遺跡は15世紀～16世紀頃に集落自体は衰退するが、宗教的な木製品が多く出土する区画溝に囲まれた建物が形成される。

対岸の仕切遺跡では出土遺物は土師器が大半で陶磁器があまり見られない。平安時代末から室町時代頃(11世紀後半～15世紀後半)にかけての遺物が少量ながら出土している。山裾部の地山面は川側へ緩やかに傾斜しており、集落は山を削って造成を繰り返して生活したことが判明した。

下府川沿いに存在した中世遺跡でも遺物の出土量と時期に差がみられ、集落の様相が異なる。この地域の中世の景観をより具体的に知ることができる。

5 半場口古墳群について

半場口2号墳は片山古墳以前のこの地域の有力者の古墳(首長墓)と考えられる。奥壁は風化しているが、石は側邊が直線的で斜め方向のノミ跡らしい加工痕が見られる。このことから片山古墳の石材ほど丁寧ではないが、切石状に面を整えていたと考えられる。石材は小角石を多く含んでいることから角砾凝灰岩と考えられ、北西の谷奥に露頭がみられる。

調査の結果、奥壁の東側で側壁の抜取痕を確認し、この石が半場口2号墳の横穴式石室の奥壁と判断できる。石室は奥壁しか残っていないが、石室の規模は高さ2.6m×幅1.6m以上と考えられ、石央地区では大きい部類に入る。側壁の抜取痕近くから近世頃の薄手の土師器小皿(第20図・18)が見つかったが、抜取痕内の出土ではないため、石室が破壊された時期は特定できない。

この奥壁は近くの片山古墳の石室に住んだ千年比丘尼が投げた石という伝説がある^⑦。千年比丘尼は人魚の肉を食べて長寿・強力を身につけた女性といわれ、全国的に類似した伝承が残る。千年比

丘尼は千年比丘・八百比丘などとも呼ばれる。

古墳に関連する遺物としては石を据える際の整地土から出土した土錐(第20図・17)のみで副葬品等は見つからなかった。おそらく古墳の墳丘等を崩した土を西側へ流して谷を埋め立て、畑に造成したと考えられる。谷を埋め立てた土からは16世紀頃の青花(第20図・19)が出土しており、古墳が破壊された時期を想定できる。この頃までに墳丘と石室が破壊されて現状の奥壁のみになった可能性がある。

半場口1号墳は天井・側壁共に2枚の板状の割石を使った長さ1.15m、高さ0.2m、幅0.35mほどの小型の箱式石棺をもつ古墳と考えられる。石材の組合せは両側壁で小口板を挟んでいる。現在石棺は丘陵斜面の中ほどに小口が露出しており、石棺墓としては不自然である。石棺の上方は道にするために削平され、下方に平坦面があり、現状の周辺地形は当初よりかなり改変されていると考えられる。

国府地区では大まかに半場口2号墳（6世紀末～7世紀代か）・片山古墳（7世紀中頃）・下府廃寺跡（7世紀末頃）と有力者の存在を示す遺跡が続き、石見国府が置かれる以前の状況を知る上で重要な要素である。おそらくこうした有力者に支えられて国司・国府などを置く国制度が国府地区を中心に実施されたと考えられる。

6 三宅地区について

三宅地区では現在の水田部を調査したが、顯著な遺構・遺物は見つからなかった。いずれも暗灰系の粘質土が厚く堆積しており、古代以来湿地帯で水田などにも利用されていた可能性もある。三宅地区は条理制の地割が残ってたと考えられているが、調査区は現水田の中央に設定したこともあるが、畦などの区画状の遺構は確認できなかった。

T42では灰色細粒砂が堆積しており、一時洪水を受けた可能性がある。現在の下府川は上府八幡宮・上府小学校のある丘陵と安国寺や古市遺跡のある沖積地の間を流れているが、かつては大きく北へ屈曲し、三宅地区の北側を流れていた可能性もある。

古代から中世の集落は現在も家が立ち並ぶ南側の低丘陵上（上府遺跡・石見国府推定地3次調査地点）で確認されている。平野部には条理制が敷かれていた可能性を考慮すると集落は上府遺跡や山際に散在して存在し、平野部は水田等に利用されていたと考えられる。ただし、平野部の北側は未調査であり、今後の検討課題である。

7 まとめにかえて

平成11年度に横路地区と半場地区南側低地、平成12年度に清水地区・上ノ浜地区・半場地区、平成13年度に三宅地区的水田部と調査を実施したが、国府跡と直接関連する遺構・遺物は確認されなかった。古代の遺物はどの地区でも出土するが、ほとんど遺構に伴わない状況であった。

下府川によって形成された現在の平野部は大半が中世以降に安定した状況になり、遺跡が形成されていたことがわかった。このことから下府平野部に従来のような広い方形区画を設定して国府域を推定することは困難な状況になったといえる。石見国府跡(中国)は伊賀神社を北西隅に置く方六町、唐鐘地区に方四町の国府域が想定されていた。^[11]伊賀国府跡(下国)の国府域は左右対称でとらえると南北約180～東西約200mで、西に大きく広がる可能性も考えられている。^[12]

従来の歴史地理学的研究から方形の国府城が設定されることが多かったが、近年の国府研究では想定された国府城に周辺官衙などの建物群が取まらないことが指摘されている。^[13]また、大・上国と中・下国では国府の規模に格差が見られ、国の等級で国府の規模が異なる可能性がある。全国各地で発掘調査によって判明した国府はほとんどが大・上国もので、これらの規模を中国である石見に当てはめるのは無理であろう。調査で判明した主な国府跡の規模は伊賀国府跡（下国）は東西41.4m・南北44.4m、伯耆国府跡（上国）は東西84m・南北94.5~106mであり、中国である石見国府跡の規模もある程度想像できる。今後は方形区画のみにとらわれず、政府と周辺官衙の確認が必要であろう。

石見国府推定地としては、これまで「仁万から下府への移転」・「二宮から下府への移転」・「下府・上府・唐鏡周辺」などがあげられている。^[14]前2者の他の地区から下府へ移転した説は「ミカド」「ゲヤ」「チミヤ」など地名に扱るところが大きい。下府説の「御所」の地名に扱る点も同様である。^[15]いずれの地名も直接国府の存在を示す地名ではなく、成立期の国府を他の地区に置く根拠は薄い。発掘調査で確認される「国府」は主に8世紀中頃以降のもので、それ以前は国司の「官宅相当施設」が政治の中心であった可能性が強い。成立期の石見国府の位置を確定することは現状では困難と考えられる。

仁摩町では「御門」の地名があったとされる清石地区周辺で発掘調査が行われたが、顯著な古代遺跡は確認されなかった。^[16]仁摩に国分寺霧籠神社が置かれていたとされる点も、当初から石見国分寺は国府地区に存在した可能性が強く、^[17]成立期の国府が仁摩にあった根拠にはならない。

江津市西部（二宮町・敬川町周辺）でも道路建設などに伴い発掘調査が実施され、多くの古代から中世の遺跡が確認されているが、国府をにおけるだけの遺跡は見つかっていない。^[18]

また下府の府中神が合祀された伊甘神社周辺という説も神社自体が移動してきた可能性があるため神社の存在を根拠に国府の位置を想定することはできない。

浜田市国府地区では7世紀中以降には片山古墳・下府庵寺がつくられ、8世紀中頃には石見国分寺が造営される。また、古市遺跡や横路遺跡など平野部で古代から中世の大規模な集落が確認されている。これらの遺跡は国府が判明していない現段階では断言できないが、出土遺物などから一般農村集落とは考えにくい。おそらく国府の周りに存在する「国府集落」のような性格が考えられる。^[20]古墳時代終末から鎌倉時代頃までは、国府地区（伊甘郷）は遺跡から見ると石見國の中心であったと考えられる。

今回の調査で国府跡は確認できなかったが、広い範囲で調査を継続することにより市内の重要遺跡が集まる国府地区の歴史をさらに明らかにすることができるであろう。

仁摩町・御門→下府町・御所	野津左馬介「島根県史」1925
江津市二宮町・恵良→下府町・御所	大島幾太郎「那賀郡史」1970
伊甘郷	齋藤茂吉「柿本人麿」1935
下府村（伊甘郷）	矢富熊一郎「柿本人麻呂と鶴山」1964
下府町・御所・御館府（御立夫）	藤岡謙二郎「国府」1969
伊甘神社を北西隅に置く方六町の国府城	山本清「仁摩町誌」1972 「新修島根県史」1968
上府町・府中	石井悠「古代石見の役所跡について」1986
唐鏡（国分町）	
主軸をほぼ真北方向にとる方四町の国府城	

表14 石見国府推定地一覧 （石井悠 1986「古代石見の役所跡について」より作成・追加）

- 註
- (1)浜田市教育委員会 1997「横路遺跡（土器市地区）」
浜田市教育委員会 1998「横路遺跡（原井ヶ市地区）」
- (2)島根県教育委員会 1978「石見国府推定地調査報告Ⅰ」
前掲註1
- (3)須恵器については以下の文献を主に参照した。
島根県教育委員会 1985「日脚遺跡」
島根県教育委員会 1992「大淀遺跡」
「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」
島根県教育委員会 1995「久本奥窓跡」
『一般国道9号江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 浜田市教育委員会 1998「横路遺跡（原井ヶ市地区）」
仁摩町教育委員会 2001「原田遺跡外発掘調査報告書」
- (4)柳原博美 2001「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第9号 松江考古学講話会
- (5)浜田市教育委員会 1989
『石見国分寺跡第1期調査概報』
原裕司1992「浜田市・古市遺跡の遺物」
『松江考古』第8号 松江考古学講話会
- (6)大谷晃二 1993「片山古墳群測量調査報告」
『下府庵寺跡』浜田市教育委員会
- (7)浜田市 1973「第四章 伝説と伝記」『浜田市誌 下巻』
(8)山陰の箱式石棺一覧表でも半場口1号の石棺が記されており、石材と大きさ（空間）による分類でIA類に分けられている。IA類は山陰でも普遍的に分布しているが、通常の箱式石棺に比べ、小型のものという印象をうける。山本清 1971「山陰の石棺について」
『山陰文化研究紀要』11号 島根大学のち、山本清1971「山陰古墳文化の研究」山本清先生退官記念論集刊行会・山本清1989「出雲の古代文化」六興出版に再録
- (9)浜田市教育委員会 1993「下府庵寺跡」
(10)島根県教育委員会 1980「石見国府推定地調査報告Ⅲ」
(11)藤岡謙二郎1969「国府」吉川弘文館
- 石井悠 1986「古代石見国の役所跡について」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
- (12)三重県埋蔵文化財センター 1992
「伊賀国府(第4次)発掘調査報告」
- (13)近年の国府研究については主に下記の文献を参照した。
山中敏史 1994「古代地方官衙遺跡の研究」堺書房
網野善彦他 1995「シンボジウム日本の考古学5
歴史時代の考古学」学生社
山中敏史 1995「古代地方官衙論」
「考古学研究会40周年記念論集 展望考古学」
考古学研究会
大林達夫 1995「周防国府の建築群とその景観」
「国立歴史民俗博物館研究報告 第63集
共同研究「都市空間の形成過程についての研究」」
国立歴史民俗博物館
森宮歴史博物館・三重県埋蔵文化財センター 1996
「森宮・国府・国分寺－伊勢のまつりと古代の役所－」
大林達夫 1997「院と所－周防国府の解明にむけて。
その1－『古文化談叢』第38号 九州古文化研究会
大林達夫 1998「国府メモ－周防国府の解明にむけて。
その2－『山口県史研究』第6号 山口県史編さん室
- 寺村光晴他 1999「幻の国府を掘る－東國の歩みから－」
雄山閣出版
- (14)石見国府推定地については諸説あるが、以下の文献にはこれまでの主な説が簡潔にまとめられている。
石井悠 1986「古代石見国の役所跡について」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
- 梨田精1987「幻の石見国府跡と国分寺」「亀山」第14号
浜田市文化財愛護会
- 国立歴史民俗博物館1986
『国立歴史民俗博物館研究報告 第10集
共同研究「古代の国府の研究」』
- 桑原詔一 1995「伊賀郷の歴史的背景」
『伊賀土地区画整理事業に伴う 古市遺跡発掘調査概報』
浜田市教育委員会
- 石井悠 1996「石見国」「国府－畿内・七道の様相－」
日本考古学協会三重県実行委員会
- (15)新人物往来社1991「日本地名辞典」では、京都以外にみえる「御所」の地名は五所の当て字で神社を合祀した所とされる。
- (16)仁摩町教育委員会 1989
『仁摩健康公園造成工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 仁摩町教育委員会 1992
『仁摩健康公園開業事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 仁摩町教育委員会 1996「馬庭遺跡発掘調査報告書」
仁摩町教育委員会 1998「清石遺跡外発掘調査報告書」
仁摩町教育委員会 1999
『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』
仁摩町教育委員会 2001「原田遺跡外発掘調査報告書」
- (17)児島俊平 1992「鳥の骨を探る」
『郷土石見』31 石見郷土研究懇話会
- (18)前島己基 1986「山陰における初期造寺活動の一侧面」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
内田律雄 1986「石見国分寺瓦について」
山本清先生喜寿記念論集「山陰考古学の諸問題」
同記念論集刊行会
浜田市教育委員会 1989「石見国分寺跡第1期調査概報」
原裕司 1990「石見国分寺と誕生仏」「亀山第17号」
浜田市文化財愛護会
- (19)江津市教育委員会 1992「古八幡付近遺跡」
江津市教育委員会 1993「宮倉遺跡」
島根県教育委員会 1995「半田浜西遺跡」「二宮C遺跡」
『一般国道9号江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書』
魂伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窓跡
島根県教育委員会1997「飯田C遺跡」
『古八幡付近遺跡』
『嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡』
一般国道9号江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2000「古八幡付近遺跡」
『神主城跡・室町商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・
横路古墓』一般国道9号江津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書』

鳥取県教育委員会 2001 「恵良遺跡」

「恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸(三)神社跡(上条古墳)・立女遺跡 一般国道9号江津道路建設予定地内 理蔵文化財発掘調査報告書IV」

(20)「国府集落」の用語は武藏国府の事例で用いられている国寧を取り巻くように存在する、一般集落より卓越した集落である。武藏国府の事例では道路等が確認され、国府城との関連が具体的に述べられている。近年、「官衙的」という表現も用いられるが、これまで調査された浜田市国府地区の遺跡は円面鏡が確認されていない。平瓦片が多く見られるが、瓦葺建物も確認されていない。通常用いられる「官衙」の条件を満たしておらず、「国府集落」の表現を用いている。

荒井健治 1987「武藏国府の現状－国衙・国府について－」『東京考古』5 東京考古談話会

荒井健治 1992「武藏国府における中世遺構の調査の現状」「府中市埋蔵文化財研究紀要 第1号」 府中市教育委員会

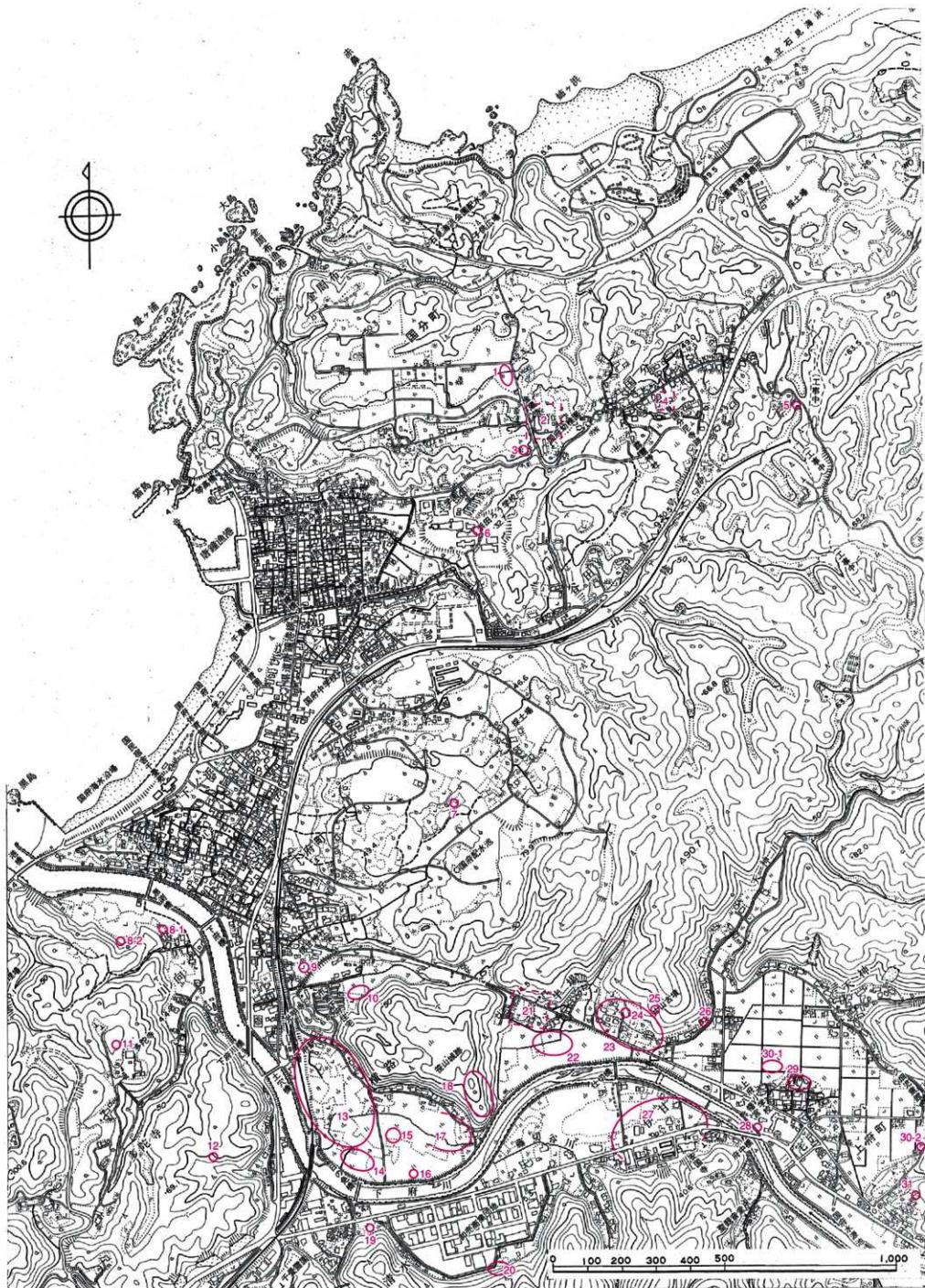
荒井健治 1993「国府(集落)"城"存在の可能性について」

『東京考古』第11号 東京考古談話会

荒井健治 1995「国宁周辺に広がる集落遺構の性格について－武藏国府周辺の状況をもって－」『国立歴史民俗博物館研究報告 第63集 共同研究「都市空間の形成過程についての研究」』 国立歴史民族博物館

番号	遺跡・調査地点名称	種別	概要
1	前場紙漉遺跡	集落跡	須恵器・土師器・陶磁器・古代瓦出土。
2	石見国分寺跡	寺院跡	須恵器・土師器・誕生仏・古代瓦出土。 塔跡と周辺を調査。寺城は未確定。
3	石見国分寺瓦窯跡	瓦窯跡	平安時代初期頃の平窯・古代瓦出土。
4	石見国分尼寺跡	寺院跡	須恵器・誕生仏・古代瓦出土。柱穴。寺域は不明。
5	奈古田窯跡	須恵器窯跡	溶着須恵器出土?。7~8世紀頃の窯跡か。
6	浜田ろう学校敷地古墳	古墳?	石棺?・消滅。
7	大平遺跡	散布地	砂丘面に弥生~中世の遺物が散布。消滅。
8-1 8-2	川向遺跡	集落跡	弥生~中世の遺物・古代瓦・木偶・曲柄又鋤。 古代瓦少量出土。中世前期の船着場?
9	伊甘神社脇遺跡 石見国府推定地第2次調査	集落跡	縄文~中世の遺物・古代瓦。古代~中世の柱穴。 国府推定地とされることが多いが、隣接する式内社伊甘神社は移転したものと考えられる。
10	千足遺跡 平成12年度確認調査	集落跡	縄文~中世の遺物・古代瓦少量出土。中世頃の柱穴。
11	多陀寺遺跡	散布地	須恵器・土師器出土。 多陀寺には平安時代の天部像群(県指定文化財)がある。
12	中ノ古墳	古墳?	横穴式石室状の石組
13	横路地区 平成11年度確認調査		弥生~中世の遺物が散発的に出土する。 北の山側は湿地帯で横路遺跡(土器土地区)との間は空閑地になる。 山際に古代~中世の遺跡が存在する可能性がある。
14	横路遺跡(土器土地区)	集落跡	下府川に隣接する中世前期の集落跡・古代瓦出土。
15	石見国府推定地第1次調査		近世頃の畦状造構。
16	横路遺跡(原井ヶ市地区) A調査区	水田跡	洪水砂で埋没した中世前期頃の水田跡。
17	横路遺跡(原井ヶ市地区) B-C調査区	集落跡	古代~中世の集落跡。西側の広がりは不明だが、古代の遺物が多く出土する。 古代~中世の土器・古代瓦多く出土。
18	篭山城跡	山城跡	掘切・曲輪。
19	秋ヶ平遺跡 平成12年度試掘調査	散布地	古代頃の杭列・石敷。須恵器・土師器出土。古代瓦少量出土。
20	清水地区 平成12年度試掘調査		土師器少量出土。
21	下府庵寺跡	寺院跡	白鳳末~平安時代中期頃の寺院跡。 塔跡・金堂跡を調査。古代瓦多量出土。弥生土器・中世の遺物も出土。
22	半場地区		平成11年度試掘調査。 古代以来湿地帯と考えられる。
23	仕切遺跡 平成12年度確認調査	集落跡	古代~中世の遺物・古代瓦少量出土。中世の集落跡。 対岸の古市遺跡と比べ遺物が少ない。
24	半場口古墳群 平成12年度確認調査	古墳群	1号墳(箱式石棺) 2号墳(横穴式石室)
25	片山古墳	古墳	外護列石をもつ方墳・無袖横穴式石室。
26	東遺跡	散布地	須恵器。推定山陰道に面する。
27	古市遺跡	集落跡	古代~中世の多量の遺物・中世の集落跡。古代瓦多量出土。 中世前期頃の石見府中に関連する町と考えられる。 南の山側は未調査だが、古代の遺跡が存在する可能性がある。
28	宮宅山遺跡	散布地	山頂部を削平した二次堆積の土砂より土師器・古代瓦少量出土。
29	上府遺跡 石見国府推定地第3次調査	集落跡	古代~中世の遺物。中世頃の柱穴。
30-1 30-2	三宅地区 平成13年度試掘調査		推定条理地割内で、古代以来湿地帯である。 土師器少量出土。水田の可能性もある。
31	新延遺跡	散布地	山の斜面より単発的に須恵器が出土。

表15 国府地区調査結果概要



第25図 国府地区調査成果図 (1/10,000)

V. 横路地区T10（横路遺跡）・清水地区T24（杣ヶ平遺跡）における微化石分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株）

はじめに

本報告は、浜田市教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した市内遺跡発掘調査事業のT10およびT24調査に係る自然科学分析業務の内容を、渡辺がまとめ直したものである。

横路遺跡・杣ヶ平遺跡は浜田市東部の国府地区に位置し、下府川沿いの沖積低地に立地する。

分析試料について

図1に調査トレーナーの配置を示す。前述のように、T10、T24において分析試料を採取している。各分析地点の模式柱状図を、各ダイアグラム左端に示す。また、今回分析した試料はすべて浜田市教育委員会と協議の上、川崎地質株式会社が採取したものである。

分析方法および分析結果

花粉分析処理、および珪藻分析処理は、渡辺（1995a、b）にしたがった。

顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。また、珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。

花粉分析結果を図2、5の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図3、6の珪藻ダイアグラムおよび図4、7の珪藻総合ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また検出数の少ない試料では、出現した種類を「*」で示した。また右端に各分類毎の相対率を示すグラフを付けた。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因（生息域）毎に百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因毎に百分率で表したものである。

花粉分帶

花粉分析結果を基に地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向かって記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

① III带（T10試料No8~3、T24試料No5）

スギ属が卓越し、アカガシ亜属を伴う。その他に高率を示す木本花粉は無い。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が卓越する。

② II带（T10試料No2、1、T24試料No4~2）

スギ属が卓越し、マツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属を伴う。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が卓越する。

③ I 帯 (T24試料No1)

マツ属（複雑管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。その他に高率を示す木本花粉は無い。草本花粉では、キンポウゲ科が極めて高い出現率を示す。

珪藻帯の設定

珪藻分析結果をもとに地域珪藻帯を設定した。珪藻帯の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

(1) T10

① T10-IV 帯 (試料No8)

淡水・底生種が卓越する。他の試料に比べ流水種の*Navicula viridis*、不定種の*Cymbella cuspidata*がやや高率になる。

② T10-Ⅲ 帯 (試料No7~4)

汽水種の*Achnanthes brevipes* が数%の範囲で出現する。完形殻が少なく種まで同定できる個体が少なかった。底生種が卓越し、特に*Pinnularia* 属が高率を示す。

③ T10-II 帯 (試料No3, 2)

アルカリ・止水種の*Cymbella tumida*、不定種の*Cymbella cuspidata* が高率になる。また*Pinnularia* 属は低率になる。

④ T10-I 帯 (試料No1)

Pinnularia 属が高率を示す。

(2) T24

分析試料全体をとおし、珪藻化石組成に差が見られなかった。このことから、全体をT24-I 帯とした。

既知の分析結果との対比

浜田市国府地区では、横路遺跡（土器土地区、原井ヶ市地区）、川向遺跡において微化石分析が実施されてきた（川崎地質㈱、1997, 1998, 2000）。

これら3地点間の対比は表1の様にまとめられ、土器土地区的分析結果（分帶せず、表中ではI 帯とする）はマツ属（複雑管束亜属）にスギ属を伴うことから、原井ヶ市地区的I 帯に相当する。

川向遺跡のI 帯は、スギ属が卓越し、マツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属を伴うことから、原井ヶ市地区的IV 帯に相当する。

今回の結果は、I 帯がマツ属（複雑管束亜属）、スギ属が卓越することから原井ヶ市地区的III 帯に、II 帯がスギ属が卓越し、マツ属（複雑管束亜属）、アカガシ亜属を伴うことから、原井ヶ市地区的、帯、川向遺跡のI 帯に相当する。III 帯はスギ属が卓越し、アカガシ亜属を伴うことから、川向遺跡のII 帯に相当すると考えられる。これらの対比のうち、今回のI 帯の時代観が他遺跡と異なる。したがって、今回のI 帯が清水地区的局地的な植生を表している可能性が指摘できる。

古環境変遷

ここでは、出土遺物から推定された花粉分帯に対応する時期毎に、諸分析結果より推定できる古環境について述べる。

(1) III带期（奈良～平安時代）

①スギ属花粉卓越時期について

山口県東部地域では縄文時代中期頃以降にスギ属花粉が高率で出現するという報告がある（畠中ほか、1980）。ただし堆積年代の錯誤があり、縄文時代中期ではなく縄文時代後～晩期であると考えられる。島根県東部地域ではスギ属花粉が50%を越える分析結果の例はほとんど無いが、スギ属花粉が微増する時期は縄文時代晩期～弥生時代前期とされている（大西ほか、1990）。島根県西部においては分析資料が少ないが、下府川下流の川向遺跡では弥生時代後期にはスギ属花粉が高率になっていた（川崎地質株式会社、2000）。

一方スギ属花粉が卓越する時期の上限は人間活動と関連すると考えられ、地域によりバラツキが大きい。国府地区では今回の結果などから古代末（中世初頭）頃～近世の間にスギ属が激減するようである。

②国府地区的森林植生

スギ属花粉が卓越し、この時期の国府地区にはスギが広く分布していたと考えられる。スギの生態について不明なことも多く、流域の湿地に純林を形成した、あるいは同時に花粉で検出されるカシ類、シイ類と山地斜面で混生していた、などの景観が想定される。

③横路地区 T10近辺の堆積環境

珪藻分析では完形殻が少なく、分带が堆積環境の変化を正確に表していない可能性もある。T10-IV、Ⅲ帶は属レベルでの構成がほとんど同じであり、環境変化がほとんど無かったとする方が妥当であろう。アルカリ・底生種が多く、水循環の良い湿地環境（水田？）であったと考えられる。また汽水種が若干検出され、高潮時などには海水が流入するような環境であった可能性も指摘できる。

④清水地区T24近辺の堆積環境

検出された珪藻化石は完形のものが少なく、種まで決定できる個体が少なかった。しかし淡水種がほとんどでその多くは底生であったこと、トレンチでの堆積状況の観察から、下府川の後背湿地あるいは下府川岸の湿地であったと可能性が指摘できる。また後述のように、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示すことから、水田であった可能性も指摘できる。

⑤横路地区 T10近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が10～30%程度で安定出現する。草本花粉の割合はさほど高くなく、検出種数が多いもののそれぞれの出現率は高くない。イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率がさほど高くないものの安定して検出されること、イネ科（40ミクロン以上）花粉にはイネに由来する可能性が指摘される（中村、1974）ことから、この時期の初期から水田耕作が行われていた可能性が指摘される。今後、プラント・オパール分析を実施して、確認する必要がある。また水田雑草となる草本の種数が豊富なことなどから、現在見るような「水田」ではなく、かなり荒れた状態であったと思われる。

⑥清水地区T24近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が37%の出現率を示す。前述のようにイネ科（40ミクロン以上）花粉にはイネに由来する可能性が指摘されることから、近辺あるいはこの地点で稲作が行われていた可能性も指摘できる。

(2) II带期（奈良時代～平安時代）

①国府地区的森林植生

スギ属花粉、アカガシ亜属花粉が減少傾向を示す反面、マツ属（複維管束亜属）花粉が増加傾向を示す。人為による森林の破壊あるいは改変が始まり、スギ林や照葉樹林が伐採されていったと考えられる。一方で、マツ属（複維管束亜属）は森林破壊に伴う「二次林」として分布を広げた可能性もあるが、「薪炭林」、「里山」として保護されてきた可能性もある。

②横路地区 T10近辺の堆積環境

T10-II带はb、a亜帯の双方に係る。*Melosira* 属や*Rhopalodia gibba*などの浮遊種がやや増加し、やや水深が増したか、近くに沼地ができる可能性もある。あるいは「ため池」が造られた可能性もある。

T10-I带では再び、ほとんどを底生種が占める様になり、D-IV、III带とほぼ同様な環境（水田）で堆積したことが判る。

③清水地区T24近辺の堆積環境

III带期と同様に、T24-I带に含まれ、前の時期と堆積環境の変化はほとんど認められなかった。

④横路地区 T10近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）が高率を示すことから、T10トレンチ周辺には水田が広がっていたと考えられる。特に上部の試料1では、草本花粉の検出種数も量も少くなり現在見られるような管理の行き届いた「水田」であったと考えられる。また、横路遺跡（原井ヶ市地区）では同時期の「水田」の可能性が示されており（川崎地質株式会社、1998）、古代～中世の時期に遺跡内の開発が行われたと考えられる。

下流部の川向遺跡では中世でもまだ「水田」の影響が認められず（川崎地質株式会社、2000）、海水生珪藻も検出される。一方、今回の試料No2、1では海～汽水種はほとんど検出されず、すでに海水の影響をほとんど受けなくなっていることが判る。したがって、古代から中世の間で海岸線が沖に移動していったことが想定される。治水技術の向上にも起因すると可能性があるが、水田の分布は海岸線の位置により規定されていたと考えられる。

⑤清水地区T24近辺の植生

イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率を示すことから、引き続き近辺で稲作が行われていた可能性が指摘できる。また、上部の試料No2ではソバ属花粉が検出され、ソバの栽培が行われていた可能性も指摘できる。

⑥I带期（奈良時代～平安時代）

①国府地区の森林植生

マツ属（複維管束亜属）花粉、スギ属花粉が共に卓越し、花粉組成からは横路遺跡原井ヶ市地区のII带に対比可能である。しかし出土遺物から、堆積時期が異なることが明らかである。したがってここでの花粉組成はT24近辺の局地的な植生を表していると考えられる。

他の調査地点での分析結果から国府地区全体を考えると、前の時期同様に人為による森林の破壊あるいは改変が続き、スギ林や照葉樹林が伐採されていったと考えられる。

②清水地区T24近辺の堆積環境

III、II带期と同様に、T24-I带に含まれ、堆積環境の変化はほとんど認められなかった。

③清水地区T24近辺の植生

キンポウケ科が187%と極めて高い出現率を示す。一方でイネ科（40ミクロン以上）花粉の出現

率は7%にすぎない。木本花粉同様に、草本花粉も局地的な影響が強く現れていると考えられる。

T24は背後（南側）に丘陵が迫ることから、この丘陵にアカマツ（クロマツの可能性もある）が分布していた可能性が高い。また湿地での堆積が推定されることから、キンボウケ科の植物は湿地内に成育していた可能性が高く、小型の3孔型であることからリュウキンカの可能性も指摘される。

まとめ

横路遺跡・杣ヶ平遺跡の調査に伴って実施した花粉・珪藻分析の結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、3帯の地域花粉帯を設定した。
- (2) 硅藻分析結果から、T10地点で3地域珪藻帯を、T24地点で1地域珪藻帯を設定した。
- (3) 従来の分析結果との比較、対比を行った。この結果、T24近辺での局地的な植生が明らかになった。
- (4) 出土遺物から明らかになった時代毎に、遺跡周辺の堆積環境、植生を考察した。特筆すべき点は、以下の事柄である。
 - ①T10ではⅠ帶期に海水の影響を少なからず受けた事が判る。治水技術の向上、あるいは下府川の沖積作用による海岸線の前進によりⅡ帶期（古代～中世）には海水の影響が認められなくなる。
 - ②一方、T24ではⅢ帶期以降、海水の影響を受けることがなかった。
 - ③海岸線の移動に伴って、国府地区に水田が広がった。
 - ④Ⅰ帶期にT24近辺では、リュウキンカなどのキンボウケ科の湿地性植物が繁茂していた。

引用文献

- 大西都夫・千場美樹・中谷紀子（1990）宍道湖底下定新統の花粉群、鳥根大学地質学研究報告、9, 117-127.
- 川崎地質株式会社（1997）横路遺跡（土器土地区）発掘調査における花粉分析、横路遺跡（土器土地区）、54-58、浜田市教育委員会。
- 川崎地質株式会社（1998）横路遺跡（原井ヶ市地区）発掘調査における花粉分析、横路遺跡（原井ヶ市地区）、65-71、浜田市教育委員会。
- 川崎地質株式会社（2000）川向遺跡発掘調査における自然科学分析、川向遺跡、40-48、鳥根県浜田土木建築事務所・浜田市教育委員会。
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13,187-197.
- 浜田市教育委員会・川崎地質株式会社（2001）浜田市遺跡詳細分布調査に伴う自然科学分析委託、P30、内部資料。
- 畠中健一・三好教夫（1980）宇生賀盆地（山口県）における最終氷期最盛期以降の植生変遷、日生態会誌、30, 239-244.

図表一覧

- 図1 調査レゾンの配置
図2 横路地区T10の花粉ダイアグラム
図3 横路地区T10の珪藻ダイアグラム
図4 横路地区T10の珪藻総合ダイアグラム
図5 清水地区T24の花粉ダイアグラム
図6 清水地区T24の珪藻ダイアグラム
図7 清水地区T24の珪藻総合ダイアグラム
表1 浜田市国府地区における地域花粉帯の対比

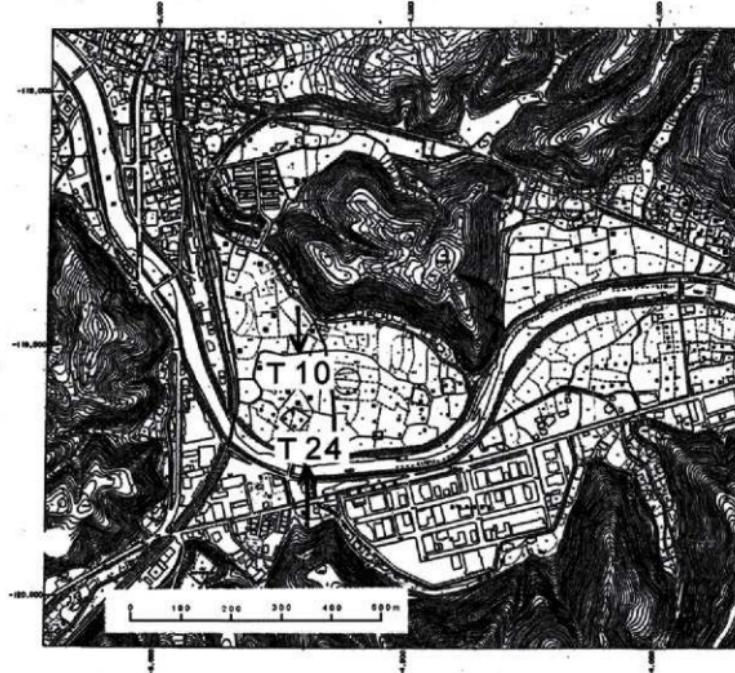


図1 調査トレンチの配置

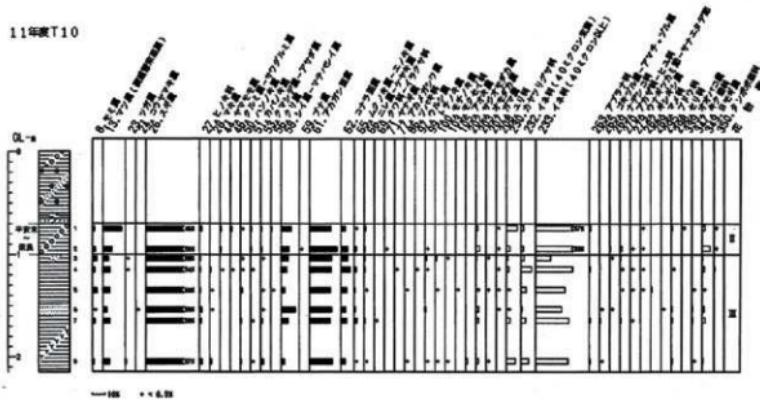


図2 横路地区T10の花粉ダイアグラム

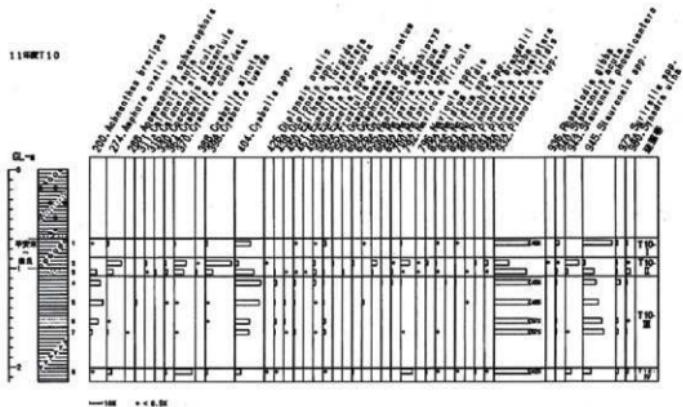
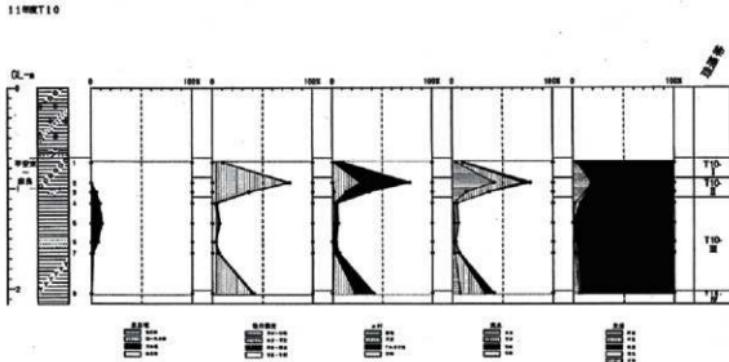


図3 横路地区T10の珪藻ダイアグラム



第4図 横路地区T10の珪藻総合ダイアグラム

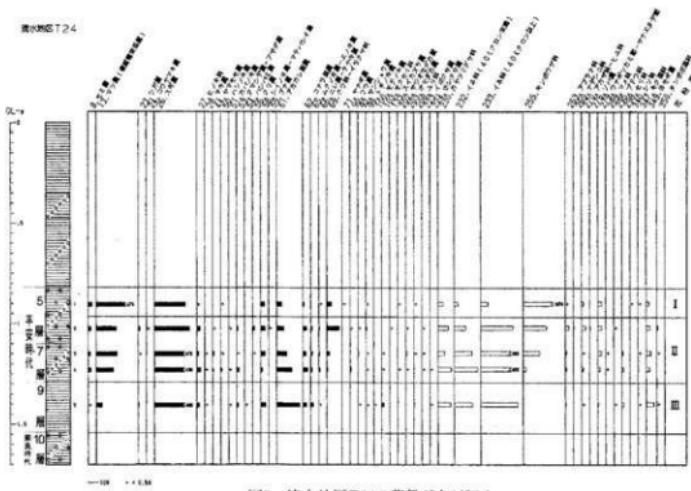


図5 清水地区T24の花粉ダイアグラム

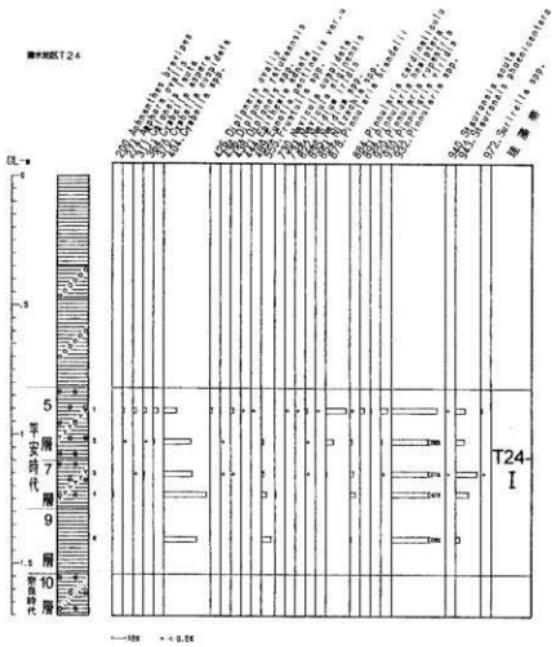


図6 清水地区T24の珪藻ダイアグラム

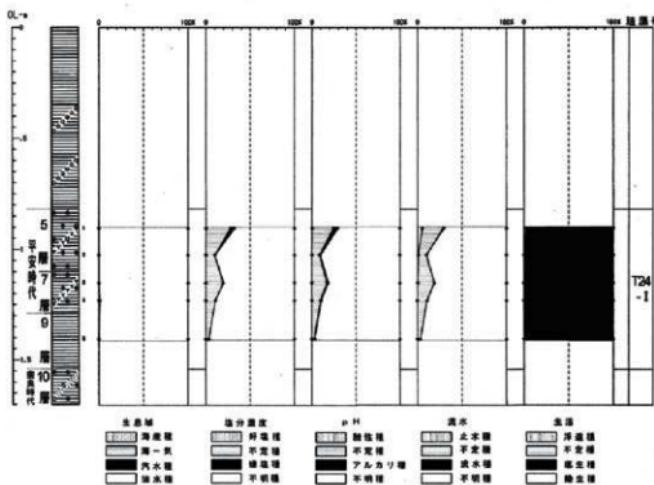


図7 清水地区T24の珪藻総合ダイアグラム

横路遺跡			松ヶ平遺跡			川向遺跡		
土器土地区		原井ヶ市地区	横路地区(T10)		清水地区(T24)	花粉帯		時代
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯
I		I	現代			I		
		II	近世～現代					
		III	近世			II	平安時代	
		IV	平安～南北朝	II	奈良～平安末	II	平安時代	I
				III	奈良時代以前	III	奈良時代	II
								弥生後期～古墳中期

表1 浜田市国府地区における地域花粉帯の対比

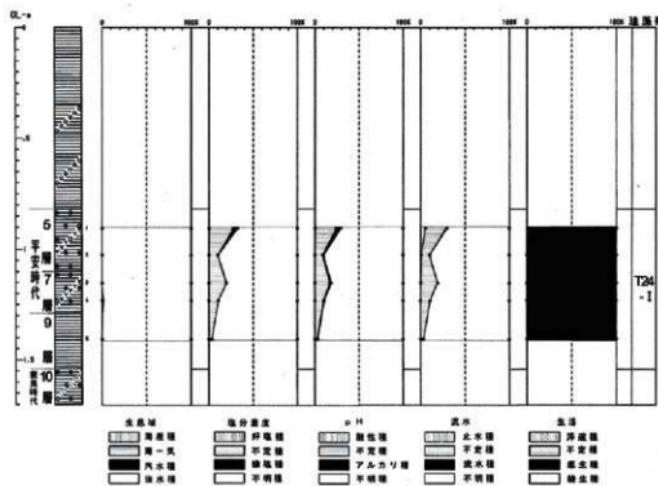


図7 清水地区T24の珪藻総合ダイアグラム

横路遺跡				枕ヶ平遺跡				川向遺跡			
土器土地区		原井ヶ市地区		横路地区(T10)		清水地区(T24)					
花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代	花粉帯	時代
I		I	現代								
		II	近世～現代								
		III	近世					I	平安時代		
		IV	平安～南北朝	II	奈良～平安末	II	平安時代	I	古墳中期～中世		
				III	奈良時代以前	III	奈良時代	II	弥生後期～古墳中期		

表1 浜田市国府地区における地域花粉帯の対比

図 版



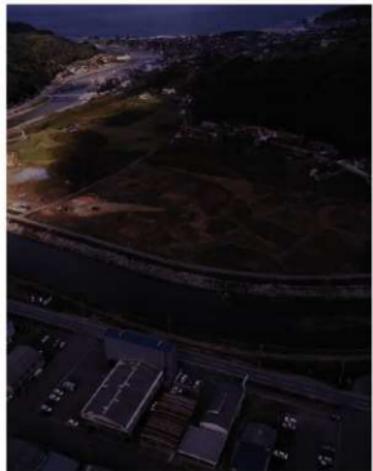
図版1 横路遺跡



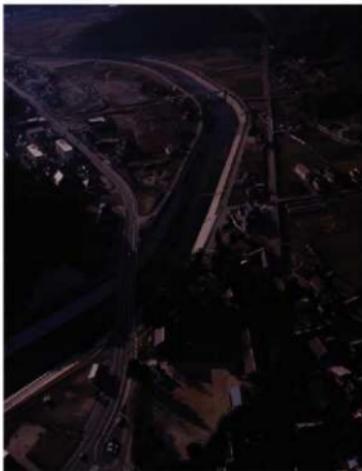
図版2 秋ヶ平遺跡



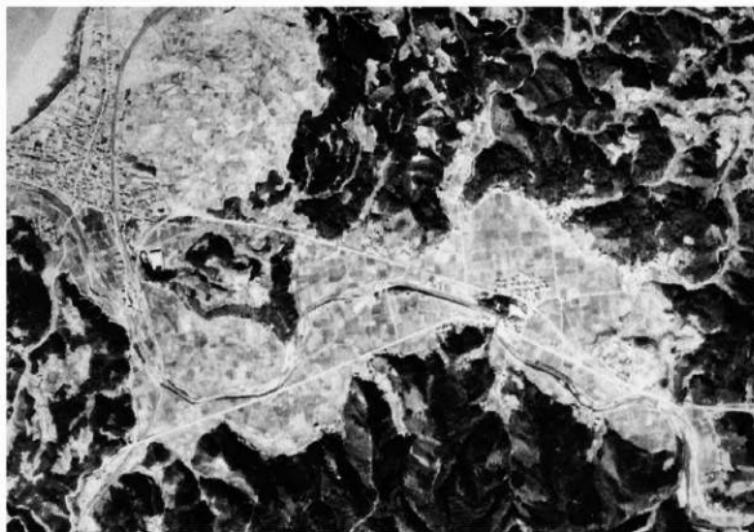
図版3 千足遺跡



図版4 横路地区遠景



図版5 半場地区遠景



図版6 1947年極東米空軍撮映空中写真



図版7 前場紙漉遺跡遠景



図版8 前場紙漉遺跡T1



図版9 前場紙漉遺跡T11



図版10 川向遺跡遠景



図版11 川向遺跡T11



図版12 川向遺跡T11北側



図版13 川向遺跡T11・P2遺物出土状況



図版14 中ノ古墳石室内部



図版15 T1



図版16 T2



図版17 T3



図版18 T4



図版19 T5



図版20 T6



図版21 T7



図版22 T8



図版23 T9



図版24 T10



図版25 T11



図版26 T12



図版27 T13



図版28 T14



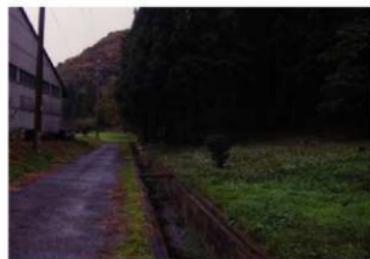
図版29 T14土層



図版30 T18



図版31 T18木質出土状況



図版32 清水地区



図版33 T20



図版34 T21



図版35 T22



図版36 T23



図版37 T24



図版38 T24抗列・石敷検出状況



図版39 T25



図版40 T26



図版41 T26上層



図版42 T26下層



図版43 T15



図版44 T16



図版45 T17



図版46 T19



図版47 T27



図版48 T28



図版49 T28土層



図版50 T29



図版51 T30



図版52 T31



図版53 T32



図版54 T33



図版55 T34



図版56 T35



図版57 T36



図版58 T37



図版59 T38



図版60 T39



図版61 半場口2号墳奥壁



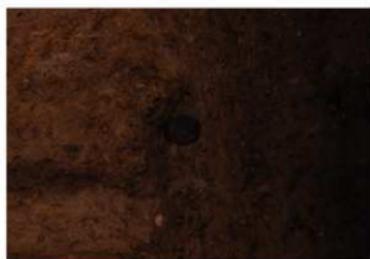
図版62 半場口古墳群遠景



图版63 T40-1



图版64 T40-1奥壁掘形検出状况



图版65 T40-1遗物出土状况



图版66 T40-1側壁抜取痕検出状况



图版67 T40-2



图版68 T40-2奥壁掘形・裏込石検出状况



图版69 T40-3



图版70 T40-4



図版71 T40-5



図版72 T41



図版73 作業状況



図版74 半場口1号填



図版75 半場口1号填石棺



図版76 T42



図版77 T43



図版78 T44



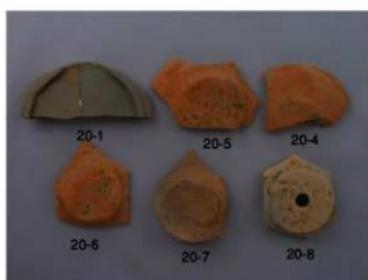
図版79 出土遺物(1)



図版80 出土遺物(2)



図版81 出土遺物(3)



図版82 出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな 書名	はまだしいせきょうさいぶんぶちょうさ こくふちくI 浜田市遺跡詳細分布調査 国府地区I							
副書名	平成11年度～13年度市内遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	柳原 博英							
編集機関	鳥根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 鳥根県浜田市殿町1番地 TEL0855-22-2612(代)							
発行年月日	2002年3月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所有遺跡名	コ一 市町村	下 道番 路号	北 緯 度 ー ー ー	東 經 度 ー ー ー	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
横路遺跡	鳥根県浜田市 上ノ庄 下府町	3 2 2 0 2		34° 55' 17"	132° 06' 52"	20000210 ～ 20000331	285m ²	確認調査
枚ヶ平遺跡	鳥根県浜田市 下ノ庄 下府町	3 2 2 0 2		34° 55' 11"	132° 06' 56"	20001113 ～ 20010330	35m ²	確認調査
千足遺跡	鳥根県浜田市 下ノ庄 下府町	3 2 2 0 2		34° 55' 32"	132° 06' 54"	20001113 ～ 20010330	15m ²	確認調査
仕切遺跡・半場口 古墳群	鳥根県浜田市 下ノ庄 下府町	3 2 2 0 2	L11	34° 55' 28"	132° 07' 23"	2001113 ～ 20010330	120m ²	確認調査
三宅地区 (推定条理制内)	鳥根県浜田市 上ノ庄 下府町	3 2 2 0 2		34° 55' 38"	132° 07' 03"	20011001 ～ 20011017	30m ²	試掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
横路遺跡	集落跡	弥生～室町	溝状遺構	古式土師器 須恵器 中世土 師器 貿易陶磁器 木製品			推定石見国府 域内	
枚ヶ平遺跡	包含層	弥生～平安	杭列・集石	弥生土器 須恵器 土師器				
千足遺跡	集落跡	弥生～平安	柱 跡	弥生土器 古式土師器 須恵器 中世土 師器 貿易陶磁器			石見国府推定 地図	
仕切遺跡 半場口古墳群	集落跡 古墳群	弥生～戰国 古墳後期	柱 跡 石材抜取痕	古式土師器 須恵器 中世土 師器 貿易陶磁器 国産天目 横穴式石室の一部				

浜田市遺跡詳細分布調査 国府地区I

平成11年度～13年度市内遺跡発掘調査報告書

発行 烏根県浜田市教育委員会 2002年 3月
烏根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社